第V章　縄文時代以降の遺構・遺物

1 概　要

遺構は古墳時代・平安時代・江戸時代の3時期のものが確認された。古墳時代の遺構は竪穴住居跡1軒・溝1条、平安時代の遺構は掘立柱建物跡1軒・溝1条と少ない。江戸時代の遺構は墓壙・集石多数、塚状遺構1基である。江戸時代の遺構は縄文時代の遺構の調査が優先されたため、記録の不備が著しい。また、「遺構全体図」中には溝状の遺構が多数記されているが、特に記述の無い限りその内容物から近代以降に比定されるものである。遺物は古墳時代・平安時代・中世の土器と江戸時代の陶磁器・銭貨等が認められた。古墳時代・平安時代の土器は平箱にして5箱程度と少なく、大部分が細片で全体をうかがえるものは少ない。古墳時代の土器はSB112B内からの出土が多く、平安時代の土器は調査区最東端のA地区下段平坦面からの出土が多い。中世の土器はすべてが珠洲焼であるが、1箱に満たないごくわずかな量の出土がみられるだけである。江戸時代の陶磁器は約25箱の出土がある。遺構内からの出土は少ないが、江戸期の遺構の分布と遺物の多数出土する区域がほぼ一致する。また、銭貨は大部分が墓壙内からの出土であり、六道銭として用いられたものである。

2 遺　構

A　古墳時代の遺構（図版319・320）

SI112B　調査区最西端のG08，H08に位置する竪穴住居跡である。小規模な台地の先端部に立地している。住居内および住居付近からは土師器片が出土し、縄文土器の出土分布が希薄であることから本時期の住居とした。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長辺で3.55m、短辺で3.07mを計る。掘込みの深さは確認面からは約20cmで、床面は緩やかな凹凸があるがほぼ水平に広がる。壁は急角度で立ち上がる。柱穴は4本（P124B, P127B, P157B, P158B）であり、南側の2本は住居の掘り方内に他は掘り方外にある。深さは20～30cmである。炉は東よりにある不正円形の地床炉である。床面から30～40cmの深さが掘り込まれ、上面の最大で20cmの範囲がレンズ状に焼けている。

SD549B　D地区の南西、L05，M05からO03にかけて南東方向にはしる溝である。中央の崖にかかる部分では調査時に確認できなかったが、等高線の乱れから台地上と崖下の溝とは一連のものと考えられる。断面形は底部は平坦であり、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。幅は、北側の台地上で約2.2mを計る。南側では平安時代の溝であるSD550Bに切られているため不明であるが、それほど変化はないと思われる。深さは北側の方が深く約50cmを計り、南側では約24cmである。

B　平安時代の遺構（図版319・320）

SB37B　L21，M21に位置する掘立柱建物跡である。3間（6.6m）×1間（北4.2m　南3.8m）の南北棟の建

物で、主軸はほぼ真北に向く。柱間寸法はほぼ等間隔で、2.1～2.3mである。柱掘り方は平面形がほぼ円形もしくは楕円形を呈し、深さは確認面から30～40cmを計る。本建物にかかるM22-9・13・14・15・19・20の包含層中から土師器が集中的に出土するほか、P27Bから土師器甕の口縁部片が出土していることから、本時期の遺構とした。

SD550B いったん埋没した古墳時代の溝SD549Bをほぼ同一位置で掘削し直した溝である。最大幅は2.8mを計るが、断面形はレンズ状を呈し底面と壁とが不明瞭である。確認面からの深さは約41cmを計る。南側では平坦な底面を有し、緩やかに壁が立ち上がる。確認面からの深さは約20cmである。

C 江戸時代の遺構（図版320～323）

墓壙 調査区の西半部には骨片・古銭等を出土する土坑が検出され墓壙と考えられた。また、これらの周辺に存在する土坑の中で、骨片等は認められないが規模やプラン・覆土の状況から同様のものと思われるものが存在する。これらはまとまりをもって分布していることから西側のブロックから順に墓壙群1、墓壙群2……とここでは呼称する。

これらの墓地の形成年代は時期を特定できる遺物の少ないことから明らかにし得ないが、SK523B出土の陶磁器が18世紀後半から19世紀初めに比定されることから、遅くともこの時期には墓地として営まれていたと考えられる。また、地元の古老によれば、調査区内に明治の初頭まで続いた墓地があったとのことなので、下限はこの時期に求められる。

墓壙群1 調査区の最西端の台地先端部および西側斜面に立地する。総数7基で平面形は不整円形を呈するものが多いが、SK113Bのみ長方形である。規模は長径80～150cm、短径70～150cmを計り、確認面からの深さは25～100cmである。斜面に位置するものほど深くなる傾向がある。

墓壙群2 K05，L05の台地上に位置する総数18基の墓壙群である。径60～100cmの円形プランのものが多い。プランを確認した以上の調査は行っていないため、詳細は不明であるが、他の墓壙群と形態や覆土の状況、土坑の分布状況が同様のため墓壙とした。

墓壙群3 L02・01，M02・01、D地区の台地南東縁から崖下にかけて分布する総数39基の墓壙群である。ほぼ等高線に沿って南北方向に配列している。崖下に位置するSK820B～SK832Bの13基はプランを確認しただけで完掘していない。平面形はほぼすべてが不整円形を呈し、規模はP512B・P513Bが径30～40cmと小型であるほかは径50～140cmを計り、確認面からの深さは6～76cmである。骨片が出土するSK524Bを含めて大半が土葬墓と考えられるが、SK505B～SK507Bからは焼骨が認められ、これらは火葬墓と推定される。これらの火葬墓に取り囲まれるように焼土504Bが位置し、何らかの関連施設と思われる。

出土遺物は、SK496B・SK507B・P515B・SK521Bから銭貨が認められる。特にP507Bには皇宋通宝1点、寛永通宝34点がまとまる。また、SK523Bには陶器と磁器の碗の完形品（図版325 4241，4250）が重ねられて正立した状態で出土している。

墓壙群4 M2に位置する11基の墓壙群で、逆「コ」の字状に配列する。個々の墓壙は平面形は径50～100cmの不正円形を呈する。深さは確認面から4～24cmである。覆土は暗褐色土で非常に柔らかく、異臭を放ち完全には腐植しきっていない。SK8より編物片付着の古銭、漆塗の椀片、僧人形が出土しているが、これらは現地に埋め戻した。

墓壙群5 P2・3，Q2・3に分布し、「L」字状に配列する。SK560Bはやや離れたN01に位置するが、こ

こに含めた、主に、径90～130cmを計る円・楕円形の墓壙8基で構成されるが、SK560Bは長方形を呈する。多くはプランの確認のみで完掘していないが、SK2Bの確認面およびSK2812中から骨片が出土している。

墓壙群6　K4・5, L4・5に位置する総数18基を数える墓壙群である。等高線に沿うように北西-南東方向

第92表　江戸時代の墓壙一覧表

墓壙群1

遺構名	長cm	幅cm	深cm	出土遺物
SK105B G08	148	148	26	
SK113B G08	172	80	59	
SK114B G08	134	102	40	
SK115B G08	108	100	32	
SK116B G08	167	165	97	
SK117B G09	98	81	56	
SK122B G08	82	74	67	

墓壙群2

遺構名	長cm	幅cm	深cm	出土遺物
SK794B K05		92		
SK795B K05	94	90		
SK796B K05	94	88		
SK797B K05	82	76		
SK798B K05	74	72		
SK799B K05	102	92		
SK800B K05	92	86		
SK801B K05	80	76		
SK802B K05	86	80		
SK803B K05	64	60		
SK804B K05	80	80		
SK805B K05	83	82		
SK806B K05	86	84		
SK807B K05	54	50		
SK808B K05	77	68		
SK809B K05	78			
SK810B K05	76	76		
SK811B K05		72		

墓壙群3(1)

遺構名	長cm	幅cm	深cm	出土遺物
P512B L02	32	28	12	
P513B L02	37	24	18	
SK496B L02	142	115	49	古銭
SK497B L02	107	105	76	
SK505B L02	73	63	61	焼骨
SK506B L02	60	52	6	焼骨
SK507B L02	118	84	10	古銭・焼骨
SK514B L02	71	47	55	
SK515B L02	127	96	34	古銭
SK520B L01	52	49	61	
SK521B L01	73	65	55	古銭
SK522B L01	69	65	59	
SK523B L01	69	65	59	近世陶磁器完形2
SK524B M01	93	77	32	骨片
SK526B L01	98	83	55	
SK543B L02	89		35	
SK544B L02	88	66	57	
SK812B L01	54	42		
SK813B L01	62	55		
SK814B L01	57	48		
SK815B L01				
SK816B L01	42	42		
SK817B L01	72	65		
SK818B L01	88	80		
SK819B L01	73	68		
SK820B M01	69	59		
SK821B M01	40	34		
SK822B M01				

墓壙群3(2)

遺構名	長cm	幅cm	深cm	出土遺物
SK823B M01	59	52	10	
SK824B M01	66	64		
SK825B M01	56	47		
SK826B M01	62	46		
SK827B K1	107		23	
SK828B L1			9	
SK829B L1	68	54		
SK830B L1	85	85		
SK831B L1	88			
SK832B L1	48	46		
SK833B L1	74	67		
焼土504B L02	80	72	14	

墓壙群4

遺構名	長cm	幅cm	深cm	出土遺物
SK3 M2	75	74	13	
SK30 M2	77	56	6	
SK6 M2	98	69		
SK7 M2				
SK8 M2				
SK9 M2	76	61	8	僧人形・漆椀・古銭
SK10 M2	97	92	7	
SK11 M2	88	78	24	
SK12 M2	91	53	5	
SK13 M2	103	73	4	
SK15 M2	53	34		

墓壙群5

遺構名	長cm	幅cm	深cm	出土遺物
SK1B Q3				磁器片
SK2B P3	93	93		骨片
SK8B P3	152	89		
SK9B P2	95	94	76	
SK10B P2	106		54	
SK15B P2	98	79		
SK16B P2	104	89		
SK560B N01	123	54	20	

墓壙群6

遺構名	長cm	幅cm	深cm	出土遺物
SK2800A K4	105	88		
SK2801A K4	90	82		
SK2802A K4	86	80		
SK2803A K4	93	82		
SK2804A K4	106	96		
SK2805A K4	98	84		
SK2806A K4		82		
SK2807A K4		87		
SK2808A K4	93	82		
SK2809A K4	132	114		
SK2810A L4	76	71	20	
SK2811A L4	104	100		
SK2812A L4				
SK2813A L4	92	85		
SK2814A L4		84		
SK2815A L4	98			
SK2816A L4	97	80		
SK2817A L4	102	90		

に2列に配列する。また、これに沿ってSD1054Aがめぐり、墓地を区画する溝の可能性もある。すべての墓壙が径70～130cmの不整円形を呈するが、ほとんどが完掘されておらず、詳細は不明である。

集石 74基が確認できるが、記録されていないものも存在するため、総数はこれよりも多いと考えられる。集石の多くは位置が記録されているに過ぎないため、規模・掘り込みの有無・覆土等はほとんどが不明である。分布状況は、K5・10・11・13，L5に比較的分布密度が濃い。覆土中に磁器片の認められるものや、集石の分布範囲が近世陶磁器の多数出土する区域と一致することから本時期の遺構とした。

塚状遺構 調査区南西端のM05，N05に位置する。北西部が削平されるほか木の根や盗掘によると思われる掘削により大きく撹乱されており、保存状態は良くないが、ほぼ楕円形の平面形を有する。規模は長径11.5m、短径5.7m、高さ1.3mを計る。墳頂平坦面は長径5.8m、短径2.1mを計り、北側に偏って位置しているが墳丘の南半がやや窪み、墳頂部から急角度で移行していることから、南半部は若干削平されており、本来はこれよりも大きい墳頂平坦面を有していたと考えられる。墳丘は旧地形が微高地状に高まったところに築かれ、墳端は旧表土を削り出して造り出されている。墳丘への盛土は厚いところで約60cmである。また、墳丘の中心が地山に達する撹乱により破壊されているため、主体部は検出されなかった。

3 遺 物

A 古墳時代の土器（図版324 4201～4206）

4201は単純口縁の壺の口縁部と思われる。口径約14cmと推定され、内外面ともにヨコナデされている。4202～4206は底部資料である。すべて平底を有し、底部径は4205が5cmのほかは10cm前後を計る。4202，4206は底部が著しく突出し、4205，4206は底部から緩やかな曲線で丸みをもった胴部へ続く。調整は4202～4205の外面がナデ、4206がヘラケズリ、内面は4203，4206がハケ目調整のほかはナデを行なう。また、4204の外面には炭化物が付着し、これは甕の底部と考えられる。

B 平安時代の土器（図版324 4207～4230）

大部分が土師器で占められ、須恵器はごく少量である。4207～4211は甕の口縁部である。いずれも口径は20cm前後と推定されロクロナデで調整されている。4207は口縁部が外傾気味に急角度で開く形態をし、口縁端部は幅広い面をもつ。口縁部と頸部の接合部が肥厚している。4208，4209，4211は、内彎気味に立ち上がる口縁部をもつ。4208，4209は口縁端部が丸くおさまり、4211は口縁端部に狭い面をもつ。4210は、直線的に開く口縁部をもち、口縁中央部でやや肥厚する。頸部以下に炭化物が付着している。4214は甕の胴部片である。外面は平行タタキ目痕を残し、内面には無文の当て具による凹凸が認められる。4212は小型の甕あるいは壺の口縁部であると考えられる。口縁端部に向かって肥厚しながら直線的に外傾し、端部は水平に押さえられ幅広い面をもつ。内面・外面ともにロクロナデされる。

4213は鍋の口縁部である。内彎気味に立ち上がる口縁をもち、口縁端部は丸くおさまる。外面はロクロナデ、内面はカキ目調整される。

4215～4225は杯である。4215，4216は内外面ともにロクロナデによって調整され、外面にはロクロナデによる凹凸を明瞭に残している。4215は胴部が内彎気味に立ち上がり、口唇部でやや外反する。底面は回転糸切りである。4216は直線的に開く口縁部をもっている。4217～4223は杯の底部である。底径は6cm前後

と推定されるものが多い。4217は杯部外面下部に黒斑を残し、調整は斜方向のナデである。内面はロクロナデされ、底面は回転糸切りである。4218～4221は内外面ともにロクロナデされ、底面は回転糸切りである。4222，4223は保存状態が悪く、器壁があれているので調整は不明であるが、ロクロナデと思われる。4224，4225は内黒土器の底部である。4224は外面はロクロナデ、内面はヘラミガキの後黒色処理されている。

4226，4227は須恵器有台杯の底部である。内面・外面ともにロクロナデで調整されている。4226の底面は、回転篦切りの跡をナデにより消している。

4228～4230は須恵器の胴部片である。4228は外面は格子タタキ痕、内面は平行当て具痕を残す。4229，4230は外面に平行タタキ痕、内面に同心円の当て具痕を残している。

C　中世の土器（図版324　4231～4235）

珠洲系陶器が15点出土している。胴部～底部の細片がほとんどで、口縁部片は1点しか出土していない。4231は摺鉢の胴部片で、外面はロクロナデで調整されている。内面はロクロナデの後、幅約2.4cmで8条を一単位とする櫛目が施されている。4232は片口鉢口縁部である。4233～4235は底部資料で、4233の外面に平行タタキ目痕が残るほかは、内面・外面ともにロクロナデ調整である。

D　近世陶磁器（図版325　4236～4261）

4236～4241は肥前系の磁器碗である。口径9～12cmの中型のものが多い。4236，4239～4241は、灰白色の胎土で、器壁も厚く作られており、「くらわんか碗」と考えられる。4236は草花文が施され裏底には「上」の字が書かれる。高台には砂目痕が残っている。18世紀代のものである。4241は外面に直径約3cmの斜線に充填された円ひとつと、径約1.1cmの小円2つを一単位として、3単位の円文がコンニャク判で施文されている。見込には二重の円のなかに五弁花のコンニャク判がある。また裏底面には判読不能の文字が書かれている。高台に砂目痕が残る。18世紀後半のものである。4239，4240は口縁部がやや外方に開く端反碗である。18世紀後半から19世紀前半の製作である。4239は割り筆により格子が描かれる。見込は蛇ノ目釉ハギされ、重ね焼きの際の高台溶着痕が残る。見込中央には、「井」の字か「※」がある。4240は割り筆で施文され、見込中央に斜格子が描かれる。また、見込に重ね焼きの際の溶着痕が環状に残っている。4237，4238は薄手の作りで、白色の胎土に黒色のわずかな微粒子が含まれる。4237は草花が描かれ、4238は外面に色絵で牡丹、内面に花菱が施される。

4242～4249は磁器皿である。4242は笹と草が描かれ、底部は蛇ノ目凹型高台である。高台径が、口径と比べて大きい。18世紀後半から19世紀前半のものである。4243は崩した唐草文が施される。見込は蛇ノ目釉ハギされ、中央にコンニャク判による五弁花がある。17世紀後半から18世紀代のものと思われる。4244は口縁部が失われているが、見込中央に鷺、上に山、左右に松が配されている。4245～4247は青磁皿である。4245，4246は口縁部片で、外反しながら開く端反形を呈する。4247は底部片で高台には釉がかけられず、見込蛇ノ目釉ハギ内に溶着痕がのこる。18世紀以降のものと思われる。4248は斜格子が割り筆によって描かれている。4249は口径推定24cmを計る大皿で口縁部に渦巻きが描かれているが、見込中央部にも何らかが描かれていたと思われる。18世紀から19世紀前半のものである。

4250～4253は陶器碗である。4250は瀬戸美濃系の柳茶碗である。小礫の混じった乳白色のやや粗い胎土で、鉄釉で柳が描かれ、黄褐色がかった透明の釉がかけられる。18世紀後半から19世紀前半のものである。4252は乳白色のやや粗い胎土。貫入が著しい。呉須で桜花が描かれている。4251，4253は乳白色のやや粗

い胎土で、黄褐色の釉がかけられ、貫入が著しい。17世紀後半から18世紀代の唐津系の製品である。

4254は陶器皿である。見込蛇ノ目釉ハギされ、内外面ともに鉄釉の上に緑釉がかけられている。乳白色のやや粗い胎土である。

4255は口径7cm、底径3cmと推定される小型の皿形の製品で、口縁は外方へ開いていく。内面のみに釉がかけられている。見込みにつまみがつけられていたと思われる痕跡があり、蓋と考えられる。底面は回転糸切りである。

4259は甕の底部と思われる。丸腰を呈し、胎土色は赤橙色である。内外面には鉄釉がかけられる。

4256，4260は陶器鉢である。4256は直線的に開く形態で口縁部は肥厚する。胎土は灰色で、内外面ともに灰釉がかけられている。4260は胴部が直線的に開き、口縁部が急角度で外反する。口縁部が緩やかな波状に傾くが、意図的に波状に仕上げたものか、成形・焼成時のゆがみによるものであるのかは、現存する部分からではわからない。胎土は灰色～赤褐色を呈し、内外面に鉄釉がかけられる。見込にハマ溶着痕が認められる。

4257，4258は唐津系と思われる摺鉢である。細礫を含む赤褐色を呈する胎土で製作されている。4257は口縁を折り返して肥厚させ、内外面ともに鉄釉がかかる。4258は口縁がやや外反する形態をもち、内面には幅約1.8cm、9条一単位の櫛目が施される。内面・外面ともに鉄釉がかけられる。

4261は京焼系の土瓶と考えられるが、口・耳を欠損している。緻密な黄土色の胎土で非常に薄手に作られている。外面には白泥をかけ、その上に透明の釉がかけられる。鉄釉・緑釉で色絵が描かれ、胴部下半には鉄釉で描かれた二重線がめぐる。

E　その他の遺物（図版325・326）

砥石（4262，4263）　4262は角柱状の砥石で、上下両端は欠損しているが、現存面はすべて砥面として利用されている。頁岩製。4263も角柱状になると思われるが、使用により断面三角形状に擦りへっている。上下両端は欠損しているが、現存面はすべて砥面として使用されている。ホルンフェルス製。

土製人形（4264，4265）　2点を図化した。どちらも素焼きの製品で、頭部を欠損しているが残存部分から

第93表　銭貨一覧

No	出土位置	種別	外径 cm	穿幅 cm	銭厚 cm	重量 g
4266	SK496B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.15	4
4267	SK496B L02	寛永通宝	2.3	0.6	0.1	2.2
4268	SK496B L02	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	2.5
4269	SK496B L02	寛永通宝	2.3	0.6	0.1	2.9
4270	SK496B L02	寛永通宝	2.4	0.5	0.1	3.1
4271	SK507B L02	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	2.2
4272	SK507B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.5
4273	SK507B L02	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	3.3
4274	SK507B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.2
4275	SK507B L02	寛永通宝	2.4	0.5	0.1	3.5
4276	SK507B L02	寛永通宝	2.6	0.6	0.1	2.6
4277	SK507B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	2.4
4278	SK507B L02	寛永通宝	2.4	0.6	0.15	3.6
4279	SK507B L02	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	3.1
4280	SK507B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	2.9
4281	SK507B L02	寛永通宝	2.3	0.6	0.1	2.5
4282	SK507B L02	寛永通宝	2.4	0.6	0.15	3.2
4283	SK507B L02	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	2.8
4284	SK507B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.1
4285	SK507B L02	寛永通宝	2.2	0.7	0.1	2.5
4286	SK507B L02	寛永通宝	2.5	0.7	0.1	2.6
4287	SK507B L02	寛永通宝	2.3	0.5	0.1	3.2
4288	SK507B L02	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	3.2
4289	SK507B L02	寛永通宝	2.3	0.6	0.1	3.1
4290	SK507B L02	寛永通宝	2.3	0.6	0.1	2.6
4291	SK507B L02	皇宋通宝	2.4	0.7	0.1	3.3
4292	SK507B L02	寛永通宝	2.3	0.6	0.1	2.1
4293	SK507B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.4
4294	SK507B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.3
4295	SK507B L02	寛永通宝	2.2	0.7	0.1	2.1
4296	SK507B L02	寛永通宝	2.3	0.7	0.1	3.1
4297	SK507B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.4
4298	SK507B L02	寛永通宝	2.2	0.7	0.1	2.2
4299	P512B,P513B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.6
4300	P512B,P513B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.6
4301	P512B,P513B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.2
4302	P512B,P513B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	3.9
4303	P512B,P513B L02	寛永通宝	2.5	0.6	0.1	4
4304	SK521B L01	寛永通宝	2.3	0.6	0.1	2.2
4305	SK521B L01	寛永通宝	2.3	0.6	0.1	3.1

は七福神のひとつである大黒と思われる。

銭貨（4266~4305）　68点出土している。これらのうち60点は江戸時代の墓壙の覆土中より出土しているもので、六道銭である。なかでもP507Bからは34点が集中して出土している。ほとんどが寛永通宝であるが、P507B出土のうちの1点は皇宋通宝、11点は判読不能であった。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　はじめに

清水上遺跡（新潟県北魚沼郡堀之内町大字根小屋所在）は、魚野川の段丘上に立地する縄文時代及び奈良・平安時代～近世の遺跡である。今回発掘調査の際に提起された問題点について、自然科学的手法を用いた調査を行うことになった。そこで、協議のうえ以下に示す3つの課題について、それぞれに対応する手法を選択して調査を行う。

A　当時の古環境と水利用について

集落跡1と集落跡2の中には、2か所小谷が存在する。その小谷部には、縄文時代中期の遺物が多量に捨てられている場所があり、いわゆる「土器捨て場」と考えられる。これらの土器捨て場の中に、小谷が水場としても利用されていたと予想される捨て場Aと現在でも水がしみ出している捨て場Bがある。そこで、小谷内の堆積物ならびに谷内から出土した木材を対象にして珪藻分析・花粉分析・材同定を行い、水場の状況や付近の植生について検討する。また、木材については、放射性炭素年代測定をあわせて行い、小谷が形成された年代の指標を得る。対象としたのは集落1に伴う捨て場AのL2-21とI2-22、および集落2に伴う土器捨て場BのH04-25である。

B　縄文時代中期の各不明遺構および埋設土器の性格について

縄文時代中期のものとみられる不明遺構などの遺構がいくつか検出されており、それぞれ、貯蔵穴や墓などといった用途が推定されているが、確証が得られていない。動植物には様々な元素が含まれているが、その中でもリンは土壌中での移動が少ない。そのため、内容物が分解してしまった土坑内でもその痕跡としてリンの濃集が見られる場合がある。また、リンに加えて、骨の成分として代表的な元素であるカルシウム分析もあわせて行うことにより、遺体埋葬の有無などが推定された例も多い（中根1992など）。今回の分析では、各不明遺構および埋設土器の性格に関する情報を得る目的で、リン・カルシウム分析を行う。今回対象とする遺構は、捨て場に位置するSX601B・SX607BとSX608B・胎盤収納または幼児の埋葬施設の可能性がある埋設土器（783B、Pit727B）、など主に集落跡1で検出された。

なお、土壌中で流亡しにくいリン酸も年月の経過に伴い、当時の含有量をそのまま保持することはできない。したがって、含量対比のための対照試料が必要とされる。今回は、捨て場AのI2-22と、埋設土器などが出土した場所の地山試料を対照試料とした。

C　土坑内の赤色物質の検討

時期不明の土坑（E③地区SK238C、SK239C）の底面には、赤変部分が認められる。弥生時代～古墳時代の墓では、底面にベンガラや水銀朱などの顔料が認められる場合もあることから、この土坑も墓である可能性があるとされる。そこで、赤変部分と非赤変部分についてX線回折を行い、両者を比較することによって、

特に顔料の有無について調べ、赤変部分の成因に関する検討を行う。

2　試　料

小谷内の土壌試料は、H04-25とI2-22，L2-21から採取されたものである。H04-25は集落2に伴う捨て場Bにあたり、I2-22，L2-22は集落1に伴う捨て場Aにあたる。花粉分析および珪藻分析では、これらの地点から採取された試料のうち、目的等を考慮にいれて8点を選択した。分析を行った試料については、各分析の結果とあわせて示す。

樹種同定ならびに放射性炭素年代測定に用いた木材は、H04-25で検出されたものである。

リン・カルシウム分析に用いた試料は、先に述べた各遺構・土器内の覆土および対照試料とした小谷堆積物である。分析を行った試料の詳細については、分析の結果とあわせて記す。

X線回折については、SK238CとSK239Cについて、それぞれ赤変部分と非赤色部分の2点ずつ計4点の分析を行う。

3　分析方法

A　珪藻分析

試料を湿重で約7g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適当量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、半分以上残存するものを対象に同定・計数する。

種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot（1986・1988・1991ab）、K.Krammer（1992）などを用いる。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示した。

B　花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理による試料の泥化ならびに腐植酸の溶解、フッ化水素処理による試料の泥化、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝9:1）によるセルロースの分解の順に行い、堆積物中から花粉化石を濃集する。なお、無機質が多い試料については、重液分離（臭化亜鉛、比重2.2）を行い有機物を濃集させた。

処理後の残渣の一部についてグリセリンで封入してプレパラートを作成し、その中に出現した全ての種類について同定・計数を行う。

C　放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学理学部木越研究室に依頼した。

D　樹種同定

剃刀を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の徒手切片を作製し、ガム・ク

ロラールで封入してプレパラートを作製する。生物顕微鏡で、木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

E　リン・カルシウム分析

リンおよびカルシウムの測定は、土壌標準分析・測定法委員会（1986）、土壌養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）などを参考として、以下の操作工程で行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

F　X線回折

土坑内試料については、赤変部分のみをできるかぎり採取して微粉砕した。この微粉砕試料をX線回折測定用のアルミ板に装着し、次の条件でX線回折分析を行った（足立，1980；日本粘土学会，1987）。測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐，未公表）により検索した。

装　置：島津制作所製XD-3A

Target：Cu（K α）	Scanning Speed：2°/min
Filter：Ni	ChartSpeed：2cm/min
Voltage：30KVP	Divergency：1°
Current：30mA	Recieving Slit：0.3mm
Count Full Scale：5,000C/S	Scanning Range：5～45°
Time Constant：2.0sec	

4　縄文時代中期土器捨て場（水場？）付近の古環境と周辺植生

A　結　果

(1)　珪藻分析

珪藻分析結果を第94・95表・第142図　に示す。珪藻化石は、何れの試料も非常に少なく、また珪藻殻の保存状態も悪い。少ないながらも産出する珪藻化石は、H04-25では*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*など耐乾性の強い陸生珪藻のA群（伊藤・堀内1991）とされるものである。また、I2-22では陸生珪藻以外に*Eunotia pectinalis* var. *minor*、中～下流性河川指標種（安藤1990）の*Meridion circulae* var. *constrictum*なども産出する。

一方、L2-21Ⅱb層中部から得られた珪藻化石の産状は、陸生珪藻（小杉1986）と水生珪藻とがほぼ半々ずつ産出した。陸生珪藻の主な種は、*Pinnularia subcapitata*, *P. molaris*, Caloneis aerophila, *Stauroneis obtusa*

第94表　H04-25，I2-22の珪藻分析結果

Species Name	Ecology			H4-25		12-22					
	H. R.	ph	C. R.	4	7	1	3	5	7	9	10
Caloneis sp.	Meh			—	—	1	—	—	—	—	—
[・A]*Caloneis aerophila* Bock	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	1	—	—	—	—
Caloneis bacillum (Grun.) Mereschkowsky	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	1	—	—	—
[・A]*Caloneis hyalina* Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—	—	—	—	—	—
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	—	2	—	—	—	—	—
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	1	—	—	—	—	—
Eunotia cristagalli Cleve	Ogh-hob	al-il	ind	—	—	3	—	—	—	—	—
[O] *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	al-il	ind	—	—	4	1	1	—	—	—
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	—	2	—	—	—	—	—
#*Fragilaria pinnata* var. *lancettula* (Schum.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	1	—	—	—	—	—
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	2	—	—	—	—	1
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	—	2	—	—	—	—	—
[・A] *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	2	4	—	1	—	—	—	1
##[K] *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	—	—	3	—	1	—	—	1
#[・A] *Navicula mutica* Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	2	1	2	1	—	—	—	—
[・A] *Neidium alpinum* Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	—	—	1	—	—	—	—	—
[・A] *Pinnularia borealis* Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	1	1	1	—	—	—	—	—
[・A] *Pinnularia borealis* var. *rectangularis* Carlson	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—	—	—	—	—	—
Pinnularia divergens var. *elliptica* (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ind	ind	—	—	1	—	—	—	—	—
[O] *Pinnularia gibba* Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	1	—	—	—	—	—
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	2	—	—	—	—	—	—
[・B] *Pinnularia subcapitata* Gregory	Ogh-ind	ind	ind	—	2	1	—	—	—	—	—
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	4	—	—	—	—	—	—
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O. Muller	Ogh-hil	al-bi	ind	3	19	8	—	—	—	—	—
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	1	—	—	—	—	—
[・B] *Staruoneis obtusa* Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	1	—	—	—	—
Marine Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species				0	0	1	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				11	34	36	5	3	0	0	3
Tatal Number of Diatoms				11	34	37	5	3	0	0	3

※凡例は、第95表と同じ

である。これらの陸生珪藻は、水中にも生育可能な陸生珪藻のB群（伊藤・堀内1991）とされるものが多い。水生珪藻では、流水不定性の *Gomphonema parvulum, Eunotia cristagalli, E. lunaris* var. *subarcuata*、真流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum* が多産する。このうち、*Meridion circulae* var. *constrictum* は、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する中～下流性河川指標種（安藤1990）とされる。また、Eunotia cristagalliは、北ヨーロッパの水溜まりや小川などに非常に希に認められる種（Hustedt1959）であり、今回5%と比較的多く認められたのはめずらしい。なお、珪藻化石の産出の少なかったL2-21 Ⅱa層中部（試料番号2）の珪藻化石群集も基本的に試料番号5に近似する。

(2)　花粉分析

花粉分析結果を、第96表・第143図に示す。花粉化石は、H04-25からは比較的多く検出されたが、I2-22からはほとんど検出されなかった。全体的に保存が悪く、シダ類胞子の割合が高い。

H04-25では、シダ類胞子の割合が著しく高い。木本花粉では、ブナ属・コナラ属コナラ亜属・ハンノキ属の割合が高く、カエデ属・トチノキ属などを伴う。草本花粉では、イネ科の割合が高い。

L2-21でも花粉．胞子化石はほとんど検出されない。試料番号2からキク亜科の花粉化石が1個体、試料番号5からシダ類胞子の化石が1個体検出されたにすぎなかったので、表化しなかった。

(3)　樹種同定

木材は、コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）に同定された。主

第95表　L2-21の珪藻分析結果

Species Name	Ecology			L2-21地点	
	H. R.	pH	C. R.	2	5
[N] *Aulacosira ambigua* (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	—	1
[・A] *Caloneis aerophila* Bock	Ogh-ind	al-il	ind	—	8
Caloneis bacillum (Grun.) Mereschkowsky	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	1
[O] *Cymbella naviculiformis* Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	1	—
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind	1	—
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	—	2
Eunotia crista-galli Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	1	5
Eunotia gracillis (Ehr.) Rabenhorst	Ogh-hob	ind	l-bi	—	1
[O] *Eunotia incisa* W. Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	—	1
Eunotia lunaris var. *subarcuata* (Naeg.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	3	7
[O] *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	3	2
[・B] [O] *Eunotia praerupta* Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	—	1
Eunotia tenella (Grun.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	—	1
[O] *Frustulia rhomboides* var. *saxonica* (Rabh.) De Toni	Ogh-hob	ac-bi	l-bi	—	1
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	1	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	4	9
[Q] *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	2	4
##[K] *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	3	8
#[Q] *Navicula mutica* Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	2	2
[・A] *Neidium alpinum* Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	1	6
[・B] *Nitzschia nana* Grunow	Ogh-ind	ind	ind	—	1
Nitzschia pleacea Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	—	1
Pinnularia appendiculata (Ag.) Cleve	Ogh-hob	ind	ind	1	—
[Q] *Pinnularia borealis* Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	1	—
[O] *Pinnularia gibba* Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	—	1
#*Pinnularia interrupta* W. Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	1	—
Pinnularia lenticuloides H. Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	l-ph	—	1
#*Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	—	1
#[・B] *Pinnularia molaris* Grunow	Ogh-ind	ind	ind	1	7
[・B] *Pinnularia subcapitata* Gregory	Ogh-ind	ind	ind	2	18
[O] *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	—	2
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O. Muller	Ogh-hil	al-bi	ind	—	1
[・B] *Stauroneis obtusa* Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	2	7
Marine Water Species				0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0
Brackish Water Species				0	0
Fresh Water Species				31	101
Total Number of Diatoms				31	101

凡例

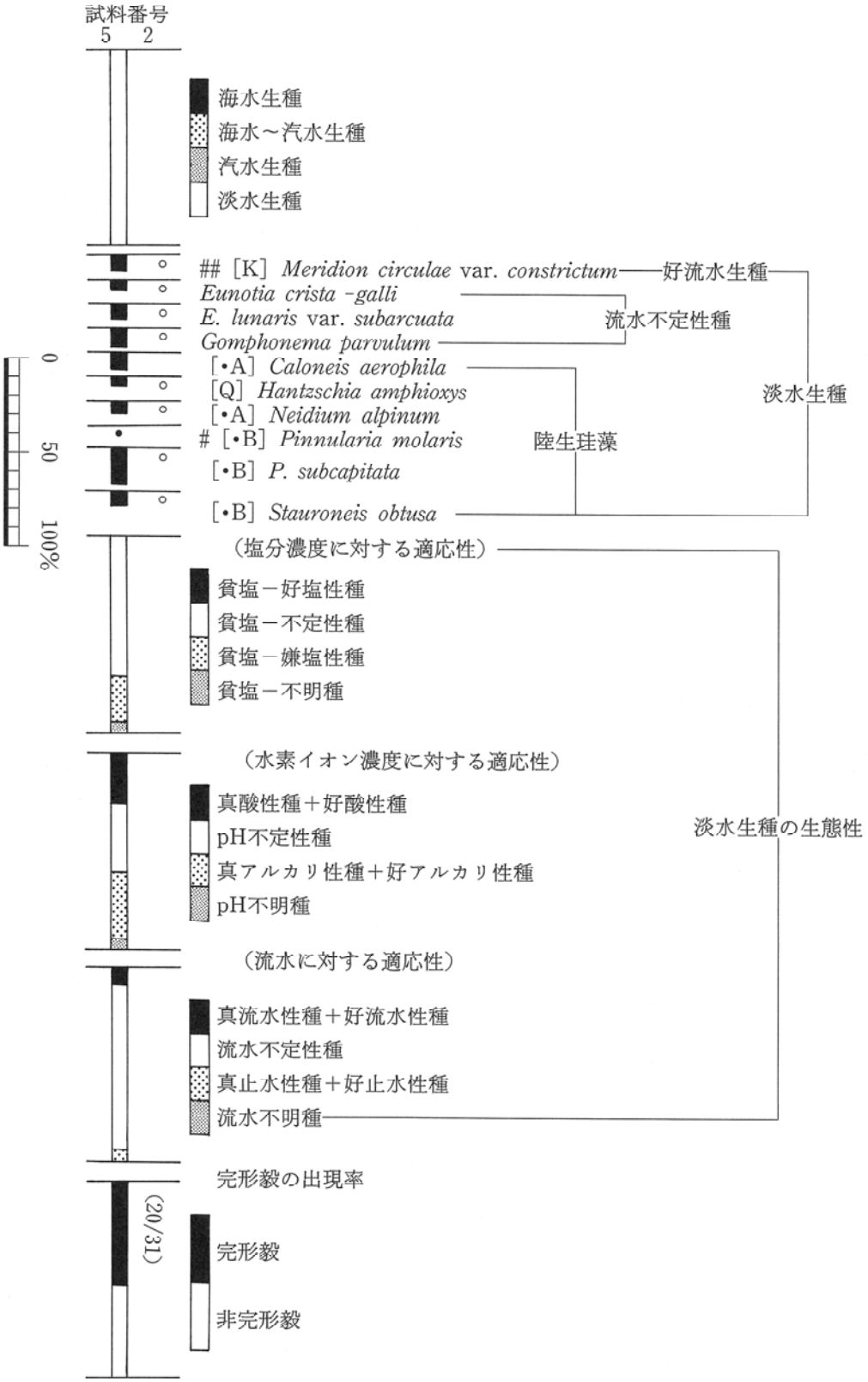
H. R.:塩分濃度に対する適応性
- Ogh-hil:貧塩好塩性種
- Ogh-ind:貧塩不定性種
- Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi:真アルカリ性種
- al-il:好アルカリ性種
- ind　;pH不定性種
- ac-il:好酸性種
- ac-bi:真酸性種
- unk　:pH不明種

C. R.:流水に対する適応性
- l-bi:真止水性種
- l-ph:好止水性種
- ind :流水不定性種
- r-ph:好流水性種
- r-bi:真流水性種
- unk :流水不明種

環境指標種群

[K]:中～下流性河川指標種、[N]:湖沼沼沢湿地指標種、[O]:沼沢湿地付着生種、[Q]:陸域指標種、#:好汚濁性種、##:好清水性種、陸生珪藻（[・A]:A群、[・B]:B群）

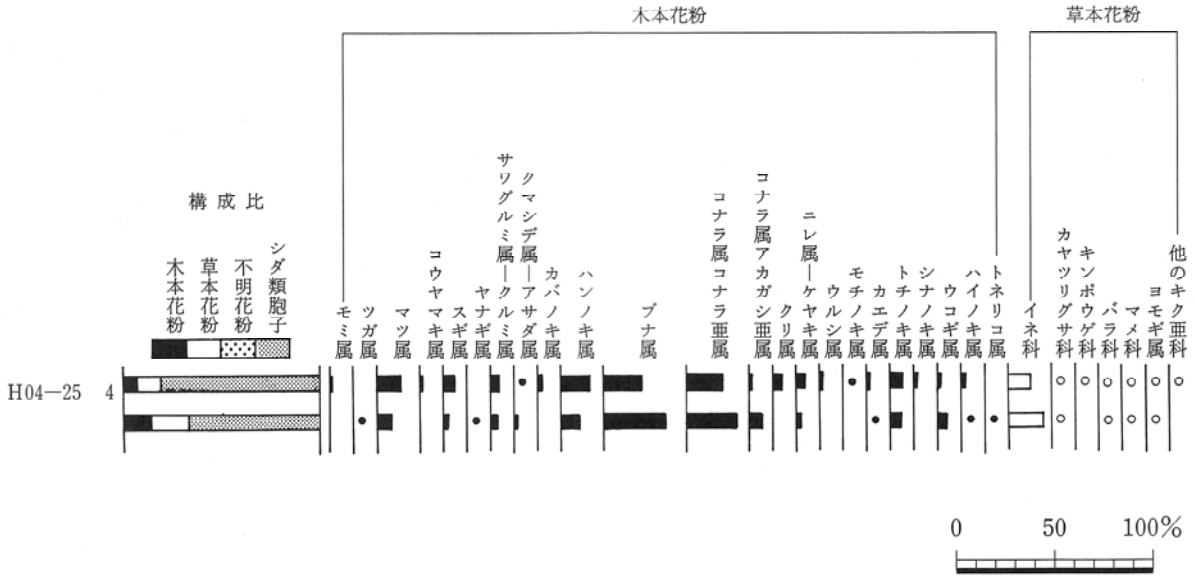


第142図　L2-21の主要珪藻化石分布図

各種類の産出率は、産出した個体の総数を基数として百分率で算出した。また、生態分類（海水・汽水・淡水生種）および完形穀に関しては産出個体の総数、淡水生種の適応性に関しては淡水生種の総数を基数とした比率で表した。なお、●は1%未満、○は基数が100個未満の試料について出現した種類を表す。種類名の頭にある記号は、[K]：中～下流性河川指標種、[Q]：陸域指標種、#：好汚濁性種、##：好清水性種、[A]：陸生珪藻のA郡、[B] 陸性珪藻のB郡を表す。

第96表　H04-25，I2-22の花粉分析結果

種類（Taxa）　試料番号	H4-25 4	H4-25 7	I2-22 1	I2-22 3	I2-22 5	I2-22 7	I2-22 9	I2-22 10
木本花粉								
モミ属	2	—	—	—	—	—	—	—
ツガ属	—	1	—	—	—	—	—	—
マツ属	20	15	1	2	1	—	—	—
コウヤマキ属	2	—	—	—	—	—	—	—
スギ属	8	4	—	—	—	—	—	—
ヤナギ属	—	2	—	—	—	—	—	—
サワグルミ属—クルミ属	7	7	—	—	—	—	—	—
クマシデ属—アサダ属	1	3	—	—	—	—	—	—
カバノキ属	4	—	—	—	—	—	—	—
ハンノキ属	23	20	—	—	—	—	—	—
ブナ属	31	67	—	—	—	—	—	—
コナラ属コナラ亜属	30	54	—	—	—	—	—	—
コナラ属アカガシ亜属	2	13	1	—	—	—	—	—
クリ属	6	—	—	—	—	—	—	—
ニレ属—ケヤキ属	6	4	—	—	—	—	—	—
ウルシ属	2	—	—	—	—	—	—	—
モチノキ属	1	—	—	—	—	—	—	—
カエデ属	2	2	—	—	—	—	—	—
トチノキ属	10	11	—	—	—	—	—	—
シナノキ属	2	—	—	—	—	—	—	—
ウコギ科	2	8	—	—	—	—	—	—
ハイノキ属	3	1	—	—	—	—	—	—
トネリコ属	—	1	—	—	—	—	—	—
草本花粉								
イネ科	261	256	2	—	—	1	—	—
カヤツリグサ科	2	8	—	—	—	—	—	—
キンポウゲ科	1	—	—	—	—	—	—	—
バラ科	1	1	—	—	—	—	—	—
マメ科	1	2	—	—	—	—	—	—
ヨモギ属	9	7	—	—	—	—	—	—
他のキク亜科	1	—	—	2	—	—	—	—
不明花粉	2	5	—	—	—	—	—	—
シダ類胞子								
シダ類胞子	1844	988	164	101	64	59	32	16
合計								
木本花粉	164	213	2	2	1	0	0	0
草本花粉	276	274	2	2	0	1	0	0
不明花粉	2	5	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	1844	988	164	101	64	59	32	16
総花粉・胞子	2286	1480	168	105	65	60	32	16



第143図　H04-25の花粉化石分布図

出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

な解剖学的特徴などを以下に記す。

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

(4)　放射性炭素年代測定

測定の結果、2510 ± 70yBP（1950年よりの年数）の値を得た（Code No. Gak-17501）。

B　考察

分析の結果、H04-25とI2-22の堆積物では珪藻化石が非常に少なく、検出された種類は、地表など乾いた場所に生育する陸生珪藻の仲間などである。このことから、小谷は表土からの崩落等によって、埋積が進んだことが示唆される。このように、今回の結果からみる限り土器捨て場Ａの一部とＢ小谷に水場は存在しなかったと言わざるを得ない。

一方L2-21では、珪藻化石は陸生珪藻と水生珪藻とがほぼ半々づつ検出され、また陸生珪藻の多くは乾いた環境以外に水中にも生育する種が多かった。水生珪藻としたEunotia crista-galliの産出は非常に珍しい。その生育環境は前述した通りだが、それ以外にアラスカでゼラチン質で覆われた岩石表面や泥炭池に生えたコケに付着して生育する（Foged1981）こと、ニュージーランドで泥炭の発達する沼沢地に浮遊するアカウキクサ属に付着して生育する（Foged1979）ことなどが報告されている。このことから、本種は泥炭を形成するような弱酸性水域や水から離水した好気的環境にも耐性がある種と考えられる。また、流水域を指標する中～下流性河川指標種も比較的多く伴なっている。これより、本地点に、縄文時代中期前葉～中葉頃水域が存在したと考えられる。なお、L2-21の小谷谷底直上付近の堆積物は灰～灰褐色の砂や粘土～シルトで構成されることから水成堆積したとみられ、本結果と調和する。また、発掘調査時には、ささやかではあるが湧水がみられた。以上より、当時本地点付近が水場として利用される条件を有していたと判断される。

H04-25の花粉分析や樹種同定の結果では、ブナ属やコナラ亜属など冷温帯林に特徴的な種類や、ハンノキ属・カエデ属・トチノキ属など渓谷や河岸に生育する種類がみられる。これらの植物は、遺跡周辺の山地や渓谷、河岸などに生育していたと考えられる。その時代は、出土遺物や放射性炭素年代から、縄文時代頃にあたる。現在の周辺植生は、里山林や植林などの代償植生におおわれているが（宮脇ほか1985）、当時は人為的な植生干渉は少なく、居住域の近くまでブナ林などの自然植生におおわれていたことが推定される。

5　不明遺構・埋設土器等の内容物について

A　対照試料（第97・98表）

埋設土器783Bの地山試料では、リン酸含量が0.86P_2O_5mg/g、カルシウム含量が0.91CaOmg/gを示した。同じく埋設土器であるL4-6　1232A地山試料ではリン酸含量が2.57P_2O_5mg/g、カルシウム含量が1.30CaOmg/gであり、J6-13　1407A地山試料ではリン酸含量が2.30P_2O_5mg/g、カルシウム含量が0.89CaOmg/gであった。

一方、基本土層のリン酸含量は、遺構付近の地山よりやや高いものが多く、最上層の1層2.76P_2O_5mg/g、2層2.99、2.73P_2O_5mg/g、3層3.15、2.69P_2O_5mg/g、5層2.72、3.00P_2O_5mg/g、7層3.05、3.09P_2O_5mg/g、8層1.53P_2O_5mg/g、最下層の13層0.64P_2O_5mg/gであり、6層1.74P_2O_5mg/g、21層1.01P_2O_5mg/gを示した。谷底に近い13層や21層ではリン酸含量は相対的に低い。

同じくカルシウム含量は、遺構付近地山よりやや低いものが多く、1層0.88CaOmg/g、2層1.02、

第97表　各遺構のリン・カルシウム分析結果（対照試料および土坑）

試料名			リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性
対照試料　I2-22	1層	1	2.76	0.88	黒色(10YR2/1)L
	2層	2	2.99	1.02	黒色(10YR2/1)L
		3	2.73	0.71	黒色(10YR2/1)L
	3層	4	3.15	0.74	黒色(10YR1.7/1)L
		5	2.69	0.89	黒色(10YR1.7/1)L
	5層	6	2.72	0.80	黒色(10YR1.7/1)L
		7	3.00	0.60	黒色(10YR1.7/1)L
	7層	8	3.05	0.59	黒色(10YR1.7/1)L
		9	3.09	0.59	黒色(10YR1.7/1)L
	8層	10	1.53	0.49	黒褐色(10YR2.5/2)SL
	13層	11	0.64	0.48	黒褐色(10YR2.5/2)SL
	6層	12	1.74	0.47	黒色(2.5Y2/1)L～SL
	21層	14	1.01	0.67	黒褐色(10YR2/2)SL
SX607B		1	3.15	0.71	黒色(10YR1.7/1)SL
		2	2.61	1.11	黒色(10YR2/1)SL
		3	2.46	0.89	黒色(10YR1.7/1)SL
		4	3.75	0.62	黒色(10YR1.7/1)SL
		5	2.96	0.76	黒色(10YR1.7/1)SL
SX608B		1	1.26	0.67	黒色(10YR2/1)SL～L
		2	1.64	0.85	黒褐色(2.5Y3/2)L
		3	2.53	0.94	暗灰黄～黒褐色(2.5Y3.5/2)SiL
		4	1.18	0.69	黒褐色(2.5Y3/2)L
SX601B	6層	1	2.31	0.75	黒褐色(10YR2/2)L
		2	2.64	0.54	黒褐色(10YR2/2)L
		3	2.24	0.88	黒褐色(10YR3/2)L
		7	2.00	0.72	黒褐色(10YR2.5/2)L
	8層	4	1.95	0.59	黒褐色(10YR2.5/2)L
		5	2.41	0.57	黒褐色(10YR2.5/2)L
		6	2.33	0.74	黒褐色(10YR3/2)L
		8	2.76	0.73	黒褐色(10YR2/2)L

注.（1）土　色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
（2）土　性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性の判定法による。
SL……砂壌土（砂の感じが強く、ねばり気はわずかしかない。）、L……壌土（ある程度砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘度が同じくらいに感じられる。）、SiL……シルト質壌土（砂はあまり感じないが、サラサラした小麦色のような感触がある。）、CL……埴壌土（砂よりも土を多く感じる。）

0.71CaOmg/g、3層0.74、0.89CaOmg/g、5層0.80、0.60CaOmg/g、7層0.59CaOmg/g、8層0.49CaOmg/g、13層0.48CaOmg/gであり、6層0.47CaOmg/g、21層0.67CaOmg/gを示した。相対的に数値が高い層準は土器の出土量も多く、生活廃棄物の集積が著しいことがうかがえる。

I2-22が捨て場であり、土器とともに食物残滓などの生活廃棄物が集積していることを考慮すれば、本遺跡付近のリン酸含量はおおむね2.50P_2O_5mg/g、カルシウム含量はおおむね0.90～1.50CaO_5mg/gであったと考えられる。これらは、後述する天然賦存量の範囲内にあるといえる。したがって、この数値を基準として、不明遺構や埋設土器で得られた結果を検討することにする。

B　不明遺構（第97表）

不明遺構は3基を対象とした。SX607Bでリン酸含量が3.00P_2O_5mg/gを越えるものがみられたが、他は

第98表　各土器試料のリン・カルシウム分析結果（対照試料および土坑）

試料名 ( )内は土器No.		リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性
埋設土器 783B (3883)	上層　1	1.56	0.85	黒褐色(10YR3/2)L
	下層　2	1.19	0.64	黒褐色(10YR3/2)L
地山　対照資料　3		0.86	0.91	褐色(10YR4/5)SL～L
埋設土器 Pit 727B (522)	土器中の土	4.59	0.94	暗褐色(10YR3/3)L～CL
埋設土器 SK243A (337)	上層	3.23	0.23	黄褐色(10YR5/6)CL
	中層	4.61	0.53	鈍い黄褐色(10YR4/3)CL
	床面	3.96	0.65	黒色(2.5Y2/1)CL
埋設土器 1232A (574)	表土層	4.99	2.43	黒褐色(10YR3/1)CL
	地山層	2.57	1.30	黄褐色(10YR5/6)L～CL
	1層	25.06	6.61	黒褐色(10YR2/2)L～CL
	2層	46.61	14.10	黒褐色(10YR2/3)L
	3層	25.41	6.45	暗褐色(10YR3/3)L～CL
	4層	28.69	9.29	暗褐色(7.5YR3/4)L～CL
	4´層	22.00	4.73	暗褐色(10YR3/4)L～CL
	5層	10.23	1.19	暗褐色(10YR3/4)CL
	6層	9.51	1.19	褐色(10YR4/6)CL
	7層	6.17	0.60	鈍い黄褐色(10YR5/4)CL
埋設土器 1251A (573)		28.82	11.27	暗褐色(10YR3/3)L
埋設土器 1407A (587)	表土層	6.24	2.88	黒褐色(2.5Y3/1)L～CL
	地山層	2.30	0.89	黄褐色(10YR5/6)SL
	1層	3.64	1.03	黒褐色(10YR2/2)L～CL
	5層a	3.41	1.08	黒褐色(10YR2/2)L～CL
	5層b	3.43	0.73	暗褐色(10YR3/3)L
	5層c	3.60	0.98	黒褐色(10YR3/2)L
一括土器 SI3170A (111)		5.24	1.73	黒褐色(2.5Y3/1)L～CL
一括土器 SK2619A (414)	上層	5.19	0.87	黒褐色(10YR3/2)L～CL
	中層	4.83	1.15	黒褐色(10YR3/2)L～CL
	下層	4.16	1.05	暗褐色(10YR3/3)L～CL

土色は、サンプル資料の色調で、調査時に観察したものとは異なる。

対照試料よりいずれも数値がほぼ同じか低かった。カルシウム含量は、上述のリン酸含量のやや高い試料を含めて、いずれも数値がほぼ同じか低かった。

C　埋設土器（第98表，第144図）

埋設土器は6基を対象とした。リン酸含量が対照試料や不明遺構に比べて高いものが多く、L4-6 1231A2層のように4.00P_2O_5mg/gを越えるものもある。また、カルシウム含量もL4-6 1231A2層やL5-7 1251Aのように10.00CaOmg/gを越えるものなど、高い数値が得られた遺構がある一方、M8-24 Pit243A・2789Aのように土坑よりかなり低いものもある。

D　一括土器（第98表，第145図）

一括土器は2か所を対象とした。リン酸含量は対照試料や不明遺構に比べて高く、カルシウム含量もJ13-13 3076Aでやや高い。

E　遺体埋納の可能性がある遺構

今回の分析調査では、遺構内の数値を評価するに際して、地山層や捨て場などの対照試料を準備して検討したが、さらに慎重を期するために天然賦存量についても考慮しておく。

土壌中に本来含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量についての報告事例（Bowen1983、Bolt・Bruggenwert1980、川崎ほか1991、天野ほか1991）によれば、天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg/g程度と推定される。しかし、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P_2O_5mg/g（黒ボク土の平均値、川崎ほか1991）という報告例がある。また当社で行った例では、骨片が混在している土壌で6.0P_2O_5mg/g前後の値を越える高い含量が認められた事例もある。一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通1～50CaOmg/g（藤貫1979）とされるが、その範囲はリン酸よりも明らかに大きい。したがって、これらを著しく越える数値が得られた場合、遺構の内容物として遺体が埋納されていたことを想定したい。

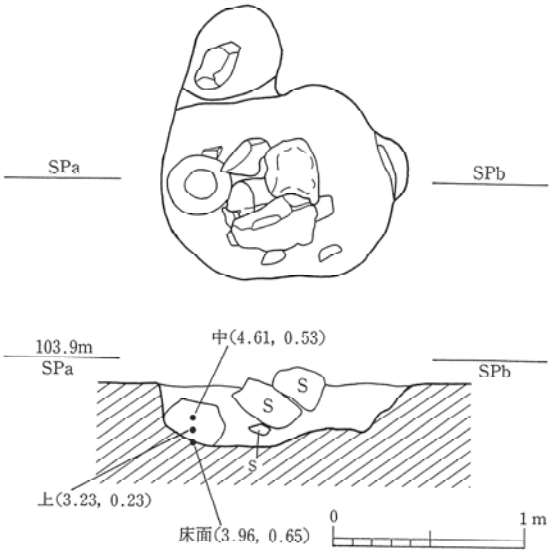
今回、リン酸含量が対照試料の数値や天然賦存量をはるかに越えていたのは、L4-6　埋設土器1232AとL5-7　埋設土器1251Aであった。これは既耕地の数倍以上の含量を有し、他の遺構や対照試料よりひとけた上の数値を示している。これより、この2基の埋設土器の内容物として遺体を想定することができる。

一方、上記の埋設土器ほどではないが、埋設土器と一括土器のリン酸含量は、対照試料の数値を超えるものがかなり多い。しかし、リン酸含量が天然賦存量を大きく越えないこと、カルシウム含量が対照試料とほぼ同じか低い数値であること、J6-13 1407Aのように土器の内外で両含量の差がほとんど認められない。本結果からみるかぎり、土器の内容物として遺体を想定することには慎重にならざるを得ない。

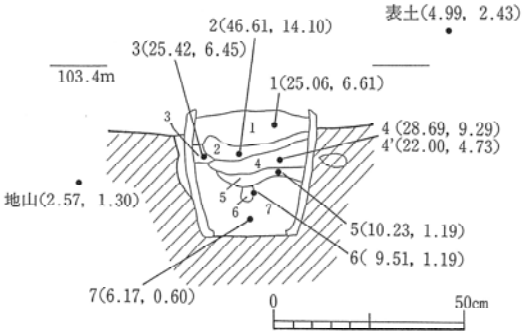
また、不明遺構についてはいずれも対照試料の両含量とほぼ同じかこれらより低いものであり、今回の結果からは内容物として遺体を想定することは難しい。

以上、L4-6　埋設土器1232AとL5-7　埋設土器1251Aの2基は遺体埋納の痕跡を指摘できる。その他の土器・不明遺構については遺体埋納の可能性が小さいと判断せざるを得ないが、地山土壌と土器の埋設状態、試料の採取方法、分析方法などについて解決すべき課題が残されている。今後、後述する検討課題についてさらに検証を行い、再評価する余地があることを明記しておきたい。

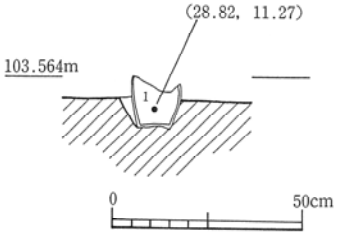
SK 243A



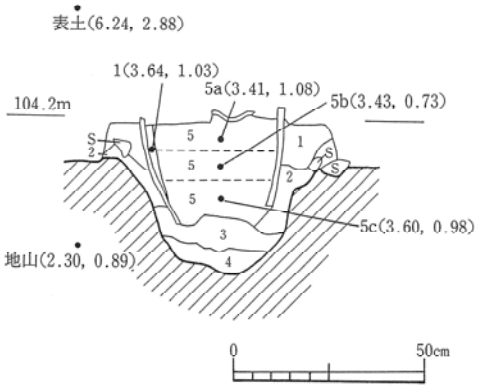
埋設土器1232A



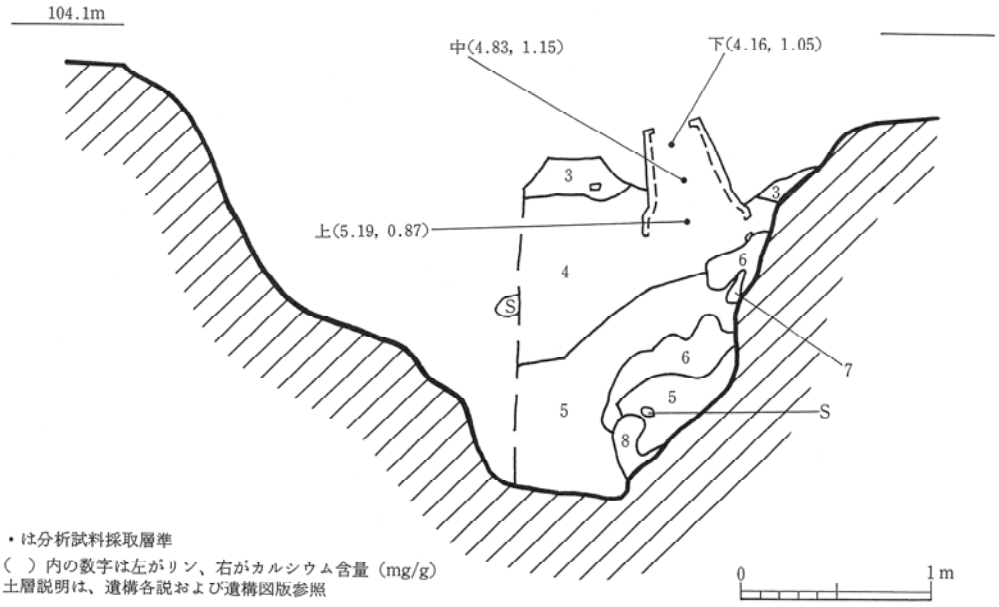
埋設土器1251A



埋設土器1407A

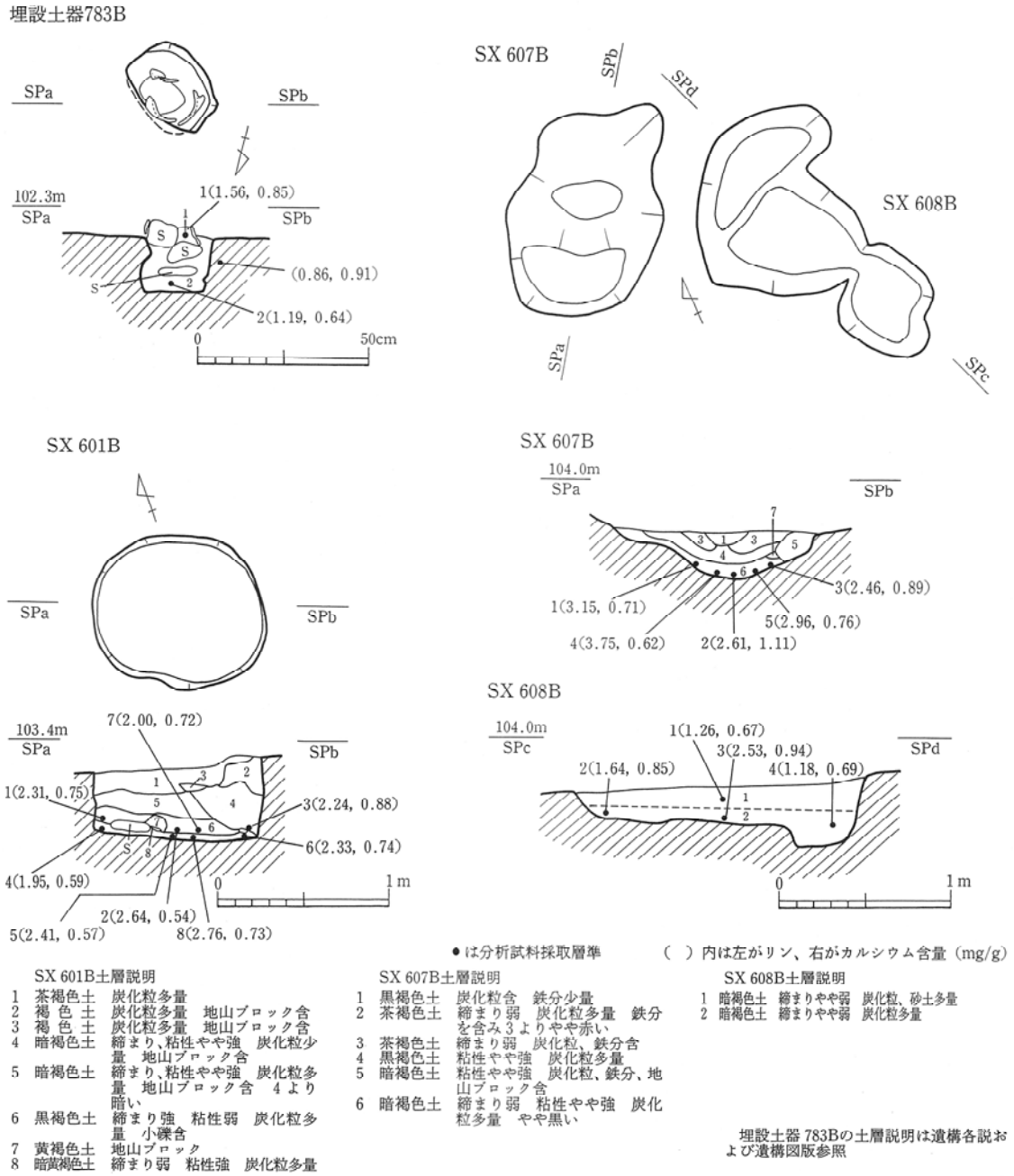


SK 2619A



・は分析試料採取層準
（　）内の数字は左がリン、右がカルシウム含量（mg/g）
土層説明は、遺構各説および遺構図版参照

第144図　リン・カルシウム分析　サンプル位置（1）



第145図　リン・カルシウム分析　サンプル位置（2）

F　検討課題

土壌中のリン酸の保持力は、土壌によっても異なるが、黒ボク土など火山灰性の土壌の場合は特に保持力が大きい。そのため、火山灰性土壌が発達する地域では、田園調布南遺跡のように、リンの富化が明瞭に見られる場合もある（中根1992）。しかし、経済企画庁総合開発室（1973）の土壌図を参考にすると、本地域に分布する土壌は火山灰土壌ではない。したがって、仮に動植物の遺骸などリン酸成分の高いものが埋められていた場合でも、成分の流失によりリン酸の濃度が低下してしまった可能性が考えられる。今回リン酸の富化が顕著な遺構が少なかったが、これは動植物の遺骸の埋積がなかったためなのか、あるいはリン酸成分が

流出したものかははっきりしない。この場合、土器の底部があるかないか、あるいは正位が倒立位かも重要な視点となる。

一方、土器や不明遺構の内部は、立体的な空間である。したがって、内容物が偏って内部に存在した場合、一断面にその残留成分の分布域がかかるとは限らない。したがって、土器内の場合、底部付近から口縁部付近までの垂直的試料採取（5～10cm厚連続）を行うことが望まれる。また、口径が大きい場合は、できるだけ平面的な試料も採取したい。不明遺構内の場合、土層観察用断面で土器同様の垂直試料を採取した後、床直の覆土を10～20cm間隔で平面的に採取したい。これらは、いずれも遺構内部を空間的に調査する材料となり、内容物の位置を推定するうえで有効である。

また、リン酸に比べカルシウムは土層中での移動・拡散が大きい。そこで、カルシウム分の拡散が予想される場合、全炭素の測定を併用しリン酸との回帰分析を行うことで遺体の痕跡を明確にできることがある（辻本・小林1995）。今回、遺体の痕跡を明確にし得なかった遺構については、この方法を応用できるかも知れない。

6　赤色物質の由来について

A　結　果

各試料のＸ線回折チャートと検出鉱物を第146図～第149図に示す。

（1）SK238C（赤色土）

粉末Ｘ線回折法により、多量の石英、少量のカリ長石・斜長石、微量のセリサイト・緑泥石、ごく微量のギブサイトが検出される。セリサイトとした鉱物のＸ線回折線は白雲母の一種で、muscovite 1Mとされるものを標準として解析している。しかし黒雲母もこれときわめて近似した回折線を有するため、微量に含まれている場合には、Ｘ線回折線のみで両者を区別することは困難である。したがって、ここでは堆積岩中の用語としてセリサイトを用いた。なお、雲母鉱物の細区分は顕微鏡観察等を要する。

（2）　SK238C（対比ｻﾝﾌﾟﾙ）

粉末Ｘ線回折法により、多量の石英、少量のカリ長石・斜長石、微量のセリサイト・緑泥石、ごく微量のギブサイトが検出される。これは、SK238C（赤色土）試料と同じ鉱物組成である。

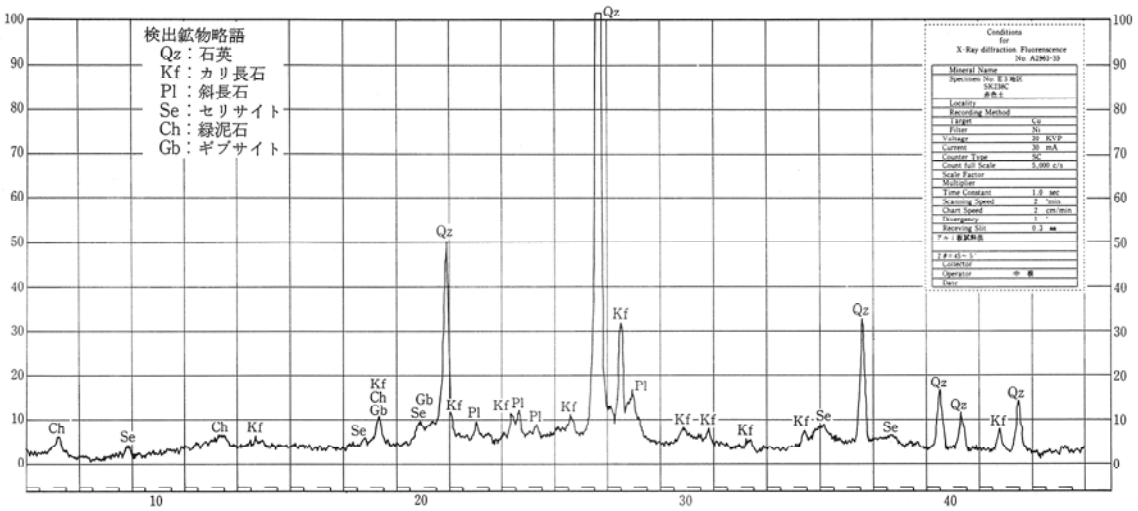
（3）　SK239C（赤色土）

粉末Ｘ線回折法により、多量の石英、少量のカリ長石・斜長石、微量のヘマタイト、ごく微量のセリサイトが検出される。

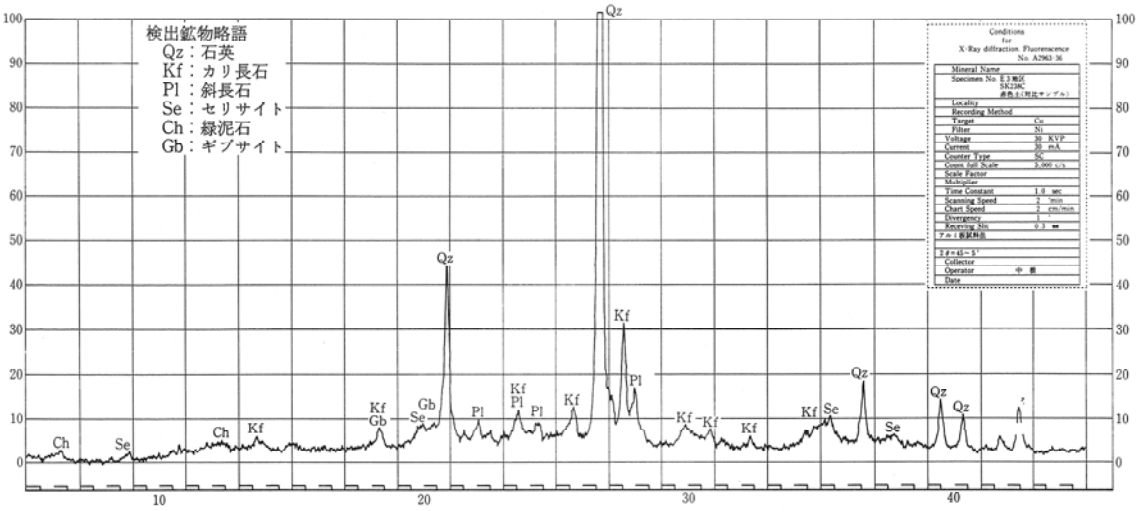
（4）　SK239C（対比ｻﾝﾌﾟﾙ）

粉末Ｘ線回折法により、多量の石英、少量のカリ長石・斜長石、微量のクロライト、ごく微量のセリサイト・角閃石・ギブサイトが検出される。

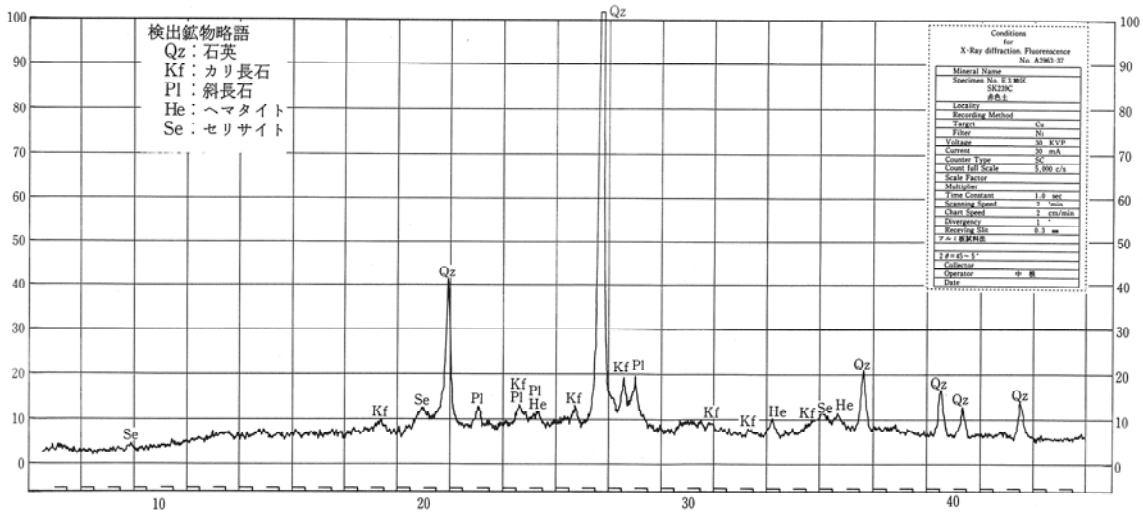
6　赤色物質の由来について



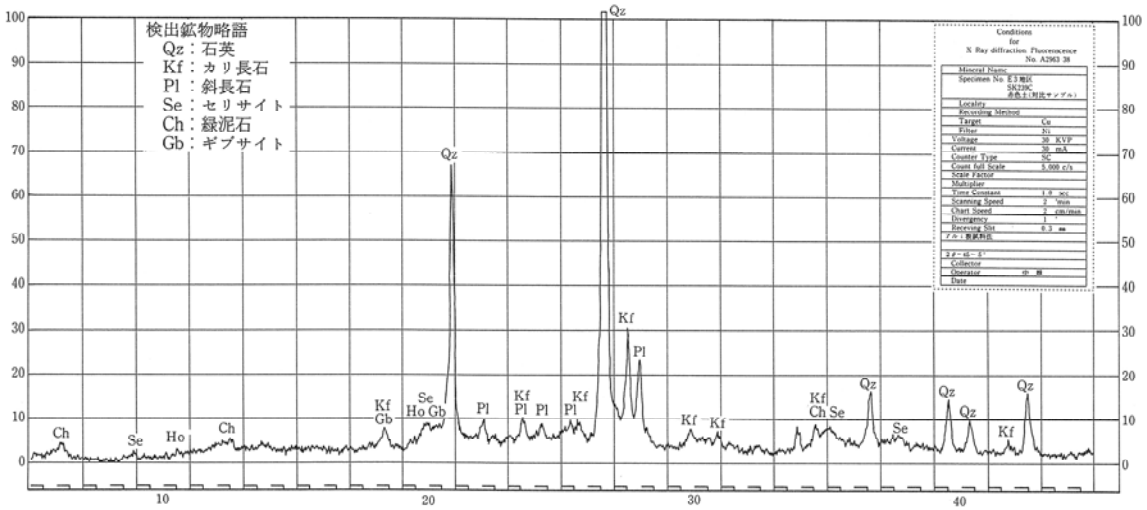
第 146 図　SK238C（赤色物質）の X 線回折結果



第 147 図　SK238C（対照試料）の X 線回折結果



第 148 図　SK239C（赤色物質）の X 線回折結果



第149図　SK239C（対照試料）のX線回折結果

B　考察

SK239C（赤色土）試料では、他の試料にないヘマタイトが検出される。ヘマタイトはベンガラの構成鉱物であり、赤色顔料の材質はベンガラと判断される。ただし、SK238C（赤色土）試料にはヘマタイトは検出されず、赤色の原因は非晶質な酸化鉄によるものと推定されるが、X線回折ではその判別は難しい。また、各試料にはその他の鉱物として造岩鉱物の石英、長石類（カリ長石、斜長石）、粘土鉱物のクロライト、セリサイトなどが検出されるが、鉱物組成はいずれも類似しており、土壌の鉱物組成がほぼ同じであることが推定される。

C　検出鉱物の説明

(1)　石英（quartz）

化学式はSiO_2。最も普遍的に産出する造岩鉱物の一つで花崗岩・片麻岩など酸性の火成岩・変成岩中の主成分鉱物として産する。また鉱脈中の脈石として、砂岩・礫岩などの堆積岩中など珪酸に飽和した岩石中に広く産する。比重は2.65。通常無色、ときに黄・赤・緑・青・黒褐色、ガラス～脂肪光沢。

(2)　カリ長石（Potassium feldspar）

サニディン、正長石、微斜長石の3つが含まれる。サニディンの化学式は（K,Na）$AlSi_3O_8$、単斜晶系、火山岩中に産する。正長石の化学式はほぼ$KAlSi_3O_8$、単斜晶系、深成岩や変成岩中に産出する。微斜長石の化学式は$KAlSi_3O_8$、三斜晶系、低温の変成岩中に産出する。

(3)　斜長石（plagioclase）

長石（feldspars）の一種。主としてAb（$NaAlSi_3O_8$）－An（$CaAlSi_2O_8$）からなる長石。斜長石はたいていの岩石中にほとんど普遍的に存在し、その量と岩石構造上の役割から、造岩鉱物の内で最も重要なもの。比重2.62～2.76。斜長石には低温型と高温型があり、両型の漸移型も存在する。いずれも三斜晶系である。

(4) ギブサイト (gibbsite)

化学式は $Al(OH)_3$。単斜晶系に属する。ギブサイトは白色の微粒子の集合として産出する。風化作用によって生成し、特に熱帯あるいは亜熱帯の湿潤な気候の下で生成したラテライト質の土壌の中に多量に含まれるが、他のタイプの土壌の中にも存在する。特にギブサイトの多い粘土はいわゆるボーキサイトとしてアルミニウムの原料として用いられる。

(5) ヘマタイト (hematite)

和名は赤鉄鉱。化学式は Fe_2O_3。三方晶系。比重は5.26。光沢は金属状、亜金属状、無光沢と産状によって異なる。結晶質なものは灰黒色、塊状などの場合は赤、ときに虹色を呈するものもある。

(6) セリサイト (Sericite)

熱水性の2八面体型雲母粘土鉱物。絹雲母ともいう。微粒質で、白色ないし淡紅色を示し、絹糸あるいは真珠光沢をもつ。化学組成は白雲母に近いが、白雲母に比べてカリウムが少なくて珪素が多く、水分が多い。金属鉱床の熱水変質帯や陶石・ろう石鉱床など、熱水の影響を強く受けた所に産出する。

(7) 緑泥石 (Chlorite)

2:1型粘土鉱物の一つの族。クロライトとも呼ぶ。2:1層の積層からなり、層間に水酸化物シートをはさむ。緑泥石の名は、一般の緑泥石がFe^{2+}を含むために緑色を呈することに由来する。板状あるいは薄片状の形態をなし、数cmの大きさから粘土サイズのものまである。

(8) 角閃石 (Hornblende)

造岩鉱物の主要な一群。火成岩中の角閃石は主にホルンブレンドであり、酸性岩から超塩基性岩まで広く産する。また、ホルンブレンドは変成岩中にもよく見られる。

以上の鉱物説明は、地団研ほか (1981) の「地学事典」、久馬ほか (1993) の「土壌の事典」、岩生ほか (1992) の「粘土の事典」を参考にした。

7 まとめ

A 当時の古環境と水利用について

集落1に伴う捨て場AのL2-21では、水域がかつて存在したことを示唆する珪藻分析結果を得た。もしこの地点が水場であったとすれば、大量に出土した土器に象徴される「捨て場」という機能との関わりが今後の検討課題として残る。

縄文時代の周囲の森林植生は、ブナ属やコナラ亜属などを主とする冷温帯林で、河岸や渓谷などには、ハンノキ属・カエデ属・トチノキ属などが生育していたものと推定される。

B 縄文時代中期の各遺構の内容物について

今回の分析結果では、埋設土器2基で対照試料や天然賦存量に比べてリン酸含量とカルシウム含量が非常

に高いことが認められ、土器内に遺体が存在していたことを想定した。この他の不明遺構や埋設土器には、これほど高い濃集はみられず、今回は慎重な評価を行ったが、さらに多角的な検証を行っていく必要があることを指摘した。

C　土坑内の赤色物質の由来

SK239Cの赤色顔料の材質はベンガラと判断されたが、SK238Cについては顔料は検出されず、赤変の原因は非晶質な酸化鉄によるものと推定される

＜引用文献＞

足立吟也　1980「6章 粉末X線回折法　機器分析のてびき3」p.64-76『化学同人』

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信　1991「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』p.28-36

安藤一男　1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 p.73-88

Bowen,H.J.M　1983『環境無機化学－元素の循環と生化学－』浅見輝男・茅野充男訳 297p　博友社 [Bowen,H.J.M　1979　Environmental Ccmistry of Elements]

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M　1980『土壌の化学』岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳 309p. 学会出版センター [Bolt,G.H.and Bruggenwert,M.G.M.1976) SOIL CHEMISTRY] p.235-236

土壌標準分析・測定法委員会編　1986『土壌標準分析・測定法』354p　博友社

土壌養分測定法委員会編　1981『土壌養分分析法』440p　養賢堂

藤貫　正　1979『カルシウム．地質調査所化学分析法』50 p.57-61　地質調査所.

Hustedt, F.（1937-1939）Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra Nach dem Material der Deutschen limnologischen Sunda-Expedition. Teil。～」, Band.15, p.131-506,Band.16,p.1-155,274-394.

伊藤良永・堀内誠示　1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 p.23-45

岩生周一・長沢敬之助・宇田川重和・加藤忠蔵・喜田大三・青柳宏一・渡邊裕　1992『粘土の事典』504p　朝倉書店.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久　1991『九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量』農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』149p.：p.23-27

経済企画庁総合開発局　1973『土地分類図』15（新潟県）

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H　1986　Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae. Band 2/1 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H　1988　Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae,Surirellaceae. Band 2/2 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H　1991a　Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae.Band 2/3von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H　1991b　Bacillariophyceae,Teil 4,Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. Band 2/4 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K　1992　PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMO-LOGICA BAND 26.p.1-353.BERLIN・STUTTGART.

久馬一剛・佐久間敏雄・庄子貞雄・鈴木皓・服部勉・三土正則・和田光史　1993『土壌の事典』566p.　朝倉書店

京都大学農学部農芸化学教室編　1957『農芸化学実験書 第1巻』411p.　産業図書

Lowe, R.L.　1974　Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In

Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res.Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati

宮脇　昭・奥田重俊　1985 「中部地方の現存植生図」『日本植生誌　中部』 宮脇　昭編著　至文堂

中根秀次　1992 「1号方形周溝墓の自然科学的分析」『田園調布南遺跡　2』p.133-149　都立学校遺跡調査会

日本粘土学会編　1987 『粘土ハンドブック　第二版』1289p　技報堂出版

農林省農林水産技術会議事務局監修　1967 『新版標準土色帖』

ペドロジスト懇談会編　1984 『土壌調査ハンドブック』156p　博友社

辻本崇夫・小林高　1995 「豊島馬場遺跡における周溝内埋葬について－土壌分析結果を中心として」『豊島馬場遺跡』（本文編）p.368-371　北区教育委員会

地学団体研究会・地学事典編集委員会　1981 『増補改訂 地学事典』1612p　平凡社

渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視　1988 「珪藻群集による有機汚濁指数DAIpo）の止水域への適用」『水質汚濁研究』11 p.765-773.

第Ⅶ章　まとめ

1　土　器

A　縄文時代中期前・中葉の土器について

本遺跡出土の縄文時代中期前・中葉の土器については、前回の発掘調査報告書において系統・器形・時期ごとに分類され、出土地点や各遺構ごとおよび編年などについて検討が加えられた（新潟県教育委員会1990b）。今回の発掘調査報告書は、記述や分類については前回の発掘調査報告書におおむね準じたが、分類項目に「文様」を加え、系統、文様を中心とした分類を行った。編年についても前回に準じたが、第Ⅰ段階第２期を細分し中期前葉②期・③期としたほか、第Ⅱ段階第1期の土器群においても第Ⅰ段階に上げたものもある。ここでは、今回の発掘調査で出土した土器についての編年と様相に対する考察を行ないたい。なお、今回の発掘調査で出土した土器の主体は、前回の調査で「Ａ地区およびＡトレンチ出土の土器」としているもの（前掲1990b）に時期・様相とも近似する。

(1)　編　年（第150図）

今回は、前葉と中葉に大別してさらにそれぞれを３細分し、中期前葉①・②・③、中期中葉①・②・③の都合６期に区分した。おおむね、中期前葉①は前回（前掲1990b）の第Ⅰ段階第１期、中期前葉②と③は第Ⅰ段階第２期、中期中葉①は第Ⅱ段階第１期、中期中葉②は第Ⅱ段階第２期、中期中葉③は第Ⅱ段階第３期に相当する。編年表には第Ⅱ段階を中心に前回の調査で出土した資料も加えた。それらは編年表において（）付のNo.が印されている（例（319））。

a. 中期前葉①期

巻町大沢遺跡Ⅲａ期（前山1990）や北陸地方の新崎式第１段階（加藤1995）にほぼ並行すると考えられる。集落跡２の捨て場Ｂと集落跡１の捨て場Ａを中心に出土しており、捨て場ＢではI06，H05からまとまって検出された。また、集落跡２のJ03に所在する一括土器429Bからは好資料が出土している。

北陸系　北陸地方に分布する新崎式土器と密接な関係にある土器群である。器種は、浅鉢が1点認められるだけで他はすべて深鉢である。深鉢は、器形は８形態認められ、長い胴部に外反する口縁部がつくＣが主体を占めている。文様は、類別可能なものは10類を数え、口縁部と頸部をめぐる半隆起線に爪形が施され、胴部の縦位半隆起線の垂下は基本的には胴部上半にとどまり、地文として縄文がほぼ全面に施文されている深鉢1a類が中心である。

東北系　東北地方南半に分布する大木7b式土器の系統を引く土器群で、その古段階に相当するものと考えられる。文様は、撚糸側面圧痕のみ、もしくは他の文様要素と組み合わさって文様を描く深鉢5a類がわずかに認められる。

中部高地系　関東・中部高地で五領ケ台直後型式（今村1985）と呼ばれているものに類似する土器群であ

る。器種は、深鉢のみが認められる。器形は、長い胴部に内彎気味の口縁部をもつC、口縁部形態は波状を呈するものが主体を占めている。文様は、有節沈線で施文されている深鉢隆1C類がほとんどである。

関東系 阿玉台Ⅰa式に相当する深鉢が少量であるが一定量出土している。器形は、口縁部がキャリパー形を呈し、胴部が筒状となるDが目立ち、口縁は台形状の大波状を呈する。文様は、角押文のみが施されているⅠa類が中心である。

系統不明 深鉢と浅鉢がある。深鉢は、頸部に瘤状の突起が添付されている。この瘤状の突起は、611・1474・2508などの北陸系の深鉢にも認められることから、この時期の標識的な文様になるものと考えられる。

b. 中期前葉②期

三島町千石原遺跡第Ⅰ群土器（中村・竹田・小林1973）、巻町大沢遺跡Ⅲb期（前掲1990）の一部、北陸地方の新崎式第Ⅱ段階（前掲1995）にほぼ並行すると考えられる。集落跡1の捨て場Aを中心に出土している。

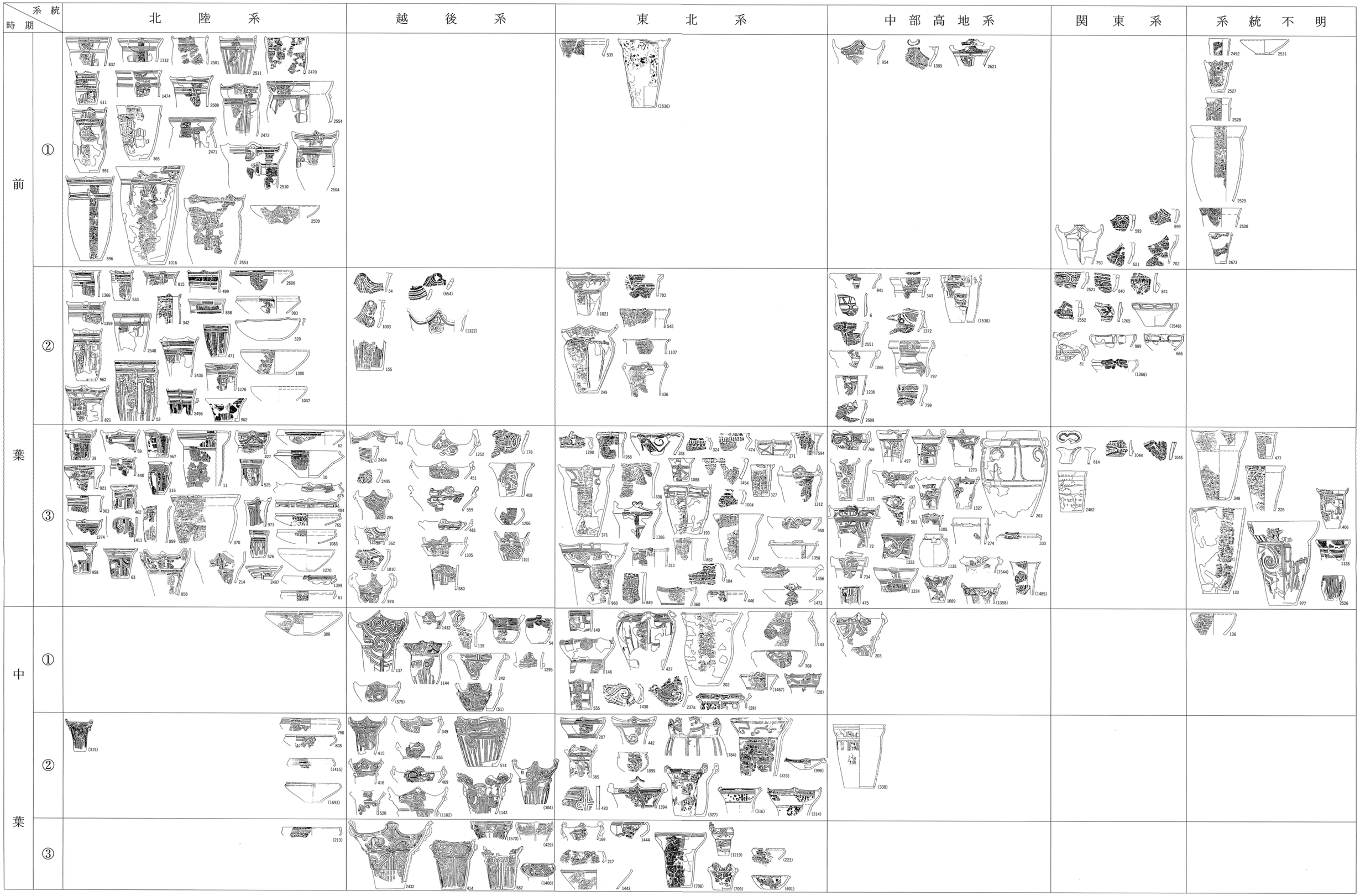
北陸系 器種は、深鉢と浅鉢からなる。深鉢は、器形は8形態認められ、①期と同じくCが主体を占める。文様は6類を数え、1a類に類似するが口縁部下半に無文帯をもつ1b類が主流となる。浅鉢は①期とは異なって一定量認められるようになり、器形は、口縁部が直立または内彎気味に立ち上がるBや口縁部が「く」の字状に内反するAが主体を占める。文様は、あまりまとまりはみられないが、口縁部に蓮華文や蓮華文的な文様が描かれ、胴部に縄文が施文されている浅鉢3類や口縁部に1条の沈線がめぐり、それ以下には縄文が施文されている浅鉢9類が中心となる。

越後系 火炎土器様式（小林1988）のA群とされている一群である。器種は、いずれも深鉢である。器形は長い胴部に内彎気味の口縁部をもつC、文様は三角形状の大波状口縁をもち、半隆起線を多用して渦巻文や三叉文、直・曲線文を描く深鉢1b類が確認されている。このような器形や文様における特徴は、北陸系の深鉢と共通するもので、越後系土器の出自に北陸系土器が深く関わっていることを示している。なお、縄文が地文として施文されているものもあるが、縦位の半隆起線が器面にほとんど密に施されている。155はその典型である。

東北系 集落跡1からの出土が大半で、集落跡2からはほとんど出土していない。器種はすべて深鉢である。器形は8形態が認められ、長胴で口縁部が外反してのび、口縁が内反もしくは直立気味になるFが目立つ。文様は、類別可能なものは8類を数え、撚糸側面圧痕が施されている深鉢5類が大半を占めている。

中部高地系 後沖式土器（寺内1995・1996）およびその系統を引くと考えられる土器などである。器種は、すべて深鉢である。器形は、口縁部破片が少なく不明のものが過半数を占めるが、8形態が認められた。器形が明らかなものの中では、胴部が外反して長くのび、口縁部が短く内反するGと口縁部がキャリパー形を呈し、胴部が筒状を呈するDが目立つ。文様は、類別可能なものは9類を数え、地文に縄文をもたないものが大半である。中でも口縁部や胴部の楕円区画内に斜行沈線または縦位沈線が施されている深鉢隆2a類や区画内および胴部に有節沈線が施されている深鉢隆1b類が多くを占めている。

関東系 北関東に分布する阿玉台式土器に近似する土器群で、阿玉台Ⅰb式に並行するものと考えられる。器種は、ほとんど深鉢であるが、1個体のみ浅鉢が認められた。器形は、口縁部資料が少なく不明のものが過半数を占める。文様は、かなりのバラエティーがみられるが、角押文と断面三角形の隆帯が施文されている深鉢1c類が多い。



第150図　中期前・中葉の土器編年（縮尺不同）

c. 中期前葉③期

前葉の最終段階で、三島町千石原遺跡第Ⅱ群土器（前掲1973）および第Ⅰ群土器の一部、北陸地方の新崎式第Ⅲ段階（前掲1995）にほぼ並行すると考えられる。今回の調査では、最も資料が充実している時期である。住居跡や土坑、捨て場Ａから一括資料が出土しているが、特にSI349A・SI1602A・SI1896Aからは好資料が検出されている。

北陸系　器種は、前段階と同様に深鉢と浅鉢からなるが、浅鉢の割合は、さらに増加する。深鉢は、器形は8形態認められるが、①・②段階と同様にＣが過半数をを占め、次いで口縁部がキャリパー形を呈し、胴部が筒状を呈するＤと胴部が樽状を呈し、口縁部が外反するＨが多い。文様は、類別可能なもの10類を数え、文様間の空白部分に格子目状沈線文や横位細沈線文を充填する深鉢4類が主体である。この他には、蓮華文もしくは蓮華文的な文様をもつ深鉢3類が目立つ。なお、本期の蓮華文は、前段階と比べて縦長で、竹管手法ではなく細線化し、地文に縄文をもつものや格子目文が充填されているものも認められる。浅鉢は、器形は3形態認められるが、Ａがほとんどを占める。文様は、類別可能なものは7類を数え、口縁部に爪形や半隆起線がめぐる浅鉢1類が多い。この他、口縁部に半隆起線や隆帯で文様が描かれている浅鉢2類や口縁部に隆帯や陰刻的手法で波状文もしくは波状文的な文様を描く浅鉢4類が目立つ。

越後系　器種は、深鉢がほとんどであるが、少量の鉢がみられる。器形は、7形態認められ、深鉢では長い胴部に内彎気味の口縁部をもつＣが過半数以上を占める。文様は、類別可能なもの8類を数え、三角形状の大波状口縁をもち、半隆起線などで渦巻文や三叉文、直・曲線文を描き、半隆起線上や渦巻文の一部に爪形や刻目が施されている深鉢1b類が中心となる。類別不能のものでは、半隆起線や沈線で施文を行っているものが目立つ。

東北系　大木7b式の新段階に並行するものと考えられる。器種は、深鉢と浅鉢がみられる。深鉢は、器形は11形態認められ、長胴で口縁部が外反して伸び、口縁が内反もしくは直立気味になるＦが目立つ。この他、バケツ状の胴部に外反する口縁部がつくＢや長い胴部に内彎気味の口縁部をもつＣが多い。文様は類別可能なもので17類を数え、縄文地上に背竹管で沈線を施文する深鉢2類が目につく。その他では、口縁部に1～数条の横位撚糸側面圧痕が施されている深鉢5b類が多い。浅鉢は、器形はいずれも口縁部が「く」の字状に内反するＡで、文様も、いずれも撚糸側面圧痕が施されている浅鉢1類である。

中部高地系　五丁歩遺跡前半期（第Ⅰ段階）（高橋保1992）でも新しい部分に相当すると考えられる。器種は、深鉢と浅鉢からなる。深鉢は、口縁部破片が少なく、器形が明らかになるものは少ない。しかし、6形態が確認され、口縁部がキャリパー形を呈し、胴部が筒状を呈するＤが主体となっている。文様は、類別可能なものは10類を数え、楕円区画がなく、文様の区画などにそって有節沈線が施されている深鉢隆1b類が過半数近くを占めている。なお、深鉢の中には、有孔鍔付土器およびそれに近似するものも数個体みられる。浅鉢は、1個体のみの出土であるが、本県において中部高地系の浅鉢が出土すること自体珍しいことである。

関東系　中期前葉②期のものよりも阿玉台式土器に近くはなく、阿玉台式の系列に含まれる程度の土器である。器種はすべて深鉢で、器形は不明なものが過半数以上を占めるが、施文されている文様から、バケツ状の胴部に外反する口縁部がつくＢもしくは長い胴部に内彎気味の口縁部をもつＣがほとんどと考えられる。文様は、輪積痕にそって器面全体に横位の指頭圧痕状の押圧が施されている深鉢2類が大半である。

d. 中期中葉①期

前述したように前回の報告書の第Ⅱ段階第1期（前掲1990b）に相当し、東北地方の大木8a式古相（丹羽

1989）にほぼ並行するものと考えられる。一括資料は多くはないが、SB3153Aからある程度まとまった資料が出土している。

北陸系　おおよそ、上山田・天神山式土器様式の第1様式（小島1988）に並行すると考えられる。確認された器種は、浅鉢のみである。器形は、口縁部が「く」の字状に内反するAがほとんどである。文様は、口縁部に数条の沈線がめぐり、胴部に縄文が施文されている浅鉢8類と口縁部に隆帯と半隆起線で文様が描かれているものがみられる。

越後系　火炎土器様式Ⅰ段階（寺崎1991）に相当する。器種は、深鉢のみが確認されている。器形は、不明のものが過半数以上であるが、5形態が確認され、長い胴部と内彎気味の口縁部をもつCと口縁部がキャリパー形を呈し、胴部が筒状を呈するDが目立つ。文様は、類別可能なものは4類と少なく、その大半は類別不可能である。類別不可能なものは沈線と隆帯で施文しているものが過半数近くを占めている。

東北系　器種は、すべて深鉢である。器形は、8形態確認されたが、不明なものが過半数近くを占める。確認されたものの中では、口縁部がキャリパー形を呈し、胴部が筒状となるDが主体である。文様は、類別可能なものは8類を数え、胴部の縄文地上に「クランク」状の文様が描かれている深鉢6類と有節沈線文が口縁部文様帯の主文様として施されている深鉢8a類および口縁部上半に刻目状沈線文のみが施されている深鉢9b類が目立つ。

中部高地系　五丁歩遺跡後半期（第Ⅱ段階）（前掲1992）でも古い部分に相当すると考えられる。器種は、すべて深鉢である。器形は、不明のものが過半数以上を占める。器形が明らかなものは3形態確認され、それらの中では口縁部がキャリパー形を呈し、胴部が筒状となるDが主体である。文様は、類別可能なものは4類を数え、それらの中で、五丁歩遺跡の隆帯系列Ⅰb類（前掲1992）に類似し、原則として隆帯や沈線部分に爪形や有節沈線などが施されていない深鉢隆3類が過半数以上を占める。

e. 中期中葉②期

前回の報告書の第Ⅱ段階第2期（前掲1990b）に相当する。良好な一括資料はほとんどみられないが、SI40Bからはわりと良好な資料が出土している。

北陸系　中期中葉①期と同様に器種は、浅鉢のみである。器形は、すべてが口縁部が「く」の字状に内反するAである。文様は、類別可能なものとして口縁部に数条の沈線がめぐり、胴部に縄文が施文されている浅鉢8類と口縁部に沈線で渦巻文などの直・曲線文様が描かれ、胴部に縄文が施文されている浅鉢5類がみられるが、まとまりは認められなかった。

越後系　火炎土器様式Ⅱ段階（前掲1991）に相当する。器種は、深鉢の他に浅鉢と台付浅鉢？がみられる。深鉢は、器形は不明のものが過半数近くである。器形が明らかなものは9形態で、中葉①期と同じくCとDが目立つ。文様は、類別可能なものは深鉢1c類・2c類・3類・4b類・5a類・6類の6類を数えるが、まとまりは認められない。類別不可能なものの中では、隆帯と隆起線で施文を行っているものが半分近くを占め、次いで基隆帯と隆起線で描いているものが多い。浅鉢は、完形品が1個体のみ確認されている。越後系において明確に浅鉢と確認された初例である。

東北系　器種は、深鉢と台付深鉢？がみられる。深鉢は、器形はD・F・Cといった口縁部が内彎もしくは内彎気味のものが大半である。文様は、類別可能なものは4類を数え、胴部の縄文地上に「クランク」状の文様が描かれている深鉢6類が過半数近くを占めている。台付深鉢？は、1個体のみ確認されている。

f. 中期中葉③期

中葉前半の最終段階である。前回の報告書の第Ⅱ段階第3期（前掲1990b）に相当し、東北地方の大木8a式新相（丹羽1989）にほぼ並行するものと考えられる。まとまった一括資料はない。

北陸系　器種は、浅鉢のみである。器形・文様とも前期と類似しており、器形ではA、文様では浅鉢5類が認められる。

越後系　火炎土器様式Ⅲ段階（前掲1991）に相当する。器種は、深鉢のみである。器形は、DまたはCといった口縁部が内彎もしくは内彎気味となるものがほとんどを占める。文様は、類別可能なものはいわゆる火焔型土器や王冠型土器の範疇に含まれる深鉢4a類・2a類である。また、類別不能のものも基隆帯＋隆起線や隆帯・隆起線といった越後系ではより新しい技法で施文が行なわれている。

東北系　器種は、深鉢のみで、器形は、不明のものが過半数以上である。文様も、類別不能のものが過半数以上を占める。類別可能なものでは、縄文地上に原則として3本1組の沈線または半隆起線で文様を描く深鉢7類が目につく。

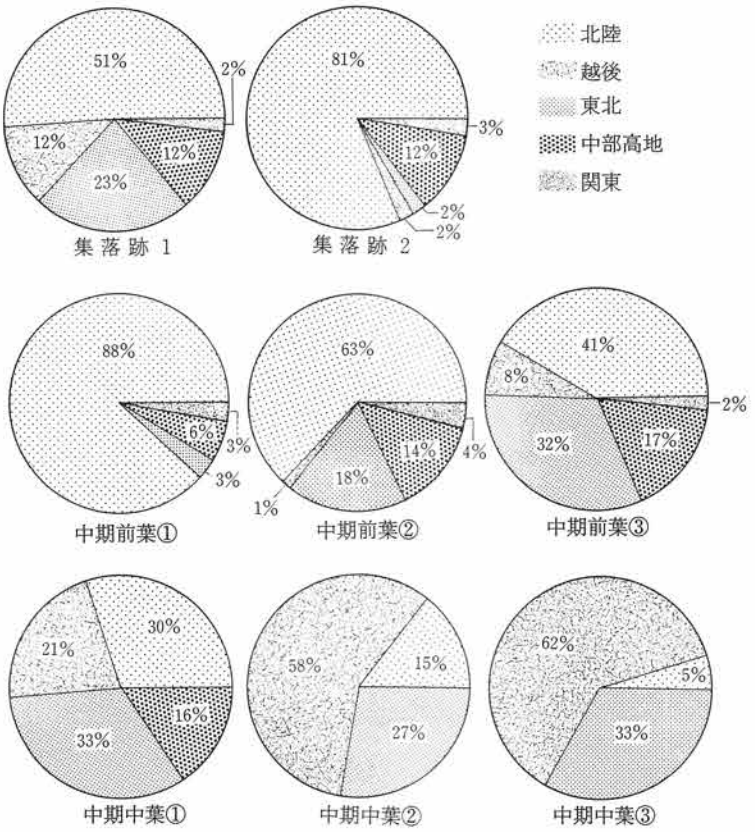
(2)　様　相（第151図）

本遺跡からは、新潟県内の遺跡としては多聞にもれずさまざまな系統の土器が出土している。そこで今回は、古代の土器などでしばしば行われている口縁部計測法（宇野1992）を用いて、集落跡1・2およびそれら全体における各系統の占有率とその推移を中心に器種構成や精製土器と粗製土器についてもみていきたい。なお、系統や時期が不明のものや明確さを欠くものは除き、集落跡1については、時間的な制約などから今回の調査で出土したもののみを計測の対象とした。

集落跡1と2および集落跡1・2全体における各系統の占有率は、集落跡1では北陸系51%・越後系12%・東北系23%・中部高地系12%・関東系2%、集落跡2では北陸系81%・越後系2%・東北系2%・中部高地系12%・関東系3%、全体では北陸系54%・越後系11%・東北系21%・中部高地系12%・関東系2%である。集落跡1では北陸系がほぼ過半数を占めて最も多く、次いで東北系が続く。集落跡2でも同じく北陸系が最も多く次に中部高地系が続くが、北陸系の占有率は過半数をはるかに越える。集落跡1・2全体においても北陸系が過半数を占めて最も多く、後は東北系・中部高地系・越後系・関東系の順となる。

集落跡1と2を比較した場合、北陸系は集落跡1では2よりも30%減少するが、反対に越後系は6倍、東北系は11.5倍に増加する。このことは、集落跡1と2の存続時期と土器様相の相違が反映されているものと考えられる。すなわち、集落跡1は、中期前・中葉を通して存続しており、そのために北陸系などの占有率は2よりも減少するが、越後系と東北系の占有率は大きく増加する。このことは、越後系と東北系の盛行が中葉であることを物語っている。反対に集落跡2は、存続時期が前葉にほぼ限定され、北陸系が大半を占めるとともに中部高地系がある程度混在するといった初頭からの土器様相を示している。

各時期における系統構成と系統別の占有率は、前葉①は北陸系（88%）・中部高地系（6%）・関東系（3%）・東北系（3%）、同②は北陸系（63%）・東北系（18%）・中部高地系（14%）・関東系（4%）・越後系（1%）、同③は北陸系（41%）・東北系（32%）・中部高地系（17%）・越後系（8%）・関東系（2%）、中葉①は東北系（33%）・北陸系（30%）・越後系（21%）・中部高地系（16%）、同②は越後系（58%）・東北系（27%）・北陸系（15%）、同③は越後系（62%）・東北系（33%）・北陸系（5%）である。前葉①・②では北陸系、前葉③と中葉①では北陸系と東北系が、中葉②・③では越後系がそれぞれ主体となる。前葉全体では、北陸系が過半数近くを占め、後は東北系と中部高地系がつづき、越後系と関東系は少量である。中葉全体は、越後系と東北系が目立ち、



第151図　系統別の土器組成（1）

次いで北陸系・中部高地系の順となる。

系統の推移は、北陸系は前葉①が88%と最も占有率が高い。その後、前葉②～中葉①の間は占有率を前期比で30%余り下げながら推移するが、中葉①と②の間では大きく占有率を下げる。そして、中葉③ではさらに占有率を低下させる。北陸系は初頭から継続する系統であり、初頭では占有率がさらに上がる可能性が考えられる。越後系は、前葉②に出現のきざしがみられるが、はっきりとその存在が認められるようになるのは、前葉③である。前葉③～中葉①の間では占有率は大きく増加する。そして、中葉②・③では過半数以上を占めて土器組成の主体になるが、このような事実は今回初めて確認されたことであり、今後、前回の調査（前掲1990b）分の計測を行うとともに、他の遺跡においても検証していかなければならない問題である。東北系は、前葉②で一定量を占める様になり、前葉②と③の間で占有率が約2倍に増加する。そして、それ以降占有率は30%余りと安定する。中部高地系は、前葉①ですでに一定量が認められ、中葉①までは横ばい状態で10%代を占め、中葉②以降は消滅する。関東系は、前葉③まではある程度認められるが、中葉①にはみられなくなる。

全体をみた場合、前葉③～中葉①に大きな画期が認められる。すなわち、この間の土器様相は、北陸系と東北系を中心に越後系と中部高地系が加わるかたちで構成されている。北陸系と中部高地系は前葉中心の系統、東北系と越後系は中葉中心の系統である。それゆえ、この期間は前葉から中葉への移行期と考えられる。なお、前葉①・②は、東北系や越後系が少なく、北陸系を中心に中部高地系と関東系で構成されており、北陸系主体という前葉の様相をよく表している。一方、中葉②・③も、越後系と東北系がほとんどを占め、北陸系はわずかに認められる程度であり、東北系・越後系主体という中葉の様相をよく表している。

器種は、深鉢・浅鉢・鉢から構成されており、それらの中には台付土器や有孔鍔付土器もみられる。前葉①では深鉢98%・浅鉢2%、前葉②では深鉢84%・浅鉢15%・鉢1%、前葉③では深鉢87%・浅鉢11%・鉢

1%・有孔鍔付土器1%、中葉①では深鉢73%・浅鉢27%、中葉②では深鉢76%・浅鉢21%・鉢1%・台付土器2%、中葉③では深鉢97%・浅鉢3%となる。

器種構成の中心となる深鉢は、どの時期においても過半数以上を占め、特に前葉①と中葉③では90%以上を占める。浅鉢は、前葉には東北系のものもみられるが、ほとんどが北陸系で、中葉①と②においては20%以上を占めるが、それ以外では20%以下であり、前葉①と中葉③では10%にも満たない。このように深鉢と浅鉢は、深鉢が増えれば浅鉢が減り、反対に浅鉢が増えれば深鉢が減るといった反比例の関係にある。中葉①・②において浅鉢の占有率が増加する背景には、北陸系浅鉢の盛行があったものと考えられる。鉢・台付土器・有孔鍔付土器は、占有率が1～2%と極端に低く、器種としては特別なものであったことを示している。

精製土器と粗製土器の割合は、集落跡1においては精製土器64%・粗製土器36%、集落跡2においては精製土器68%・粗製土器32%、全体では精製土器64%・粗製土器36%であった。予想に反して精製土器が多いという結果になったが、これは今後精製土器と粗製土器の基準を明確にするとともに、他の遺跡のデーターも蓄積して検証していかなければならない問題である。

B 縄文時代前期前半の土器について

本遺跡の集落跡4および2からは、縄文時代前期前半の土器が出土した。それらは、質・量ともに県内ではほとんど例を見ない好資料であり、中でも捨て場C下層からはまとまって出土している。これらの土器群については、前述したように系統では東北系、関東系、関東・中部高地系、越後系などに、器形では深鉢4形態・鉢2形態に、文様では11類27種に分類を行うとともに、編年案を示した。ここでは、その編年案の詳述と様相およびそれらにかかわる大湊式土器の再検討や今回初めてその存在が認識された越後系土器について述べてみたい。

(1) 編 年

出土した土器群を検討した結果、細分が可能ではないかという結論に達し、以下の様に前期前半Ⅰ期とⅡ期に2分した。

a. 前期前半Ⅰ期

関東地方に分布する関山式の新しい段階（関山Ⅱ式）に並行すると考えられる。県内の既存資料では、時期的には柏崎市大湊遺跡出土土器に相当し、巻町新谷遺跡出土土器に後続するのではないかと考えられる。一括土器2186A、土器捨て場C下層O20-18・19・23・24、同N20-11・12、同N20-22・23、土器集中地点L18-1～16, L19-10・14・15・19・20・25から好資料がまとまって出土した。中でも、遺構は検出されなかったが土器集中地点の遺物包含層中から一括土器に近いかたちで出土している。全体的に認められる特徴としては、縄文は羽状縄文とループ縄文が主体を占めるが、これらのほかでは、組紐が目につく。ほとんどの土器は、胎土中に繊維を含んでいる。しかし、その量は決して多くはなく、その大多数は、少量～普通の範囲であり、多量なものはまれである。繊維以外では白砂・小礫の混入が目立つ。器壁は総じて薄く、焼成もおおむね良好である。

東北系 表館式（武藤1978）や石川野式（加藤1982）などの東北羽状縄文土器群の流れをくむと考えられる

ものである。器種は、深鉢のほかに鉢？もみられる。器形は、不明のものがほとんどを占めているが、胴部から口縁部へと外傾しながら立ちあがるA、口縁部が直立もしくは内彎気味に立ちあがるB、胴部上半が外反するDの3形態が確認されている。文様は、器面全体に羽状縄文が施文されている深鉢4b類、器面全体にループ縄文が施文されている深鉢4a類、器面だけではなく底部にも刺突が施されている深鉢2類・横位の爪形とコンパス文が帯状に施文され、地文として組紐や羽状縄文などの縄文が施文されている深鉢3類が主体である。

関東系　関山Ⅱ式のいわゆる相互刺突文土器（細田1991）と呼ばれているものである。器種はほとんど深鉢であるが、1個体のみ鉢が認められた。器形は、胴部破片が多く、不明のものがほとんどであるが、A・B形態がみられた。文様は、いわゆる相互刺突文と呼ばれているグループに含まれる1類のみである。

系統不明　器形は、他と同様に不明のものが多いが、器形が明らかなもののほとんどは、胴部から口縁部へと外傾しながら立ちあがるA形態である。文様は、口縁部に数条の粗い爪形がめぐる深鉢1類をはじめとして爪形や爪形様の刻目が施されているものと器面全体に縄文が施されている深鉢2類からなる。

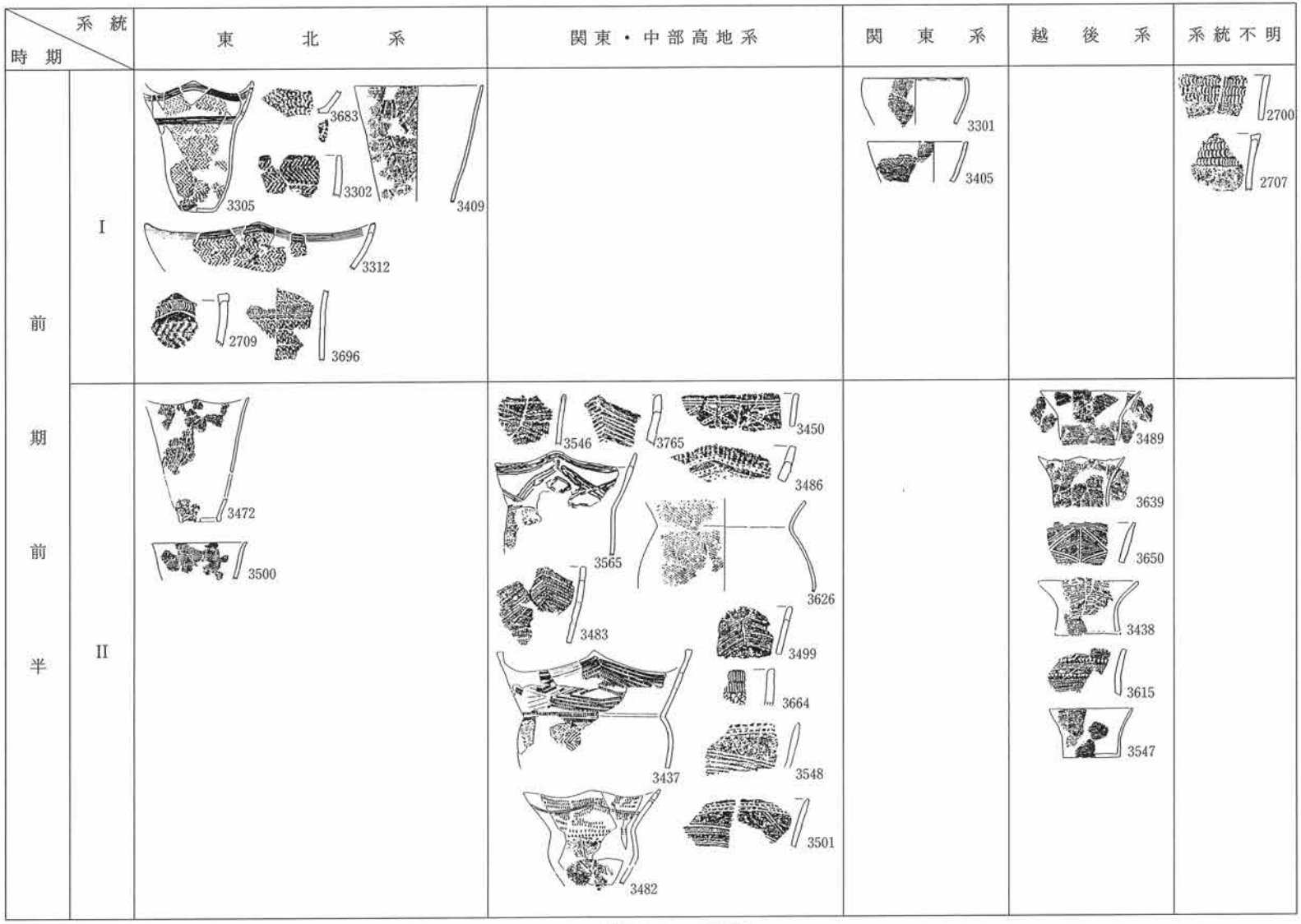
b. 前期前半Ⅱ期

北関東・中部高地に分布する有尾式に並行するものと考えられる。県内では、塩沢町十二木遺跡（家田・小林ほか1988）をはじめとして魚沼地方を中心に断片的な資料の出土が確認されていたが、最近、中里村干溝遺跡においてまとまった資料が出土し、報告（佐藤・石坂1994）がなされている。本遺跡におけるⅡ期の土器群は、その大半が捨て場C下層より出土しており、そのなかのほとんどが流路の4層から検出されている。また、SIやSBといった住居跡からもある程度出土している。

東北系　大木式や円筒土器下層式の影響が認められるものである。器種はすべて深鉢で、器形は、胴部から口縁部へと外傾しながら立ちあがり、口縁が波状を呈するAc形態が確認されている。文様は、器面全体に網目状撚糸文が施文されている深鉢3c類と器面全体に多軸絡条体が施文されている深鉢3d類が認められる。網目状撚糸文は大木2式、多軸絡条体は円筒土器下層式cおよびdの影響と考えられる。胎土中には繊維を含んでいるが、その混入量は少なめである。器壁は概して薄く、焼成も良好である。

関東・中部高地系　長野県や北関東に分布する有尾式土器の範疇に含まれるものである。器種は、東北系と同じくすべて深鉢である。器形は、全体が明らかなものでは、胴部が膨らみ、口縁部が外傾して口縁が波状を呈するD'c形態が大半を占める。文様は、口縁部から頸部にかけて点列状刺突が施されている深鉢1a類、口縁部から頸部にかけて爪形が施されている深鉢1c類、全面に縄文が施文されている深鉢1g類が主体である。胎土中に繊維を含んでいるものがほとんどであるが、中には含まないものもみられる。混入量は、Ⅰ期や同期の東北系のものに比べて多く、並～多の範囲のものが大多数である。器壁は厚く、焼成も良好とは言いがたい。

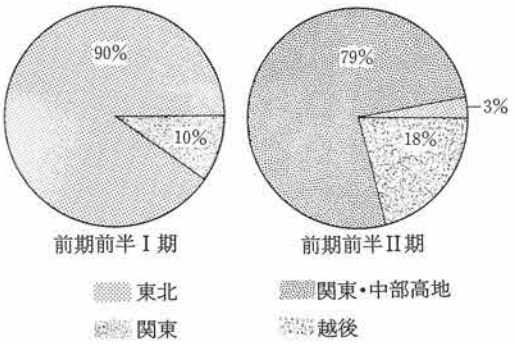
越後系　今回の本遺跡の調査において初めて一定量の出土をみた土器群である。器種は鉢のみであり、器形も口縁形が平・小突起・波状とバラエティーに富むが、基本的には底部から胴部へと直立気味に立ちあがり、口縁部が外反するB形態である。文様は、コンパス文と点列状刺突文などで施文されている1d・1f・1a・1e類が主体で、全体の大半近くを占めている。なお、口縁内側に1条の沈線がめぐるものもある。胎土中には繊維を含むが、少量または極少量もしくは含まないものが過半数以上を占める。器壁は薄いものが多く、焼成も極めて良好なものが目につき、中には、一見しただけでは縄文時代前期の所産とは思えないものもみられる。



第152図　前期前半の土器編年

(2) 様 相

本遺跡の集落跡2・4からは、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて東北系、関東系、関東・中部高地系、越後系といった系統の土器群が出土している。ここでは、中期前・中葉と同様に口縁部計測法（前掲1992）を用いて各系統ごとの占有率を導き出すことによって本遺跡におけるⅠ期・Ⅱ期の土器様相とその変化をみていきたい。なお、中期と同じく系統不明のものは除外した。



第153図 系統別の土器組成（2）

全体においては、Ⅰ期25%、Ⅱ期75%となり、Ⅱ期の占める割合が圧倒的に高い。Ⅰ期は、東北系と関東系という2系統の土器群で構成されている。各系統の占有率は、東北系90%・関東系10%でり、東北色がきわだっている。一方、Ⅱ期は、東北系、関東・中部高地系、越後系といった土器群で構成されており、それぞれの占有率は、東北系3%、関東・中部高地系79%、越後系18%である。Ⅰ期は、東北系がほとんどを占めて主系統となり、それに関東系が1割弱伴なうという土器様相を示している。Ⅱ期は、関東・中部高地系が大半を占めて主系統となり、それに鉢のみで構成されている越後系が全体の2割弱の量で伴ない、Ⅰ期では主系統であった東北系は3%と激減する。このようにⅠ期とⅡ期では主系統が東北系から関東系に入れ替わり、Ⅱ期では越後系の出現と東北系の激減という状況を示す。この事実は、本遺跡およびその周辺地域においては土器の顔つきが東北系から関東系に取って代わるという大きな画期があったことを物語っていると同時に、その画期によって本遺跡周辺地域の土器の流れが北から南へと大きく変化したことが予想される。そして、その画期を本遺跡周辺地域における前期前葉と中葉の境界としたい。

(3) 大湊遺跡出土の土器について

ここでは、前期前半Ⅰ期と並行関係にある柏崎市大湊遺跡出土の土器について、集落跡4出土の土器を中心に再検討を試みてみたい。

大湊遺跡は、柏崎市大字大湊字浜岸・前田に所在し、大湊集落の南約120mに位置する。遺跡は沖積地に立地し、出土資料とされているものは、昭和30年代後半にこの地で採鉄作業が行われたさいに、海面下約5mのところから砂や砂鉄とともに吸い上げられた土器を採集したものである（金子1987）。これらの土器については、その後前期初頭に位置づけられ、関東地方の花積下層式や本県の室谷洞窟3層上に並行するものとされ、大湊遺跡はその時期の代表的な遺跡となった（中村1966）が、その内容の詳細は明らかにはされず、資料提示も行われなかった。

その後これらの土器は、『柏崎市史資料集考古篇1』において初めて資料提示がなされ、資料に対する検討が行われた（金子1987）。それによると、器種はすべて深鉢で、文様は、ループ縄文、羽状縄文、コンパス文、爪形文、刺突文などがみられる。そして、胎土中には繊維が混入されているが少量であり、焼成は良好であるという説明がなされている。時期については、胎土中に繊維を混入することとループ縄文やコンパス文が施文されている特徴から関東地方の関山式に比定されている。しかし、その他の文様の特徴からこれらの土器は、関山式土器よりも青森県芦野遺跡（名久井1971）や北海道石川野遺跡などにみられる東北地方から北海道地方の前期前葉の土器に近く、上川村室谷洞窟3層（中村1964）・巻町新谷遺跡（前山1994）・西山町高塩C遺跡（岡本1987）・富山県南太閤山Ⅰ遺跡（山本1986）などに関連資料が認められ、北日本の前期前葉との関連を示す南端の資料であるという評価が与えられた。

『柏崎市史上巻』では、前述の資料をもとに大湊式土器として型式設定が行なわれ（寺崎1990）、胎土中への繊維の混入や平底の定着、ループ縄文・羽状縄文・コンパス文などといった文様が施文されているほかに、爪形や列点などの刺突文が胴部下半から底部にかけて施文されることが大きな特徴として指摘された。分布については、東北地方の日本海側を中心に、日本海沿いの広い範囲におよぶものと予想された。しかし、時期については、前期前半の終わり頃というようにあいまいさを残した。

本遺跡出土のⅠ期の土器と大湊遺跡出土の土器を比較してみると、出土量は、全面にわたって発掘調査が行われたこともあって、当然ながら本遺跡の方が圧倒的に多い。器種は、本遺跡出土のものに鉢？や浅鉢がみられるが、それらは少量であり、ほとんどが深鉢である。器形は、大湊遺跡で主体を占める立ちあがると同時にゆるやかに外傾するものが本遺跡のA形態に当たるものと考えられる。この他、本遺跡では口縁部が直立もしくは内彎気味に立ちあがるB形態、胴部が直線的に立ちあがり口縁部が外傾するD形態がみられる。口縁形は、本遺跡では波状のものも存在する。文様は、大湊遺跡でループ縄文が施文されているものが本遺跡の東北系深鉢4a類、羽状縄文が施文されているものが東北系深鉢4b類、コンパス文が施文されているものが東北系深鉢3類、刺突文が施文されているものが東北系深鉢の1・2類にそれぞれ相当するものと考えられる。なお、本遺跡で前期前半Ⅰ期が関山Ⅱ式に並行するメルクマールになったいわゆる相互刺突文土器（細田1991）とよばれているグループに含まれる関東系深鉢1類と関東系鉢1類は、大湊遺跡では出土していない。この他、胎土中における繊維の混入はほとんどの土器において認められるがその量は決して多くはない点や総じて焼成が良好である点は、共通している。このようなことから、本遺跡出土のⅠ期の土器は、大湊遺跡出土の土器、すなわち大湊式土器の内容を補うに足るものであると考えられる。

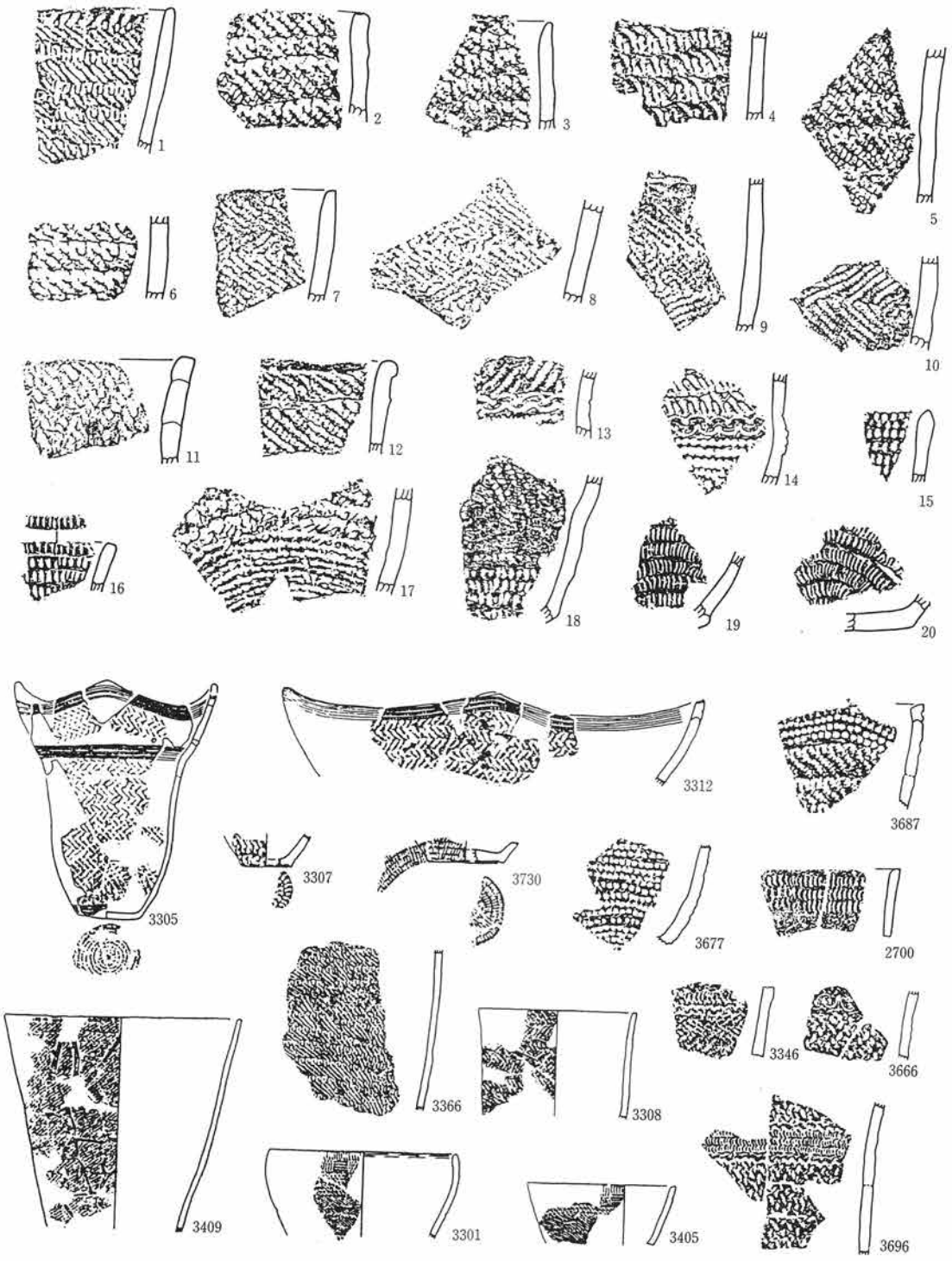
このような事実関係を踏まえて、本遺跡の資料をベースに大湊式土器をみてみると次のようなことがいえる。大湊式土器は、東北系と関東系の2系統の土器からなるが、東北系の占める割合が圧倒的に多い。東北系は表館式（前掲1978）や石川野式（前掲1982）など東北羽状縄文土器群の流れをくむものであり、関東系は関山式の新しい段階（関山Ⅱ式）もしくはその影響を受けたものである。

器種は、若干の鉢を含むがほとんどが深鉢であり、深鉢ではA・B・Dの3形態の器形が確認されており、底部は平底が一般的な形で定着している。文様は、東北系にはループ縄文・羽状縄文・組紐・刺突文・コンパス文が、関東系には相互刺突文が認められ、ループ縄文・羽状縄文・刺突文・コンパス文が主文様となる。胎土中に繊維が含まれているものがほとんどであるが、その混入量はけっして多くはなく、むしろ少量である。焼成は良好なものが目立ち、器壁も総じて薄い。

時期については、相互刺突文が認められることから、関東地方の関山Ⅱ式に並行するものと考えられる。県内では、今のところ巻町新谷遺跡の土器（前掲1994）に後続し、同町豊原遺跡第Ⅰ群土器4期（小野1994）に相当するものと考えられる。なお、類例が北海道渡島半島の石川野遺跡（加藤1982）や青森県津軽半島の芦野遺跡（名久井1971）、富山県西部の南太閤山Ⅰ遺跡（前掲1986）や石川県能登半島真脇遺跡（四柳1986）において認められることから、その分布は、北海道～東北～新潟～能登半島といった日本海側の広い範囲におよぶものと予想される。

(4)　越後系土器について

今回の発掘調査によって集落跡4からは、器形・文様とも他に例のみない一群の土器が出土した。これらの土器は、当該期の土器全体の約2割を占めており、特異なものではなく普遍的で、土器組成の一部を確実に構成しているものといえる。今回は、この土器群の器種・器形・文様などについて詳述するとともに、そ



（1～20大湊遺跡出土の土器、3305以下は清水上遺跡出土の土器）

第154図　大湊式土器

の分布・時期・出自系統などについても探究を行い、この土器群がひとつの土器型式として足り得るか否かの検討を試みてみたい。

この土器群の器種は、今のところ確認されているものはすべて鉢形土器である。器形も器種同様に確認されているものは、口縁部が外反する深鉢の胴部下半を取り去ったような特異な形を呈するB形態のみである。具体的には、底部から胴部へと直立気味に立ちあがり、頸部から口縁部にかけて外反する器形である。口縁

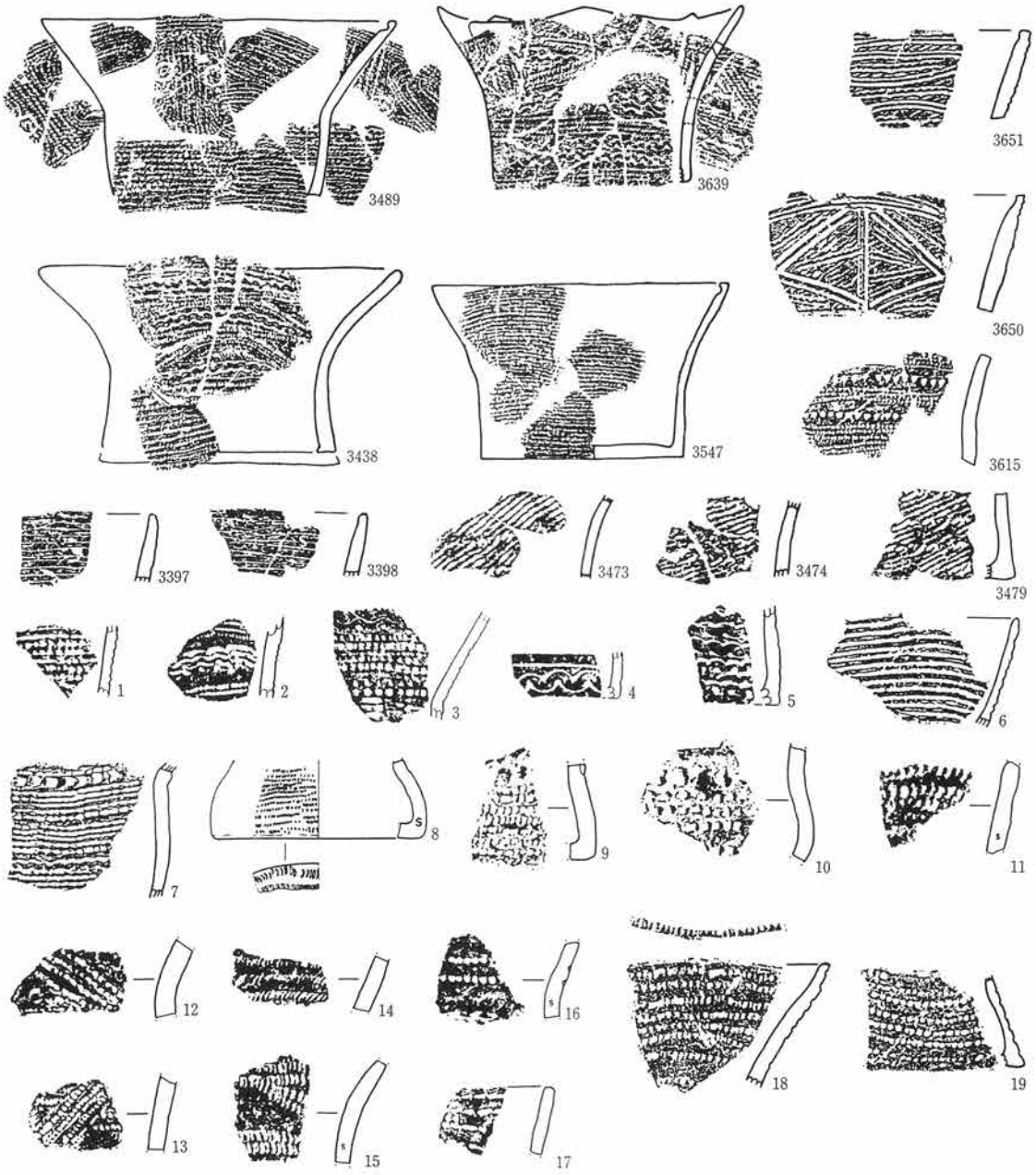
形態は、破片資料が多く不明のものの割合が高いが、平口縁のもの・小突起をもつもの・波状を呈するものの3形態が確認されている。胴部形態は、ほとんどが直線的に立ちあがるものであるが、1点のみ膨らむものが認められる。

文様は、点列状刺突文やコンパス文などで文様が描かれている1類（第155図3489, 3639, 3438ほか）、器面全体に横位沈線文が施されている2類（第155図3397, 3398）、器面全体に縄文が施文されている3類（第155図3473, 3474, 3479）に分類される。これらの中で主体となるものは1類で、そのほとんどを占め、2・3類はわずかである。1類は、さらに口縁と胴部に横位点列状刺突文やコンパス文が密にめぐり、口縁部下半から頸部にかけて縦位点列状刺突文帯で区画され、その区画内に弧状の点列状刺突文帯や円形刺突が配されている1a類（第155図3489）、口縁には横位点列状刺突文帯が、頸部から胴部にかけてはコンパス文と点列状刺突文帯がめぐり、口縁部下半には点列状刺突文帯で菱形状に区画され、その区画内にコンパス文や縦位点列状刺突文帯が配される1b類（第155図3639）、地文に縄文をもち、口縁部に半隆起線や沈線で菱形文などが描かれている1c類（第155図3651, 3650）、頸部に点列状刺突で波状文が描かれ、口縁部や胴部にはコンパス文や横位点列状刺突文が施文されている1d類（第155図3438）、横位点列状刺突文と粗い点列状刺突文が併用されている1e類（第155図3615）、全面に横位点列状刺突文が施されている1f類（第155図3547）に6類別されるが、1d類が最も多く、次いで1f類、1a類、1e類の順となる。この他、類別にかかわらず、口縁の内側に1条の沈線がめぐるものがみられる。

胎土中における繊維の混入は、ほとんどにおいて認められるが、その混入量は関東系に比べて少なく、全体の過半数以上が少量もしくは極少量であり、多量は若干にすぎない。色調は黒褐色を呈するものが目立ち、器面の調整は内外面とも丁寧で中には光沢を帯びるものもあり、器壁は他と比較してかなり薄く、焼成は極めて良好なものが多く同期のほかのものとは異る雰囲気をかもしだす土器である。使用痕跡であるススやオコゲの付着および火熱を受けたために生じる土器自身の赤変化は、ほとんどの土器に認められることから、この土器は、鉢形を呈するが、その多くは煮炊きに使用されたものと考えられる。

分布についてはあまり類例が知られていないが、本県および北陸地方において若干の出土が報告されている。本県では巻町豊原遺跡（小野・前山ほか1988、小野1994）と柏崎市大湊遺跡（前掲1987）で出土している。豊原遺跡出土のもの（第155図1～5）は、繊細な櫛歯状工具による点列状刺突文や波状文および半截竹管によるコンパス文が施文されており、第Ⅰ群土器5期（前掲1994）に分類されている。時期は、関東地方の黒浜式期に比定されている。大湊遺跡出土のもの（第155図6, 7）は、半截竹管による平行沈線文やコンパス文が施文されているもので、前述したように関東地方の関山式土器に比定されている。北陸地方においては、富山県西部の南太閤山Ⅰ遺跡（前掲1986）（第155図8～17）と石川県能登半島先端の真脇遺跡（前掲1986）（第155図18・19）で出土が確認されている。南太閤山Ⅰ遺跡では、第10類～第12類に分類されており、連続刺突文や刺突文をもつものとされている。時期については、第10類は関東地方の関山式に、第12類は関東地方の黒浜式にそれぞれ並行するものと考えられている。真脇遺跡においては、第2群土器4類に分類され、体部から底部まで細かい斜行刺突文を有するものとされている。なお、報文では、同群には繊維の存在を明確に示す例は認められなかったとも報告されている。時期については、北陸地方の朝日C式期に比定され、関西地方の北白川Ⅱa式土器および関東地方の黒浜式土器（新）並行ととらえている。

以上のことからこの越後系の土器は、知り得るかぎりでは新潟県・富山県・石川県の海岸・平野部を中心に分布しているようであるが、その出土は断片的であり、土器セットの一端をになう出土量とは言いがたい。その点本遺跡では、全体の2割弱を占めるという一定量の出土をみており、今のところ出土量では他を圧倒



（3489～3479　清水上遺跡、1～5　豊原遺跡、6・7　大湊遺跡、
8～17　南太閤山遺跡、18・19　真脇遺跡）

第155図　根小屋式土器

している。時期については、関東地方の関山式～黒浜式に比定されているが、本遺跡ではその多くが有尾式土器と同一遺構および同一のグリッドや層位から出土していることから、有尾式土器に並行するものと考えられる。

出自については不明および不確実な点が多く、今後の課題としておきたい。しかし、器形・文様・製作技法のいくつかの点において他型式との関連が指摘できる。

器形は、近似するものは認められないが、類似するものは福島県塩喰岩陰遺跡第Ⅲ群第3類土器A種（芳賀1994）や福井県鳥浜貝塚第3群土器（網谷1979）に求めることができる。塩喰岩陰遺跡第Ⅲ群第3類土器A種は、東北地方の大木2a式土器で、口縁に10単位の突起をもち、頸部がくびれて口縁部が大きく外反する。櫛歯状工具によって、刺突文と波状文が交互に胴部下端まで施文されるというように文様においても類似性

が認められる。鳥浜貝塚第3群土器は、瀬戸内地方の羽島下層Ⅱ式に並行するもので、刺突文をもち黒褐色を呈し、焼成は堅緻で器厚は4mm前後と薄いなど、文様やその他の点においても類似性が認められる。

文様においては、前述したもののほか1b類にみられる点列状刺突文帯で描かれた連続する菱形文は、文様および文様効果の点において関東・中部高地の有尾式土器の口縁部にみられる菱形文に類似する。また一方、口縁部や胴部に施文されているコンパス文や平行沈線文は東北地方の大木2a式に普遍的に認められる。この他、底部に密集あるいは部分的にみられる点列状の細かい刺突文は、表館式（武藤1978）や石川野式（前掲1982）の流れをくむⅠ期の東北系深鉢2類からの系譜を引くものと考えられる。製作技法においては、総じて器壁が薄く、器面調整が丁寧で、焼成も良好で中には一見して他の土器とは異なるものが認められるという点では、西日本の北白川下層式土器を意識しないわけにはいかないであろう。胎土中における繊維の混入量が少ないということについては、前段階の関山Ⅱ式並行期から続く日本海側の土器の特質と考えられる。

このように越後系土器からは、周辺および遠隔地の多くの土器型式の影響がみてとれるが、このことは、中期をはじめとしてさまざまな時期にみられる本県の土器の特性であり、そういう面ではこの越後系土器にみられる広域的な関連性も当然のことかもしれない。むしろ、本県土器は、なぜいつもそのような面をもつのかを追求することが今後の大きな課題ではないかと思われてならない。

これまで越後系土器の器形・文様・分布・時期などについて述べてきたが、前述した事がらを取りまとめるかたちでこの越後系土器を「根小屋式土器」として型式設定したい。この根小屋式土器については、一定量出土した遺跡は今のところ本遺跡のみであることから、今後の資料の増加を待って、細分化の問題なども含めてすべての面においてさらに検討を加えていかなければならないものと考えている。最後に、この根小屋式土器は、本来ならば遺跡名から清水上式とするところであるが、すでに東海地方に清水ノ上式という酷似する型式名が存在し、しかも合い前後する時期に比定されていることから、混乱を避けるため遺跡所在地の大字名をとり根小屋式としたことをつけ加えておきたい。

C　縄文時代中期初頭の土器について

本遺跡の集落跡1・2・3からは、縄文時代中期初頭の土器が出土している。特に、集落跡3からは捨て場C上層（Ⅱa層・Ⅱb層）を中心に北陸系や関東・中部高地系の土器がまとまって出土しており、質・量とも本県では他に例を見ない好資料である。出土土器については、前述したように、中期前・中葉や前期前半の土器と同じく系統・器形・文様で分類を行い、編年案を示した。ここでは、その編年案と様相について述べてみたい。

(1)　編　年（第156図）

今回は、土器分類の中期初頭の項で述べたように、巻町豊原遺跡（前掲1988）や見附市山崎A遺跡（佐藤・金子ほか1991）の資料を参考に縄文セミナーで提示した編年案（寺崎1995）を基本に初頭を①期～③期に細分することを試みた。以下は、その詳述である。なお、北陸系は北陸地方の新保式土器と密接な関係にある土器群、東北系は東北北部を中心に分布する円筒上層式土器と部分的に共通性をもつ土器群、関東・中部高地系は関東地方の五領ケ台式や中部高地の梨久保式と関連する土器群である。本県におけるこのような関東・中部高地系土器は、南関東や長野県というよりも東関東的または東北地方南半的であるとの指摘もされている（今村1995）。東北系の土器は、本遺跡が魚沼という山間地に位置するためか、海岸部の巻町豊原遺跡（前

掲1994）や平野部の見附市山崎Ａ遺跡（前掲1991）などと比較して出土量は少ない。

a. 中期初頭①期

巻町豊原遺跡第Ⅴ群１期（前掲1994）の土器群に代表される剣野Ｅ式古段階（佐藤・金子ほか1991）に相当し、北陸地方の新保１期（加藤1988）あるいは新保式第Ⅰ段階（加藤1995）、関東地方の五領ケ台Ⅰａ式（前掲1985）、中部高地の梨久保Ⅰ段階（三上1987）に並行するものと考えられる。北陸系土器を中心に胎土中に白っぽい砂の混入が認められる（小野・前山1988）。本遺跡では、捨て場Ｃ上層以外では集落跡３のSK811Aからまとまって出土している。器種は、深鉢のみ確認されている。

北陸系　器形は破片資料が多く、不明のものが過半数を占めるが、キャリパー形をなすD、口縁部が直立ないしは内反気味となり、胴部が円筒状をなすE、口縁部が外反し、胴部が円筒状をなすＡの３形態が確認されている。文様は、６類認められるが、口縁部に沈線と半隆起線で斜格子目文が施文され、口縁に絡条体圧痕が施されている深鉢4a類と口縁部下半もしくは胴部上半に位置する無文地上の横位区画内に縦位半隆起線を等間隔に配する深鉢2b類が目立つ。

東北系　いずれも、器形は、口縁部が直立ないしは内反気味となり、胴部が円筒状をなすE、文様は、口縁部に撚糸側面圧痕をもつ深鉢１類である。

関東・中部高地系　器形は、破片資料が多く過半数以上が不明であるが、キャリパー形をなすD、口縁部が外反し、胴部が円筒状をなすA、口縁部が短く外反し、胴部が円筒状をなすＢの３形態が認められ、それらの中ではＤが大半を占める。文様は、多くの種類が確認されているが、突出したものはない。縄文地上に半隆起線で施文されている８類がわずかに目立つ程度である。

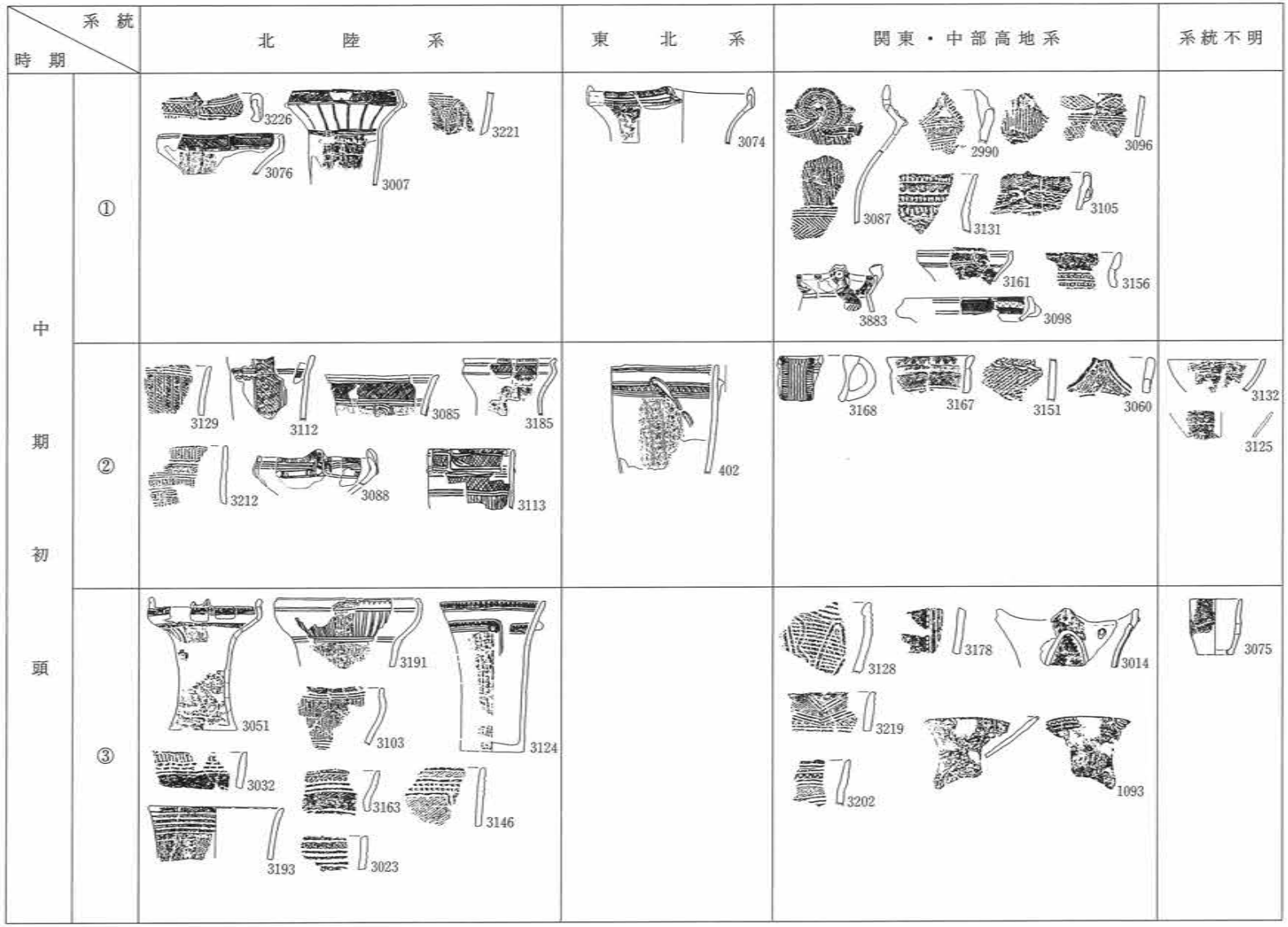
b. 中期初頭②期

見附市山崎Ａ遺跡（前掲1991）の埋没谷を中心に出土した土器群のかなりの部分や巻町豊原遺跡第Ⅴ群２期（小野1994）に代表され、剣野Ｅ式中段階に相当する。北陸地方の新保Ⅱ期（加藤1988）あるいは新保式第Ⅱ段階（加藤1995）、関東地方の五領ケ台Ⅰｂ式（前掲1985）に並行するものと考えられる。北陸系土器を中心に胎土中に凝灰岩の混入が目立つ（小野・前山1988）。本遺跡では、集落跡３および１において出土しているが、①期～③期の中では出土量が最も少ない。器種は、系統不明の浅鉢が２個体確認されているが、他は深鉢のみである。

北陸系　器形は、過半数が不明であるが、キャリパー形を呈するD、口縁部が直立し、胴部が円筒状をなすC、口縁部が外反し、胴部が円筒状をなすＡの３形態がみられる。これらの中ではＤとＣで大半を占める。文様は、６類認められ、それらの中で口縁部下半もしくは胴部上半に位置する縄文地上の横位区画内に縦位半隆起線を等間隔に配する深鉢2a類が過半数近くである。

東北系　集落跡３に近い集落跡１の東側のSK1968Aから円筒上層式に類似するものが１個体のみ出土している。

関東・中部高地系　器形は、①期と同じくＢ・Ｄに口縁部が直立し、胴部が円筒状をなすＣが新たに加わる。文様は、類別可能なものは結び目縄文が施文されている深鉢13類、口縁部を中心に斜格子目文または格子目文が施文されている深鉢２類、口縁部に山形文が施文されている深鉢４類、口縁部に三角形陰刻文が施文されている深鉢11類の４類を数える。



第156図　中期初頭の土器編年

c. 中期初頭③期

出雲崎町タテ遺跡の土器群（新潟県教育委員会1985）に代表され、剣野E式新段階（前掲1991）に相当する。北陸地方の新保Ⅲ期（前掲1988）あるいは新保式第Ⅲ・Ⅳ段階（前掲1995）、関東地方の五領ケ台Ⅱ式（前掲1985）、中部高地の梨久保Ⅱ段階（前掲1987）に並行するものと考えられる。本遺跡では集落跡3を中心に1・2でも出土しており、①期～③期の中では最も出土量が多い。

北陸系　器形は、A・C・Dと口縁部が直立ないしは内反気味となり、胴部が円筒状をなすEの4形態が確認されており、それらの中では2期と同様にCとDが主体を占める。文様は、口縁部の横位区画内に密に縦位平行沈線が施される深鉢3類が過半数近くを占めるが、それ以外では口縁の横位区画内に縦位沈線文を密に施す深鉢5類と口縁に三角形陰刻文が施文されている深鉢7類が目立つ。施文技法では半截竹管が多用されている。

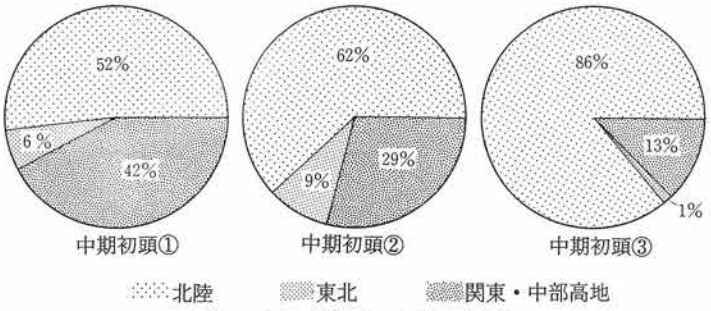
関東・中部高地系　器種は、深鉢と浅鉢がみられるが、深鉢がほとんどで、浅鉢は若干認められる程度であり、関東・中部高地のものと同じタイプである。器形は、深鉢は口縁部が短く外反し、胴部が円筒状をなすBが加わるほかは、北陸系と同じであり、それらの中ではCが過半数近くを占める。浅鉢は1093のように底部から口縁部へと直線的に外反する形態をなす。文様は、深鉢では類別可能なものは8類を数えるが、突出したものはなく、鋸歯文が施文されている深鉢12類と縄文地上に隆帯が添付されている深鉢10類が目立つ程度である。浅鉢は、外面は無文であるが、口縁の内面に文様帯をもち、有節沈線や爪形様の刻み目で文様が描かれている。

(2)　様　相

本遺跡の集落跡3を中心に出土した中期初頭の土器は、前述したように①期～③期に細分されるが、それぞれの時期は単一の系統ではなく、北陸系、東北系、関東・中部高地系といった3系統の土器群で構成されている。ここでは、各時期ごとにこれらの土器群が占める割合の推移をみていき、中期初頭の土器様相の変化を探ってみたい。なお、方法については、中期前・中葉や前期前半と同様である。

中期初頭全体の各時期別の占有率は、③期が57%と過半数以上、次いで①期の28%、②期の15%の順となる。各期ごとの系統別の占有率は、①期は北陸系52%、東北系6%、関東・中部高地系42%、②期は北陸系62%・東北系9%・関東・中部高地系29%、③期は、北陸系86%・東北系1%・関東・中部高地系13%である。

このようなデーターから、北陸系が常に過半数もしくは過半数以上の安定多数を占め、それに関東・中部高地系が各期ごとの変動は認められるが一定量を保ち、東北系が若干量ともなうという様相がうかがえる。また土器量は、③期が他の2時期よりも2～4倍多いことから、集落跡3の中心時期は③期となるものと考えられる。北陸系と関東・中部高地系は、北陸系は①期～③期へと確実に占める割合を増加させるが、反対に関東・中部高地系は①期～③期へと占める割合を確実に減少させるという反比例の関係にある。北陸系の段階的な増加は、中期前葉における北陸系土器の隆盛へと



第157図　系統別の土器組成（3）

続く流れであり、関東・中部高地系の段階的な減少は、魚沼地域を中心とした本県の山間部において前期中葉以降に盛行した関東・中部高地系土器の衰退、すなわち、同地域における土器組成の中心が関東・中部高地系から北陸系へ移行しつつあることを意味しているものと考えられる。

2 遺 構

A 集落跡1・2・3について

本遺跡からは、縄文時代中期前・中葉（集落跡1）、同中期前葉（集落跡2）、同中期初頭（集落跡3）、同前期前半（集落跡4）を中心とした集落跡が4地点で発見され、ほぼ全面にわたって発掘調査が行われた。ここでは、位置が近接し、しかも時期が連続する集落跡1・2・3について、集落構造と集落の動態を住居跡の変遷や土器出土状況を中心に時期区分にそってみてみたい。なお、集落跡1については前回の調査資料（新潟県教育委員会1990b）も用いた。

(1) 集落構造

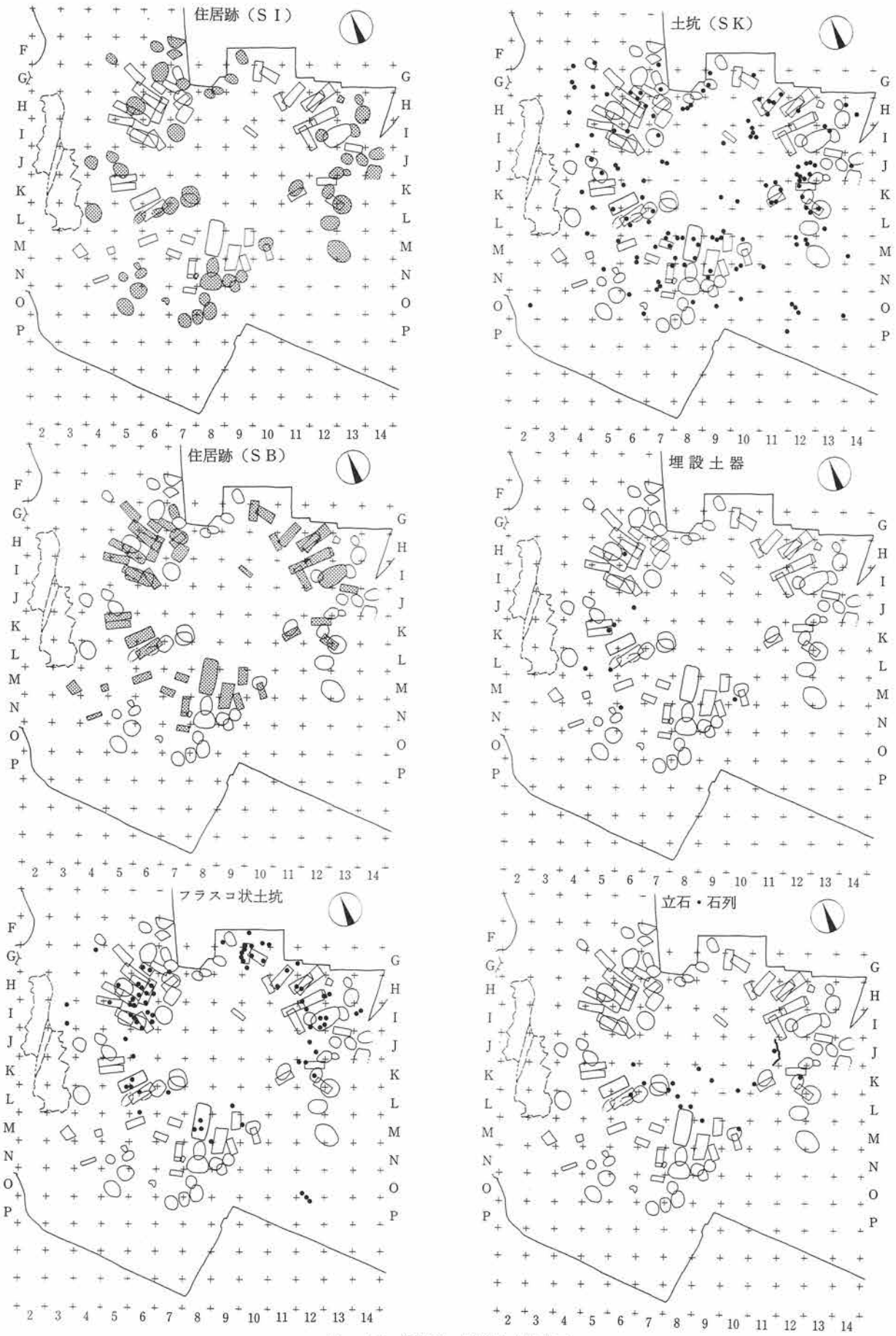
a. 集落跡1（第158図）

本集落跡からは、103軒の住居跡、305基の土坑、16基の立石・石列、7基の埋設土器、1か所の遺物廃棄場（捨て場A）および無数のピット群などが発掘された。

住居跡は、平面形態や柱穴の配列などからSIとSBに2分される。SIは、平面形が円形または楕円形の竪穴住居跡で、中央部に地床炉をもつ。その典型はSI51Aである。SBは、SIと同じく竪穴住居跡であるが、平面形が長方形もしくは柱穴配置が長方形を呈し、複数の地床炉をもつ。その典型はSI130Aである。SIは全体で54軒が発見されており、広場にあたるI～L8～10を中心にほぼ環状に分布しているが、A（J～O3～10付近）・B（F～I4～9付近）・C（H～M11～14付近）の3群に大別される。SBは、SIよりも若干少ない49軒が発見されており、その分布状況や3群に大別されることはSIと同様である。

土坑は、フラスコ状を呈するものと呈さないものがある。フラスコ状を呈するものは、81基を数え、底径により1～3類に分類され、1類は39基、2類は25基、3類は15基、分類不能は2基を数えた。分布は、住居跡と同様に中央広場を中心に環状に広がり、住居跡の分布に一致する。特に、住居跡と重複するものは、新発田市上車野E遺跡（田中1995）のように、住居跡の中に組み込まれていたものかもしれない。フラスコ状を呈さないものは、221基が検出され、平面形態により円形・楕円形・不定形に分類され、円形は82基、楕円形は78基、不定形は57基を数えた。分布は、住居跡やフラスコ状土坑とほぼ一致するが、大型のものは北半分に目立ち、広場に集中箇所がみられた。墓壙の可能性高いまたはある程度予想される土壙は、SK601とSK1630Aの2基が確認されている。SK601はM7-19，SK1630AはJ11-3他で検出され、いずれも住居跡の近くに位置している。

埋設土器は、8基検出されたが、埋設1253Aを除けばすべて単独のものである。分布は、集落跡の西半分に認められ、住居跡群A・Bの範囲に含まれる。なお、住居跡群Bの東半分～住居跡群Cの範囲では、埋設土器は確認されていない。立石・石列は、立石16・石列1の計17基が検出された。立石は、屋内設置のもの4基、屋外設置のもの12基を数え、屋外設置のものは広場の縁辺部に位置しており、石列も同様の位置に構築されていた。なお、発掘調査において開墾塚などから搬入礫と考えられる大型の礫が大量に出土した。これら礫については、近世以降の開墾によって原位置は失われているが、立石や石列とともに配石遺構など



第158図　集落跡1遺構分布模式図

を構成していた礫ではないかとも考えられる。

このような遺構群と遺物廃棄場（捨て場A）で本集落跡は構成されているが、その構成は決して無計画なものではなく、ひとつの規範に則って集落が形作られている。すなわち、本集落跡は、塩沢町五丁歩遺跡（新潟県教育委員会1992）などと同じく、中心部より外側へ向かって広場・居住域・廃棄域という構造をなしており、遺構分布状況からみても典型的な環状集落跡といえる。

広場は、当然のことながら遺構は少ないが、その縁辺部にあたる居住域との境界付近には広場と居住域という「場」の違いを示すかのように立石や石列が認められる。また、H～L7～11に位置を占める広場からは10基あまりの土坑、SB（柱穴列1）が検出されている。SB（柱穴列1）の柱穴であるピット7から有孔鍔付土器が出土していることなどからみて、これらの遺構は、居住域の土坑やSBとは性格を異にするものかもしれない。

居住域は、住居跡であるSIとSBをはじめとして各種の土坑・埋設土器・ピット群など最も多くの遺構が発見されていることから、集落内における実生活の場と考えられる。これらの遺構群は、住居跡群がA～C群に3分割されることから、その他の遺構群も同様に3分割される可能性が考えられる。また、住居跡群A・Bの境界であるI4・5，J6・7付近と住居跡群A・Cの境界であるL10・11，M11，N11・12付近は、遺構が希薄となり帯状の空白域が認められる。その性格については、「道」ではないかという推測もされているが、現時点では不明としておきたい。今後、同様の事例の増加をまって検討を加えなければならない問題と考えている。なお、この空白域は、発掘調査時においては特に意識はされなかったが、住居跡群A・Cの境界であるL10・11，M11，N11・12付近は、石器などの遺物の出土も少ない地区である。

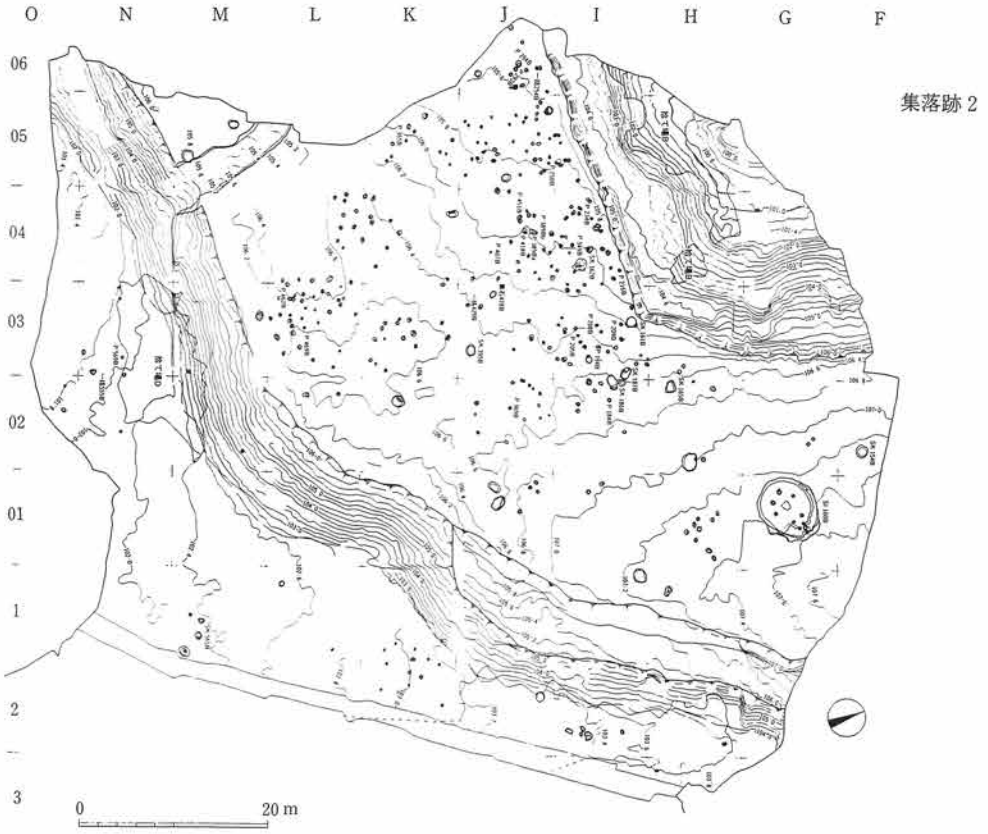
廃棄域は、集落跡西側のG～N2・3付近をほぼ南北に流れる自然流路のG～L2・3において捨て場Aというかたちで具体的に検出された。しかし、石器などの出土状況をみた場合、住居跡を中心とした遺構群からの出土も目立っており、廃棄域と居住域が競合している可能性が高い。

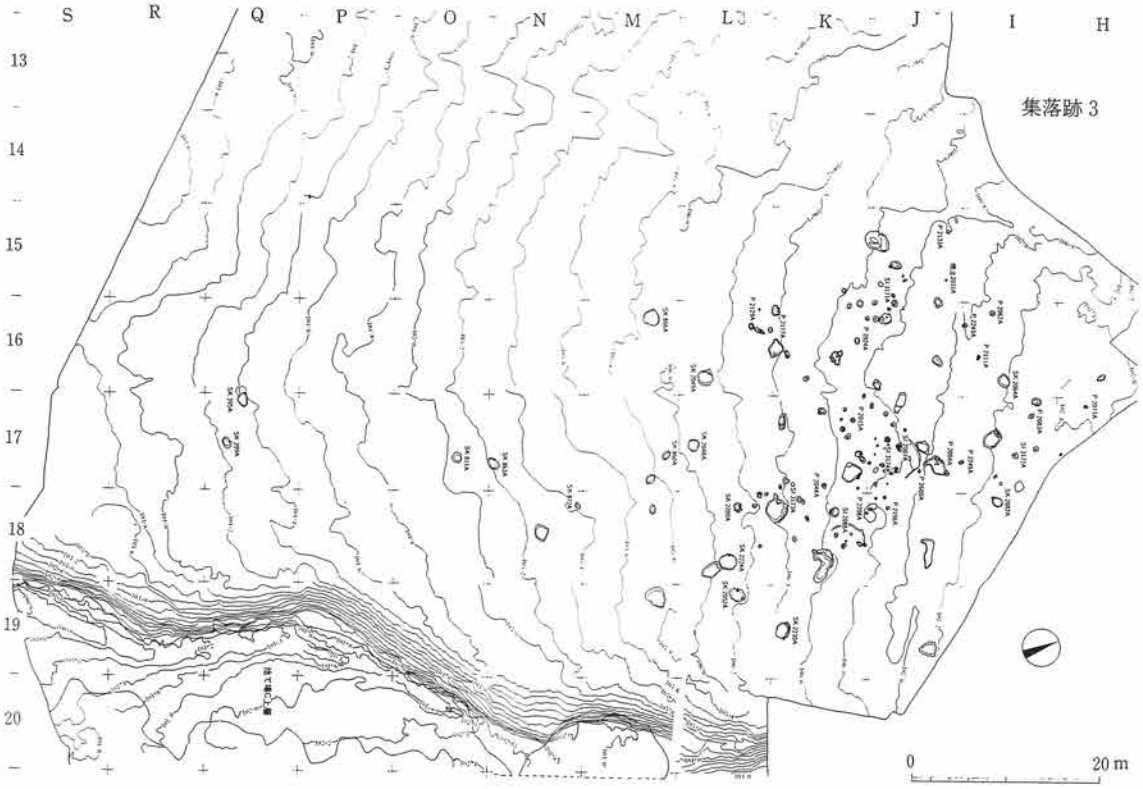
b. 集落跡2（第159図上）

本集落跡からは、住居跡1軒・土坑14基・ピット263基・集石1基・遺物廃棄場2か所（捨て場B・D）などが発掘された。

住居跡は、SIがG01で単独で検出された。土坑は、フラスコ状を呈するものとそれ以外のものに2分され、前者は4基、後者は10基を数える。フラスコ状はI03・04に分布し、フラスコ状以外のものはフラスコ状ほどの集中はみられないが、段丘上のピットが集中する箇所に多い。

ピットは、段丘上のI02～05，J02～06，K03～05，L03・04に集中して分布している。その性格については、発掘調査時において明確な解答は導き出せなかったが、分布状況などからみて住居跡の柱穴の可能性が最も高いものと考えられる。しかし、段丘の縁辺部を除いて削平などが認められない状況下の発掘調査において、炉跡や炉跡と考えられる焼土が検出できなかったことや住居跡と認定できるような規則的なピットの配列が認められなかった点が、ピットを住居跡の柱穴とするに否定的な状況証拠として存在する。一方、段丘崖の2か所において遺物の廃棄場（捨て場B、捨て場D）が発見された事実は、段丘上において集落跡が存在したことを明確に示すものである。それゆえ、段丘上のピット群は、今のところ住居跡の柱穴と考えざるを得ない状況にある。ただ、炉跡などが検出されない事実や時期が異なるが明確な竪穴住居跡が同じ段丘面上から検出されていることは、このピット群は、居住期間（季節）や生活様式の違いを念頭においた場合、SIやSBという竪穴住居跡とは住居形態が異なる住居跡が存在した可能性を示しているものと考えられる。ま





第159図　集落跡2・3遺構分布図

た、本集落跡が中期前葉において集落跡1と極めて近距離において併存していた事実も、このピット群の出現と何らかの関わりがあるように思えてならない。

遺物廃棄場（捨て場B・D）は、共に段丘崖に形成されており、捨て場BはH04～06，I04～06、捨て場DはM02～04，N02・03に位置している。遺物は中期前葉が主体であるが、前期前半の遺物も出土している。

このようなことから、本集落跡は、集落跡1のように広場・居住域・廃棄域という3極構造からなる典型的な環状集落跡とは異なり、広場をもたず、段丘上の居住域と段丘崖に形成された廃棄域という2極構造で成り立っている。

c. 集落跡3（第159図下）

本集落跡からは、住居跡7軒・土坑15基・ピット16基・遺物廃棄場1か所（捨て場C下層）などが発見されている。

住居跡は、炉跡と考えられる焼土を含め7軒が検出されており、いずれも柱穴配置から楕円形プランの竪穴住居跡ではないかと考えている。分布は、段丘北側のH～L15～18に認められるが、集落跡1のような環状は呈していない。なお、これらの住居跡は、いづれも、はっきりした形状をなすものや規則的な柱穴配置を示すものは認められず、住居跡としての明確さを欠くことは否めない。しかし、地床炉と考えられる焼土の存在や一部に認められる壁および柱穴と考えられるピットの配列からして、SXではなくどちらかといえば住居跡と言う前向きの判断を行った。土坑は、すべてフラスコ状を呈さないものである。平面形は円形または楕円形で、口径は比較的大きく、深度は比較的浅い皿状のものがほとんどである。分布は、住居跡の周辺で目立つが、住居跡とはかなり離れて所在するものも数基認められる。遺物廃棄場（捨て場C）は、南北70m・東西最大145mの規模をもち、本集落跡の東限にあたる東側の段丘崖に形成されている。

このように本集落跡は、住居跡や土坑などが所在する段丘面上の居住域と段丘崖に形成されている廃棄域（捨て場C）で構成されている。

(2) 集落跡の動態

a. 中期初頭①期（第160図1）

本期は、土器の出土分布からして集落跡3が中心の時期である。しかし、本期に比定される住居跡は検出されていない。なお、集落跡2においては、本期に比定される遺構・遺物は発見されなかった。

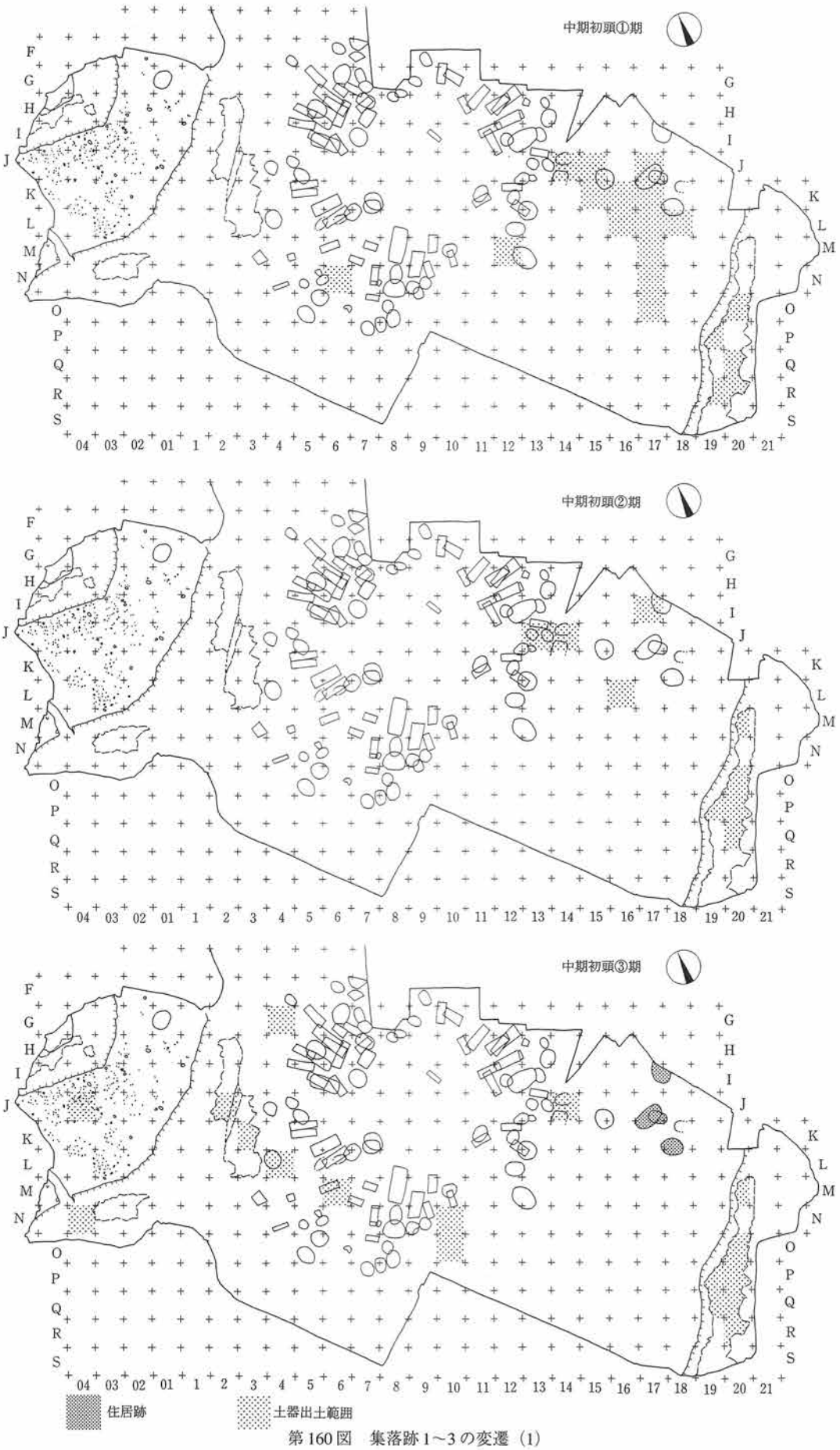
集落跡1 遺構は、検出されなかった。N6とM12それに集落跡3と接するJ14において若干の土器が出土したにすぎない。

集落跡3 遺構は、O17で土坑（SK811A）1基が検出されたのみである。

土器は、捨て場CにおいてはO20，P19，Q20，R20・21でかなりまとまった出土状況を示しているが、包含層ではM17，L17などで散発的な出土にとどまっている。

b. 中期初頭②期（第160図2）

本期も集落跡3が中心の時期であるが、本期に比定される住居跡は①期にひきつづき検出されていない。土器の出土範囲も①期に比べて縮小している。なお、集落跡2においては、本期も遺構・遺物は発見されていない。



第160図 集落跡1～3の変遷（1）

集落跡1 遺構は、集落跡3に隣接するJ14において土坑（SK1968A）が1基検出されている。土器は、SK1968A以外ではJ13において出土が認められるのみである。

集落跡3 本期に比定される遺構は検出されていない。土器の出土範囲も①期よりも縮小しており、I17とL16のみである。

c. 中期初頭③期（第160図3）

①・②期にひきつづき集落跡3が中心であるが、①・②期と比べて集落の様相が大きく変化した時期である。集落跡3において本期に比定される住居跡が検出され、土器の出土も1～3の集落跡で確認されるなど、本遺跡において集落跡の存在が初めて具体的に確認された。

集落跡1 遺構は、検出されていない。土器の出土は、包含層などのG4, J14, L4, M6, N10, O10と捨て場AのJ2, K3において認められる。包含層などからの出土範囲は、環状的なことから場合によっては住居跡の存在も予想される。

集落跡2 遺構は、検出されていない。土器は、ピット群が所在する台地上のJ04と捨て場B西隣のN04において若干の出土が確認されている。

集落跡3 本集落跡がピークをむかえ、遺構は、4軒の住居跡（SI2007A, SI3172A, SI3173A, SI3174A）、4基の土坑（SK395A, SK399A, SK2049A, SK2230A）などが検出された。土器は、住居跡や土坑が検出されたグリッドを中心に出土し、捨て場Cにおいては①期～③期の中で最も出土範囲が拡大した。

d. 中期前葉①期（第161図1）

集落跡3は実質的に廃絶し、中心が集落跡1と2に移行する時期である。本期に比定される住居跡は検出されていないが、土器の出土範囲は中期初頭③のほぼ2倍に拡大する。

集落跡1 本期に比定される遺構は、土坑4基（SK135, SK329A, SK1220A, F1）のみであるが、土器の出土範囲は、住居跡群の外周域にそって馬蹄形状を呈している。この出土範囲は、未調査区に接していることから、さらに北東方向に広がり、楕円的な環状をなす可能性がある。このような土器出土範囲の状況からみて、時期不明の住居跡などのなかに当該期に属する住居跡が存在する可能性が十分に考えられる。捨て場Aにおいては、住居跡存在の可能性を裏づけるかのように、全域にわたって土器の出土が認められる。

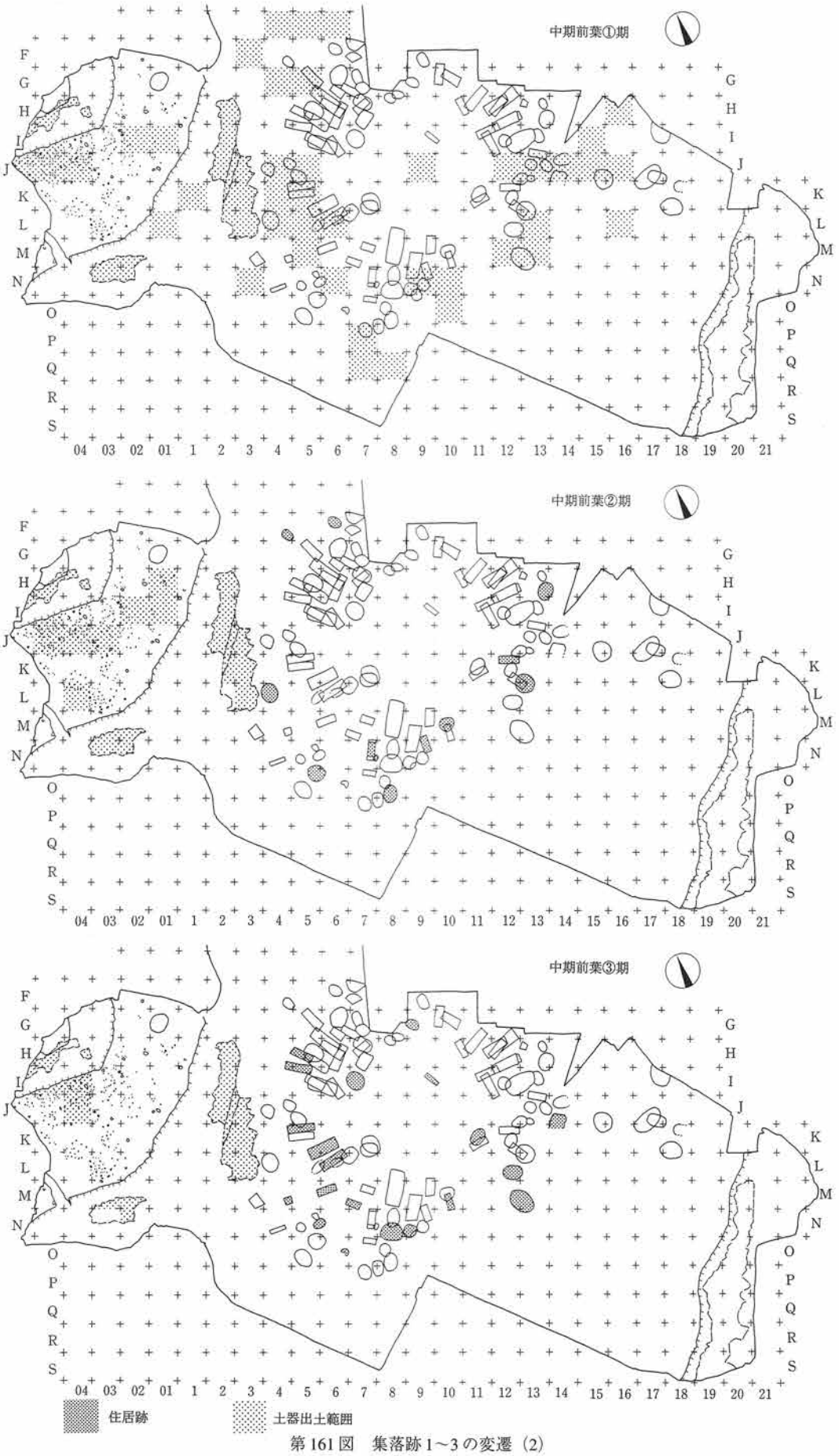
集落跡2 明確に本期に比定される遺構は確認されてないが、良好な一括土器（一括土器429B）が存在する。土器は、土坑やピット群が所在する台地上ではJ04・05, I01・02を中心に出土が確認されている。

捨て場B・Dにおいては全域で土器が出土しているが、捨て場BのI06, H05・06からの集中的な出土が目立つことから、I06, J04・05付近のピット群などの中には本期に比定される遺構が存在するものと予想される。

集落跡3 本期に比定される遺構は、確認されていない。土器の出土地点は、集落跡1と接する部分において数グリッド認められるが、集落跡1の土器出土範囲が本集落跡のエリア内に食い込んで延びているものと考えられる。なお、捨て場Cからは、当該期の土器は出土していない。

e. 中期前葉②期（第161図2）

前葉①期と同じく集落跡1と2が中心となる時期である。住居跡では、環状的な分布が具体的に確認されるなど、本遺跡において環状集落の成立が初めて確認された。



第161図 集落跡1～3の変遷（2）

集落跡1 本期に比定される遺構は、12軒の住居跡（SI755，SI51A，SI471A，SI473，SI1309A，SI1771A，SB756，SB1848A，SB3159A，1住，27住，31住）と8基の土坑（SK584，SK61Aa，SK75A，SK1112A，SK1861A，SK1945A，F30，土坑36）などである。住居跡は、環状的な配置をとるかたちで検出された。環状集落の北東部分は、昭和57・58年度の調査区外へのびるものと予想され、その規模は長径約130m・短径約100mの規模の楕円形を呈するものと考えられる。捨て場Aでは、ほぼ全域で土器の出土が認められる。

集落跡2 土器の出土は、遺構が所在する台地上ではH01，I01・02・04，J03～05，L04確認されており、段丘崖に位置する捨て場B・Dにおいては全面で認められる。土器の出土範囲の広がりや出土量からみて、本期と①期が本集落跡の中心時期と考えられる。

f. 中期前葉③期（第161図3）

集落跡2が衰退し、集落跡1が単独で主体となる時期である。

集落跡1 本期に比定される遺構は、20軒（SI151，SI759，SI154A，SI349A，SI445A，SI1602A，SI1611A，SI1896A，SB752，SB753，SB754，SB1262A，SB1299A，SB3157A，SB3165A，13住，29住，36住，38住，1柱列）という最も多くの住居跡や31基（SK460，SK494，SK61Ab，SK286A，SK336A，SK1229A，SK1409A，SK1483A，SK1531A，SK1558A，SK1681A，SK1838A，SK1858A，SK1897A，SK1910A，SK1946A，SK1958A，SK1973A，SK2074A，SK2538A，SK2548A，SK2628A，SK3058A，F19，F25，F33，F56，土坑4，土坑5，土坑14，土坑61）の土坑などである。それらの遺構数や遺物量からみて本集落跡がピークをむかえたものと考えられる。住居跡の分布状況は、前葉②期と異なって円形の環状に変わり、その規模は径約100mである。捨て場Aにおいても全域で土器の出土がみられる。

集落跡2 遺構は、本期に比定されるものとして土坑3基（SK161B，SK186B，SK162B）が検出された。しかし、土器の出土範囲は、台地上ではI04・05，K04と前葉②期よりも縮小し、捨て場B・Dでは一部に出土が認められない区域が生じ、土器の出土量も前葉①・②期の半分くらいに減少するなど衰退傾向がはっきりとうかがえる。

g. 中期中葉①期（第162図1）

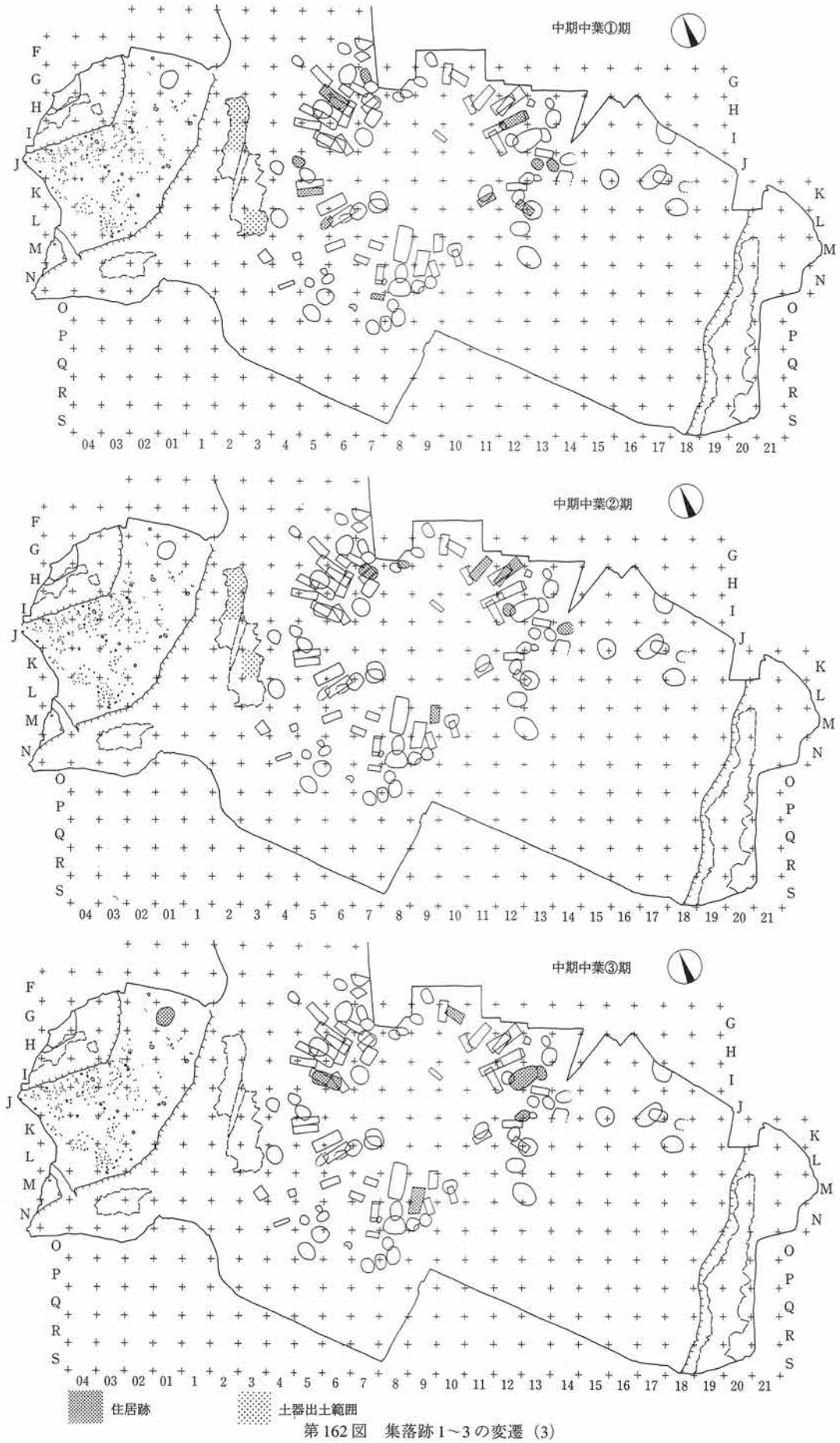
集落跡2も実質的には廃絶し、遺構の検出や土器の出土がほとんど集落跡1に限られるようになる時期である。

集落跡1 本期に比定される遺構は、住居跡が11軒（SI1263A，SI1893A，SI3154A，SI3170A，SB768，SB3153A，SB3161A，SB3167A，3住，7住，21住）、土坑4基（SK52A，SK212A，SK1614A，SK2655A）などで、前葉③期よりもその数は減少する。住居跡の分布は、北東側および南東側に空白域がみられるが、ほぼ円形の環状で、その規模は径約90mである。捨て場Aにおいても土器の出土は、H2，I2，L3に限られるようになり、集落跡全体の出土量も前葉③期の半分くらいに減少する。

h. 中期中葉②期（第162図2）

中葉①期と同じく、遺構の検出や土器の出土がほとんど集落跡1に限られる時期である。

集落跡1 本期に比定される遺構は、住居跡7軒（SI40B，SB3158A，5住，16住，23住，30住，35住）、土坑13基（SK243A，SK1370A，SK1670A，SK1880A，SK1925A，SK2539A，SK2675A，F7，F11，F13，F16，F34，土坑22）などである。住居跡の分布は、集落跡の東半分にかたより、西側部分に空白域が生じるが、基本的には



第162図 集落跡1～3の変遷（3）

環状と考えられ、その規模は径約60mとさらに縮小する。

i. 中期中葉③期（第162図3）

集落跡1～3において遺構・遺物が確認される最後の時期である。

集落跡1 本期に比定される遺構は、住居跡6軒（SI1892A・SB130A・14住・9住・20住・25住）、土坑4基（SK1306A・SK2619A・F8・土坑53）である。住居の分布は、整った環状を呈し、その規模は径約70mである。捨て場Aにおいては、土器の出土は確認されなかった。

集落跡2 中葉①期・②期では比定される遺構は検出されず、土器の出土もほとんど認められなかったが、本期においては住居跡1軒（SI160B）が確認された。土器は住居跡内を中心に出土した。何ゆえ、本期において住居跡1軒のみが構築されたかは不明であるが、前葉③期と本期では2時期の空白があることから集落跡2と、この竪穴住居跡とは直接的なつながりはないものと考えられる。なお、前述したように前葉①期～③期では、遺構の多くはピット群と土坑であり、本期は竪穴住居跡であるという点は、前葉①期～③期の遺構群、特にピット群の性格を考える上でひとつの示唆を与えてくれるものと考えられる。

以上のように、中期初頭～中葉に比定される集落跡1～3の変遷を土器編年に沿ってみてきたが、最後に、それらをとりまとめてみると次のようになる。

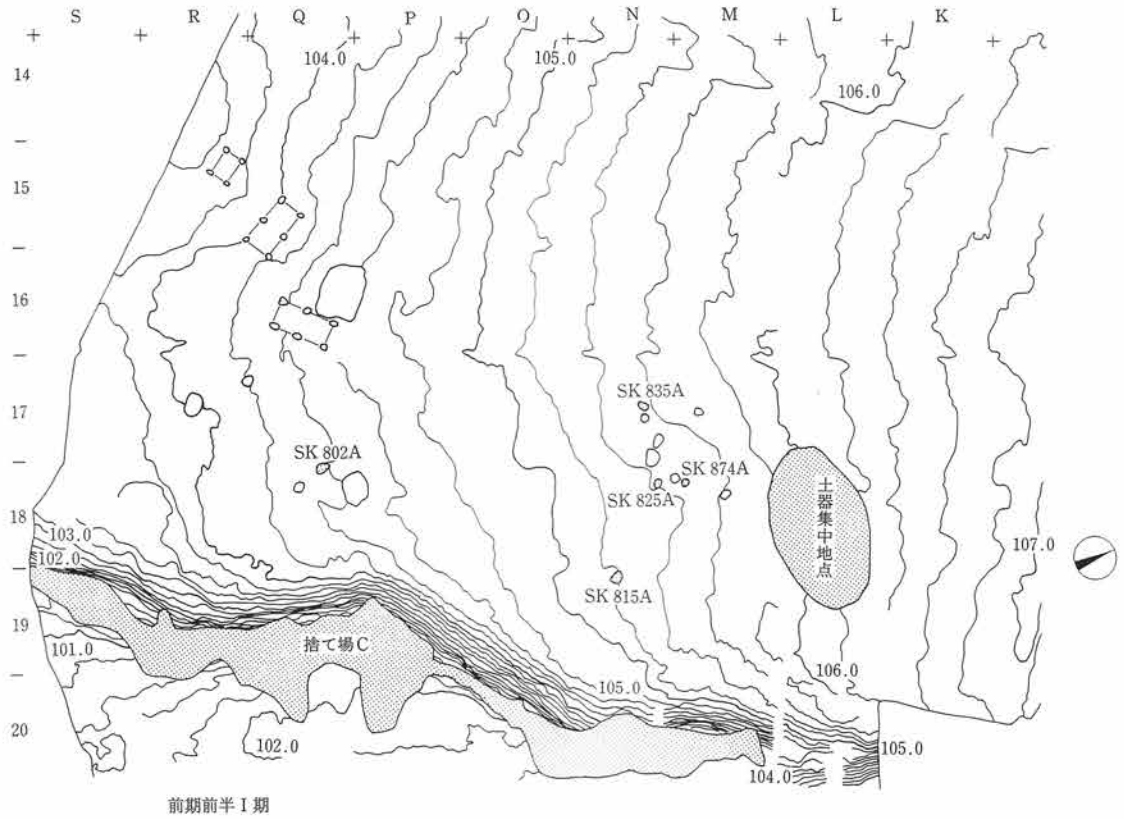
初頭は、集落跡3が中心となる時期である。①・②期においては、土器は捨て場Cを中心にそこそこの出土を示すが、遺構は土坑やピットなどが検出されたのみで、住居跡は確認されていない。③期は集落跡3がピークをむかえる時期で、集落跡3で住居跡群が検出されたことにより、集落跡の存在が初めて具体的に認識された。土器の出土も集落跡2で初めて確認されるなど、出土範囲は拡大し、出土量も増大した。

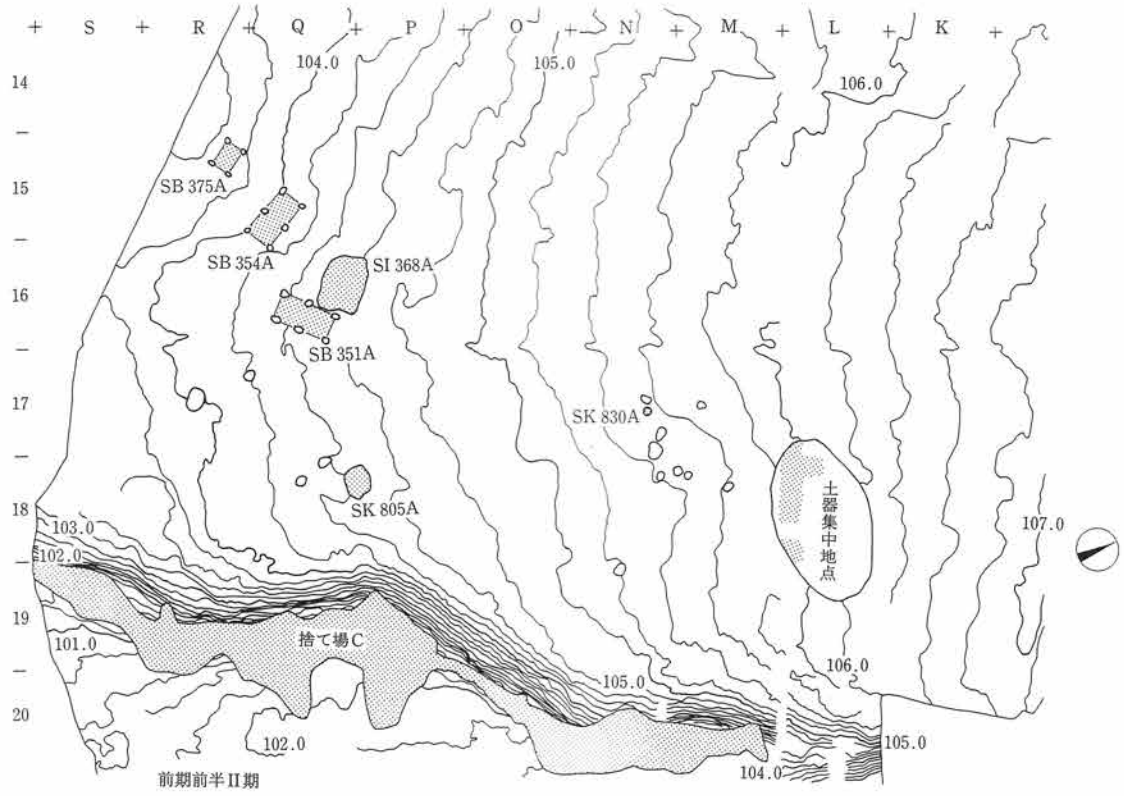
中期前葉は、集落跡1と2が併存（小林1993）していた時期である。①期には中心が集落跡3から集落跡1・2に移行し、②期では、集落跡1において12軒の住居跡が環状的な配置をとるかたちで検出されたことにより、本遺跡における環状集落の成立が確認された。③期は、集落跡1がピークをむかえるとともに、集落跡2が衰退しはじめる時期で、集落跡1への一元化が進行する。中期中葉は、集落跡1～3における居住空間が集落跡1にほとんど一元化される時期である。しかし、集落跡1においても集落跡2と併存状態にあった前葉当時の勢いはみられず、最後まで環状集落は維持するが、捨て場Aへの土器の廃棄も減少の一途をたどり、中葉後半を待たずに廃絶する。

B 集落跡4について

集落跡4の時期は、集落跡1～3とは異なり、縄文時代前期前半に比定される。本県における縄文時代前期の集落跡の発掘調査例は少なく、ほぼ全面にわたって発掘調査が実施され、調査結果が公表または公開されたものは、今までに古町B遺跡（秦・小林1992）と柏崎市大宮遺跡（柏崎市教育委員会1994）の2例にすぎない。この2遺跡も前期後半の諸磯式並行期に比定されるもので、本遺跡の集落跡4のように前期前半に属するものは、本県においては皆無である。ここでは、集落跡4で検出された遺構やその変遷および土器の出土範囲について述べてみたい。

前述したように、本集落跡はL～S15～20の間に位置し、その面積は約3,500㎡である。遺構は、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡3軒、土坑15基、土器集中地点1か所、遺物廃棄場1か所などが検出されている。そしてこれらの遺構は、出土土器により大湊式に比定される前期前半Ⅰ期（関山Ⅱ式並行）と根小屋式に比定





第163図　集落跡4の変遷

される前期前半Ⅱ期（有尾式並行）に２分される。

前期前半Ⅰ期に属する遺構は、土坑５基（SK874A・SK825A・SK835A・SK815A・SK802A）と土器集中地点および遺物廃棄場（捨て場Ｃ下層）である。土坑の分布には規則性は認められず、M18，N17～19，Q18に散漫的に広がっている。土器集中地点は、L18を中心に周辺のL17・19，M18の一部にまたがるかたちで検出された。ここからは、一括土器2186Aを含む多くの土器が出土したが、その出土量は包含層から出土した前期前半Ⅰ期の土器の大半を占めている。土器集中地点からは、住居跡などの遺構は検出されなかったが、黒色土中に何らかの遺構が存在した可能性は十分に考えられる。遺構が所在する段丘面上ではこのほかに、K19−13，L17−8，M18−9，N18−14・25，N17−17・18・25，N18−14・25，O17−2，O18−5で当該期の土器が出土している。捨て場Ｃ下層は、M～S19，M～R20に位置し、前期前半Ⅰ期の土器は、全体にほぼまんべんなく出土しているが、R19・20以南では出土範囲が縮小する。このようなことから前期前半Ⅰ期段階の集落跡４の中心部分は、土器集中地点と土坑が集中気味に分布するL～N17～19付近と予想される。

前期前半Ⅱ期に属する遺構は、竪穴住居跡１軒（SI368A）、掘立柱建物跡３軒（SB354A・SB375A・SB351A）、土坑２基（SK830A・SK805A）と遺物廃棄場（捨て場Ｃ下層）である。竪穴住居跡は、P16とQ16の境界付近に位置し、平面形は隅丸方形に近く、地山への掘り込みは浅いが、壁は全周において認められた。明確に柱穴といえるものは検出されず、検出されたピットの配置も不規則であった。炉跡や焼土も確認されなかった。覆土は褐色を呈し、黒褐色土を主体とする中期の遺構の覆土との違いは明確であった。掘立柱建物跡は、１間×２間のものと１間×１間のものの２形態が認められた。いずれも柱穴は、竪穴住居跡のピットと比べて径が大きく深度も深く、柱間の通りも直線的であった。しかし、竪穴住居跡にみられるような掘り込みや壁および炉跡・焼土は確認されなかった。このような点からこの掘立柱建物跡は、竪穴住居跡ではなく、長野県阿久遺跡にみられるような方形柱列（土屋1982）に類似するものと考えられる。また、掘立柱建物跡に近接して同時期の竪穴住居跡が検出されていることも、これらの掘立柱建物跡は竪穴住居跡とは異なり方形柱列に類似する遺構であるという予測を裏付ける根拠のひとつになるものと考えられる。なお、竪穴住居跡に燐接するSB351Aは、柱穴内などから土器は出土していないが、その形態や規模などから他の掘立柱建物跡と同時期に比定される可能性が高い。土坑は、大型のものと小型のものがかなりの距離を隔てて検出された。土器の出土は、遺構が存在する段丘面上では、L17−1，L18−3～5，N17−25，O17−20など11地点で確認されている。捨て場Ｃ下層では、全域でほぼまんべんなく出土しているが、M～O20，P19・20，Q19，R・S19といったように北側より3群に分割できる。このようなことから前期前半Ⅱ期における集落跡4の中心域は、竪穴住居跡や方形柱穴列が検出されたQ15・16とR15付近と予想されるが、本期の土器の出土範囲が希薄ながらもⅠ期よりも広がることから、本期における集落跡4の範囲は調査区域外も含めかなり広範囲におよぶものと予測される。

以上のようなことからⅠ期とⅡ期における集落跡4の動態を比較した場合、検出された遺構の広がりや内容および土器の出土範囲などからみて、集落跡4はⅠ期よりもⅡ期の方にピークがあったものと考えられる。

3 石 器

A 新潟県の石器組成の概要と清水上遺跡

(1) はじめに

ここでは県内の縄文時代中期を中心とする石器組成を整理することで、本遺跡の位置づけを試みたい。清水上遺跡の石器は石核・剥片・石製品を除くと17の器種に分類することができた。これらの中には石器研究当初より形式認定され、その概念が研究者または報告者間でほぼ共通理解されている器種（石鏃・打製石斧・磨製石斧等）もあれば、三脚石器や板状石器のように報告者の分類により、器種の認定概念が若干異なるもの、そして、不定形石器のように報告によっては抽出さえしていないものも存在する。また、遺跡の多くは、複数の時期が重複し、短期間の状況を示すものは少なく、出土した石器の帰属時期の限定を困難にしている。そして、遺跡の内容・規模により石器の種類や量が変化することも想定され、上記と合わせ石器組成による厳密な分析に支障をきたす大きな要因となっている。しかし、これらの不安要素を認識しつつ、資料をある程度厳選し、大きな流れをとらえようとした場合、石器組成は当時の生活および生業を理解する上で、有効な手段と成り得る。したがってここでは、一般的に認識・抽出されているであろうと思われる器種を取り上げ、これらをさらに用途の枠で分類し、その増減を中心に石器組成の変遷を整理してみたい。用途別の分類（鈴木1991）は、以下のとおりである。なお、今回は生活・生産用具を中心に分析するため石製品等の宗教関連具と推定されるものは除いた。また、おおまかな組成とその地域区分の整理に主眼をおいたため、対象とした遺跡の立地・規模・性格等の諸要素は考慮していない。上記諸要素を考慮した分析は今後の課題となる。

A 狩猟具	B 採取・加工具	C 調理具
石鏃	石錐	磨石類
尖頭器	打製石斧	石皿
石錘	磨製石斧	石匙
	篦状石器	
	三脚石器	
	板状石器	

補足 1、抽出した器種の中には報告者によって認識されていないものも若干含まれるが、これをAからCに大別することにより、極力、比率に影響しないようにした。2、多量に出土する不定形石器の中にはB・Cに含まれるものも多いと推定されるが、報告の中で抽出していない場合が想定されるので、ここでは取り扱わない。3、尖頭器の中には石銛を含む。4、石錘の一部は編み物を編む錘との考えもあるが、ここでは魚網錘として取り扱う。土器片錘は取り扱っていない。5、磨製石斧は製作跡で大量出土する未成品も含む。6、三脚石器・板状石器は使用痕の観察から実用の加工具と推定し、ここで取り扱う。ただし、全面が研磨されたようなものは除外した。7、石匙は加工具の機能も合わせもつと推定されるが、ここでは、調理具に含める。

(2) 石器組成の地域性

狩猟具＞調理具＞採取・加工具型（A＞Bは、BよりもAが多量に出土することを示す）

佐渡の長者ヶ平遺跡（小林ほか1983）・吉岡惣社裏遺跡（本間1987）・堂の貝塚（計良1977）など前期末から中期中葉を中心とする各遺跡でみられ、石器器種全体数の約半数またはそれ以上が狩猟具で占められる。ま

た、情報は不備だが後期初頭を中心とする垣ノ内遺跡（本間1981）・浜田遺跡（本間1975）や後期から晩期の三宮貝塚（中川1963）からも多数の狩猟具が出土しており、少なくとも縄文時代中期初頭以降、後期前葉くらいまでは石鏃に大きく依存した狩猟型の生業形態をもった地域と言えそうである。また、採取・加工具が少ないのは打製石斧の出土量が極めて少ないことに原因があり、よく対比される磨製石斧の量を越えることはない。

このような狩猟型は新潟平野およびその縁辺丘陵部に立地するいくつかの遺跡でもみられ、巻町の大沢遺跡Ａ地区（前山1990）や豊原遺跡ⅠからⅡＣ層（前山1994）、寺泊町の大平遺跡（本間1991）などで石鏃が高比率である。大沢遺跡は黒曜石の比率から、石材調達と分配に関与した特殊集団との見解があるが、当該地域の必要不可欠な器種とその依存度の高さを反映した遺跡には変わりがない。

その他、狩猟具を比較的多く出土する遺跡として、吉野屋遺跡（中島ほか1974）・水上遺跡（池田ほか1988）が上げられるが前者は新潟平野を見おろす丘陵部に立地し、角田山麓の前記遺跡と似通った立地、および生業形態をもっていたものと考えたい。後者は山間部に立地し多量の磨石類を出土するものの打製石斧は全く出土せず、報文にも指摘されているように当該地域の石器組成上、著しく異質である。現段階では調査面積が狭く、正しい組成を示していないと理解しておきたい。

採取・加工具＞調理具＞狩猟具型

新潟県の山間部および丘陵部を中心に分布する。時期的な傾向としては、主に中期前葉から中葉にかけてで、打製石斧の爆発的需要と磨製石斧の安定的出土、それに石鏃の少数保有に起因するところが大きい。打製石斧の大量分布は新潟県の中央部山間地域および丘陵部｛南原遺跡（駒形ほか1994）・清水上遺跡土石流（新潟県教育委員会1990b）・五丁歩遺跡（新潟県教育委員会1992）・松葉遺跡（小熊1994）・笹山遺跡（十日町市博物館1992）・清水上遺跡（前掲1990b）・徳右ｴ門山遺跡（秦ほか1987）・八反田遺跡（渡辺ほか1984）など｝で、これと対称に磨製石斧を多く出土する遺跡は萩野遺跡（新潟県教育委員会1994b）・横峰Ｂ遺跡（石川1981）など北部地域に点在する。また、川原田遺跡（新潟県教育委員会1987）など調理具の数に匹敵する採取・加工具が出土することから、西部地域にも同様な遺跡が存在する可能性が高い。これらの2地域での打製石斧と磨製石斧の比率の違いは前者｛上林塚遺跡（新潟県教育委員会1990a）・岩原Ⅰ遺跡（新潟県教育委員会1990a）・上ノ台Ⅱ遺跡（佐藤1989）・萩原Ｂ遺跡（佐藤1987）・十二木遺跡第4地点（家田1988）｝、後者｛上ノ平遺跡Ａ地点西地区（新潟県教育委員会1994a）・岩野Ｅ遺跡（新潟県教育委員会1986）・布目遺跡（小熊1994）・丸山遺跡（山川1988）・刈羽貝塚（新潟県教育委員会1958）・古町Ｂ遺跡（秦ほか1992）・鍋屋町遺跡（室岡1984）｝とも早・前期段階からすでにその前身がみられる。

調理具＞採取・加工具＞狩猟具型

前述の採取･加工具＞調理具＞狩猟具型とほぼ同じ分布を示すが中央部山間地域および丘陵地域は中期後半以降の傾向である。打製石斧と磨製石斧の比率にみられる地域差（中央部山間地域および丘陵地域と北部・西部地域および海岸部）は継承される。代々、打製石斧の所持が少ない北部・西部地域および海岸部では中期全般｛柿ノ木町遺跡（親跡1992）・五月沢遺跡（木島1992）・タテ遺跡（新潟県教育委員会1985）・下ゾリ遺跡（富樫ほか1990）・南田遺跡（親跡1988）・十二平遺跡（秦ほか1990）・前田遺跡（田海ほか1993）・大貝遺跡（岡本ほかS42）・下久保遺跡（富樫ほか1991）｝の傾向としてとらえられ、一部、南田遺跡・大貝遺跡の中頸城方面で打製石斧の出土量が磨製石斧を越える遺跡が存在するが、中央部山間地域の比ではなく、地理的からも両者の折衷的な地域と考えられる。

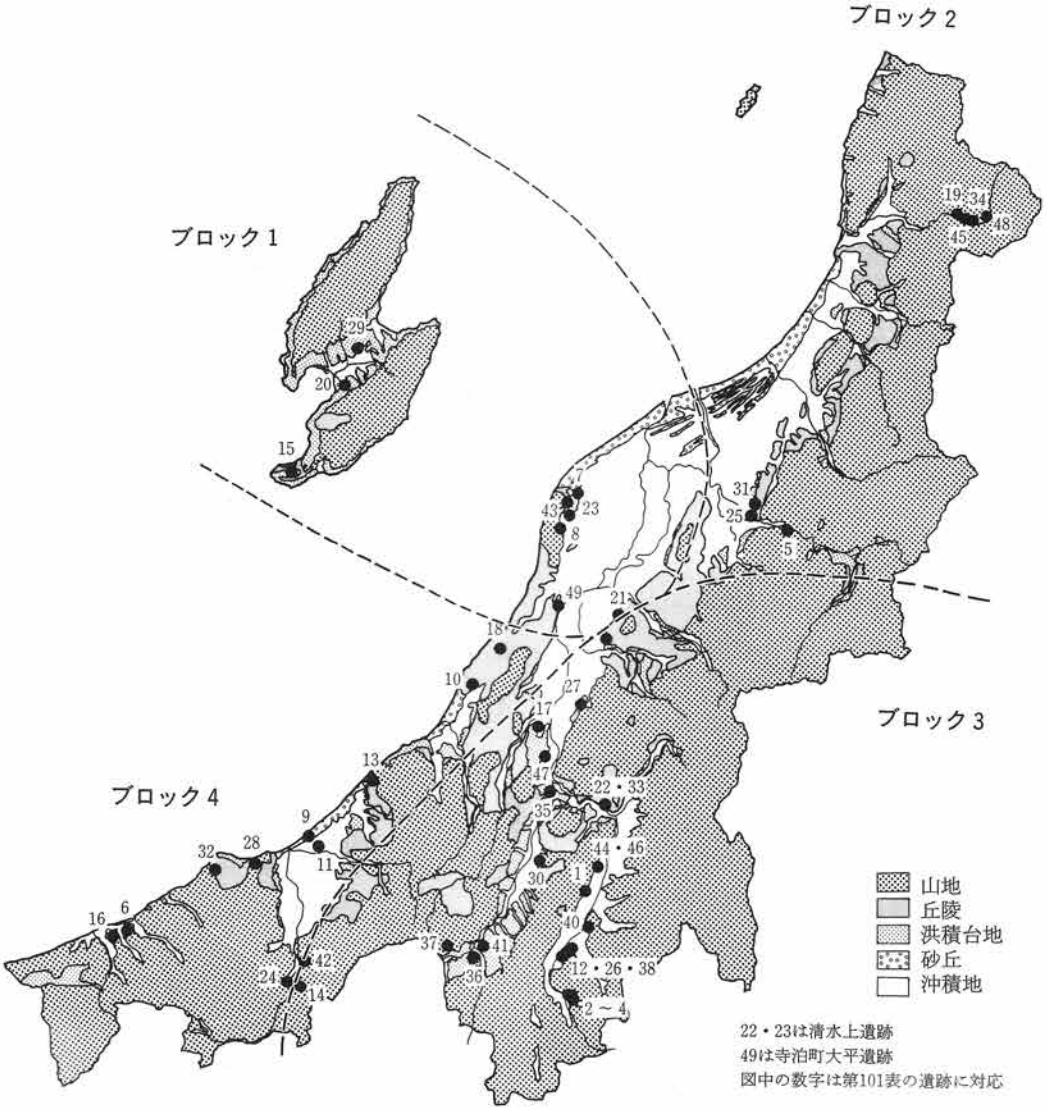
中央部山間地域および丘陵部ではおおむね中期後葉以降、この傾向｛沖ノ原遺跡（渡辺ほか1984）・万條寺

3 石 器

林遺跡（池田ほか1988）・羽黒遺跡（金子ほか1982）・宮下原遺跡（池田ほか1981）・水上遺跡第3ブロック（池田1990）・城之腰遺跡（新潟県教育委員会1991）｝を強くし、打製石斧が徐々に減少することにより採取・加工具の比率が著しく低下する。また、前記の打製石斧の減少は、魚野川および信濃川流域の状況をみる限り、標高の低い丘陵部において早い展開を示し、山間部では後期段階まで打製石斧を多量に所持する傾向がある。

以上、簡単に県内の縄文時代中期を中心とする用途別石器組成の変遷を整理してみたが、そこからみられる地域性は下記のように3組成4ブロックとして整理されよう（第164図）。

組成	地域	その他
組成1（狩猟具＞調理具＞採取・加工具型）	ブロック1（佐渡・新潟平野および縁辺丘陵部）	
組成2（採取・加工具＞調理具＞狩猟具型）	ブロック3（中央部山間地域および丘陵部）	中期後半は組成3に移行
組成3（調理具＞採取・加工具＞狩猟具型）	ブロック2・4（北部・西部および海岸部）	組成2が少数存在



第164図　用途別石器組成の地域性

これらの地域性に大きく関わる器種は前述のごとく石鏃・打製石斧・磨製石斧で、これらの増減に大きく左右される。また、ブロック1・3・4でみる限り、これらの組成は中期以前からの継承で、縄文時代のかなり早い段階で完成された可能性が高い。そしてその後、ブロックが解体するか否かは資料の限界で明言できないが、縄文時代の後半から終末にかけて徐々に石鏃を多出する狩猟型の傾向を強くするものと考えられる。

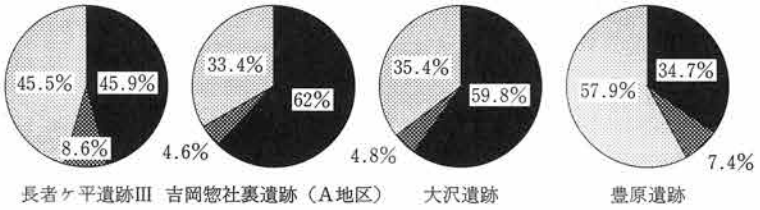
次に、これらの組成およびブロックの背景に存在する要因について、若干触れたいが詳細な検討を加えていないので、ここでは可能性および課題について簡単に述べたい。

ブロック1を考える場合、隣接する平野部（新潟平野・国中平野）の状況を抜きには語れない。新潟平野の海岸寄りの地域に立地する遺跡については大略、小規模で、石鏃が目立って採集され、土器片は少なく狩猟のキャンプ地と考えられる遺跡が多いという指摘（本間1995）がなされている。平野部一帯が狩場と化していたと考えられ、ある程度の定住が考えられる遺跡としては大砂丘に点在する遺跡の一部ないし、平野部をとりまく丘陵縁辺部に存在する遺跡で、両者がかなり密接な関係にあったことは推定に易い。当時の平野部は河川・潟湖・湿地と海岸に出来始めた砂丘によって構成されており、潟湖・湿地に鳥類や小動物、中・大型の渡り鳥の群、そして、各種の魚類などは狩猟の対象となったであろうし、特に中・大型の渡り鳥は短期間で大量に狙える獲物として重要な位置を占めていたのではないだろうか。 当該地は調理具もある程度の出土を見ることから、植物食の基盤は維持していたものの、狩猟対象となった動物層が豊富で獲得しやすい環境にあったのではないかと推測する。また、佐渡の国中平野についても同様であると考える。

ブロック3は中部高地的な石器組成で、中期の前半は地下茎根菜類採取具である打製石斧とその加工・調理具と考えられる石皿・磨石類が多量に出土することから、植物食料に大きく依存した地域と考えられる。特に打製石斧の増加は魚野川・信濃川流域の山間部および丘陵部｛清水上遺跡（前掲1990b）・五丁歩遺跡（前掲1992）・森上遺跡（金子ほか1974）・八反田遺跡（前掲1984）・笹山遺跡（前掲1992）｝で著しい。また、打製石斧大量保持は早期段階からはじまり、前期後葉の十二木遺跡（前掲1988）では、かなり安定多数を確保するに至ることは前に触れた。そしてこれらの傾向は中期後葉以降、打製石斧の量が徐々に減少する事により採取・加工具の比率が低下し、以前より安定的な保有を示す調理具が大きな比率を示す調理具＞採取・加工具＞狩猟具型へと移行する。これらの要因の一つとして、複式炉の分布状況とその南限に分布する打製石斧の大量出土遺跡、そして分布状況の時期的変遷等により、アク抜き技術の伝播と食料対象物の変革とを結びつけた説（渡辺1982）があり、根菜類採取具である打製石斧の中期後葉以降の減少傾向は、根菜類に変わる食料資源の開発と獲得、そしてその技術的伝播・普及を考える上で大変興味深いことである。しかし、複式炉の分布と消滅、そして後期以降の打製石斧の分布の広がり、また、打製石斧を代々、多くもたない地域の存在など、複式炉を打製石斧と関連付け、アク抜き技術の伝播を理解するには多くの問題が存在する。今後、各地域での細かな分析と資料蓄積を待って検討しなければならない大きな課題であろう。

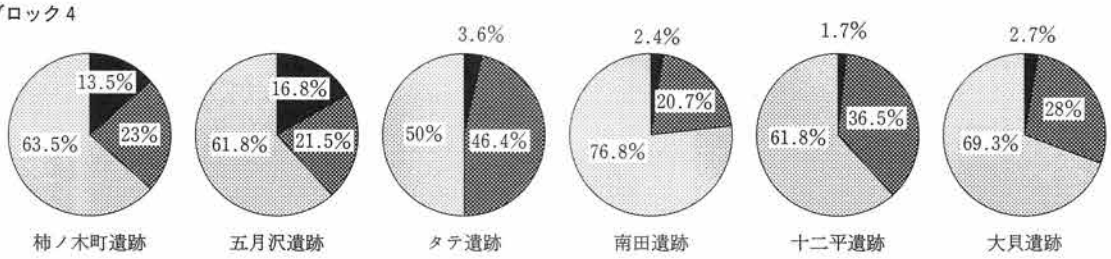
ブロック2・4は新潟県の北部・西部および海岸部の状況で調理具＞採取・加工具＞狩猟具型である。代々、打製石斧を多く所持しない地域で、調理具以外では磨製石斧に依存する割合が高い。これらの地域は地理・生業・特産等の諸要素によってさらに細分される可能性がある。その一つは北部に位置するブロック2で、石材の共通性・剥片石器の多出、打製石斧の希少性等、東北地方の影響を色濃く示す地域。そして、ブロック4に含まれる西頸城地域では各種玉製品および磨製石斧の材料である硬玉・蛇紋岩の原産地を抱え、その生産・流通に係る大規模な遺跡｛長者ヶ原遺跡（藤田ほか1964）・十二平遺跡（前掲1990）・寺地遺跡（寺村ほか1987）｝が存在する。また、海岸に近い段丘上には小規模な磨製石斧生産遺跡が点在し、特産品とも言える玉・磨製石斧生産に極めて傾倒した特殊な地域と言え、逆に言えば、玉・磨製石斧の生産無くしては大規

ブロック1の用途別組成

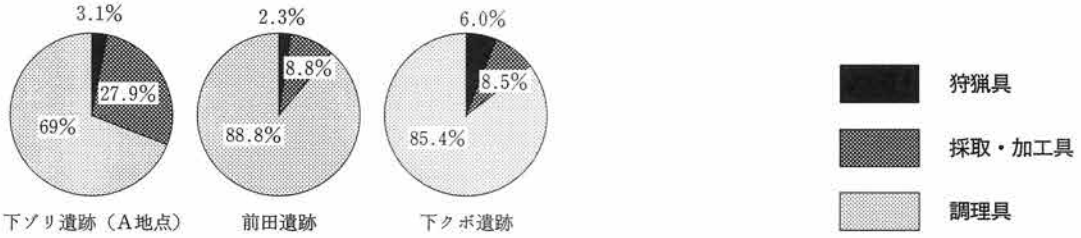


ブロック2・4の用途別組成

ブロック4

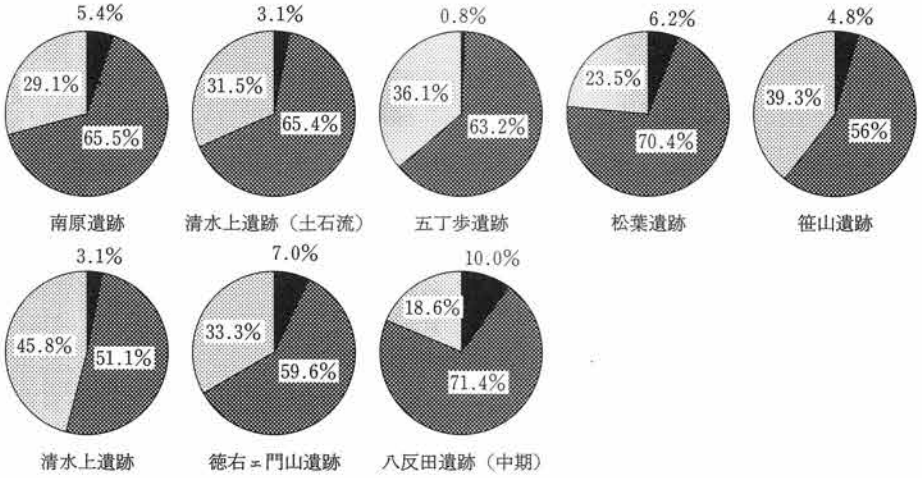


ブロック2

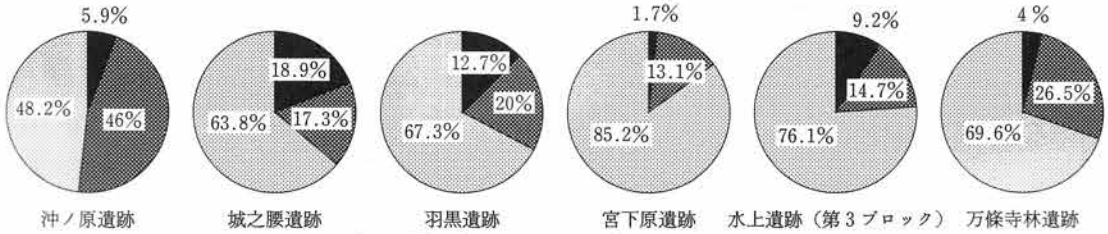


ブロック3の用途別組成

中期前半



中期後半



第165図　各ブロックの用途別石器組成

模な集落の維持存続はありえない地域と考えられよう。また、時期は新しくなるがブロック2にも磨製石斧の大規模な生産遺跡である元屋敷遺跡（川村ほか1995）が存在し、両地域の比較は消費地の在り方も含め今後興味深い課題である。

なお、今回は漁撈に係わる石錘・浮子について分析出来なかったが、当然、この方面からのアプローチも必要であろう。また、ブロック2の海岸部には良好な資料が無く、新潟平野の南側から上越市までの海岸地域では断片的な資料のみであることもつけ加えておく。

(3)　清水上遺跡出土石器群の概要

ここでは各石器の概要をまとめ、問題点を抽出したい。なお、ここで用いる組成上の比率は五丁歩遺跡（高橋1992）のまとめで用いた区分によるもで、それ以外の器種の比率については石核・剥片・石製品も含めた石器総体の比率である。

石鏃　全体で57点出土しており、そのほとんど（45点）が集落跡1からの出土であるが比率は低い。形態的にはほとんどが長身で基部の抉りが深い凹基無茎鏃である。円基鏃・平基無茎鏃も少数存在するが、その多くは大型で粗い二次加工が施されるもので、大型石鏃（岡村1979）および未成品（鈴木1992）と考えられる。しかし、E③地区から出土した4091（A5類）・4092（D類）は薄く精巧な作りで中期以外に帰属する可能性が高い。土器の分析から当地区は早期から後期まで広い時期幅をもつが、形態から言えば前者は早期に後者は後期に近似する資料がある。

尖頭器　全体で9点出土しており、内8点までが集落跡1からの出土である。石鏃同様全体の比率は少ない。柳葉形のものと逆刺しのある銛先形とを区別した。前者には丁寧な両面加工を施した1756・1758と周辺に部分的な二次加工を施した1757・1759等があり、この中には側縁部の一部に磨耗がみられるもの（1759）が含まれる。これらの磨耗は積極的な研磨行為によるものと言うより、使用の結果、磨耗した可能性が高く、突き刺すよりも「かきとる」ような使い方をしたと推側される。後者は素材面を大きく残し周辺にのみ二次加工を施すもので、実用か否かについては判断できない。

なお、集落跡4出土の3784は全体の形状から尖頭器としたが、尖頭部に不明瞭ながら磨耗痕がつくことや側縁の二次加工が粗いことなどから石錐の可能性もある。

石錐　全体で66点出土しており、比率としてはそれほど多くないが不定形石器D類などの中に同じ機能のものが含まれていることが充分考えられる。資料が少なく全体の傾向はつかめないが、錐部とつまみ部の区別が比較的明瞭なA類が集落跡2・3に高率で出現し、集落跡1ではC1・C2類の素材を大きく改変しないものが主流となる傾向がある。

石匙　全体で21点出土しており、比率は極めて低いが石錐同様、不定形石器の中に石匙の機能をあわせもつものが存在するであろう。縦長のものが一般的で、周辺のみに粗い二次加工を施すものが多く、各集落跡とも分類上の偏りはみられない。4068の資料にはつまみ部の抉りに紐接着痕と思われる黒色の付着物が顕著に残っている。

両面加工石器　全体で83点出土しており、用途不明の石器である。石器全体の比率から言えば集落跡4から集落跡1にかけ時期が新しくなるに連れて減少する傾向が認められた。

三脚石器　全体で309点の出土で、ほとんどが集落跡1からの出土である。出土量は前回の調査に比べ著しく比率を上げているが、これは時期的な相違や作業エリアの偏り等の問題ではなく、発掘および整理時の抽出精度の違いによる差と考えたい。集落跡4でわずか1点の出土で、これについては混入品の可能性もあ

第99表 各集落跡およびE③地区の石器組成

石器／地区	石鏃	尖頭器	石錐	石匙	両面加工石器	三脚石器	板状石器	打製石斧	磨製石斧	礫器類	磨石類	砥石	石皿	両極石器	不定形石	石錘	台石	石核	剥片類	石製品	合 計
集1小計	45	8	44	10	59	287	474	1440	135	157	1341	158	146	177	3800	4	10	298	23572	4	32169
比率(%)	0.14	0.03	0.14	0.03	0.18	0.89	1.47	4.48	0.42	0.49	4.17	0.49	0.45	0.55	11.81	0.01	0.03	0.93	73.28	0.01	100
集2小計	3		10	3	5	15	20	66	8	22	171	17	17	11	346	6	1	30	1328	1	2080
比率(%)	0.14		0.48	0.14	0.24	0.72	0.96	3.17	0.39	1.06	8.22	0.82	0.82	0.53	16.64	0.29	0.05	1.44	63.85	0.05	100
集3小計	4		7	1	8	4	14	32	9	12	77	7	5	16	356	4	1	16	1474		2047
比率(%)	0.2		0.34	0.05	0.39	0.2	0.68	1.56	0.44	0.59	3.76	0.34	0.24	0.78	17.39	0.2	0.05	0.78	72.01		100
集4小計		1	1		4	1		10	5	4	32	2	6	6	69	12		6	272		431
比率(%)		0.23	0.23		0.93	0.23		2.32	1.16	0.93	7.42	0.46	1.39	1.39	16.01	2.78		1.39	63.11		100
E-③	4		3	3	4			26	10	8	51	1	3	11	202	3		10	713	2	1054
比率(%)	0.38		0.28	0.28	0.38			2.47	0.95	0.76	4.84	0.1	0.28	1.04	19.16	0.28		0.95	67.65	0.19	100

第100表 各集落跡出土の主な石器比率

石器／地区	石鏃	尖頭器	石錘	石錐	三脚石器	板状石器	打製石斧	磨製石斧	石匙	磨石類	石皿	台石	砥石	小 計
集落跡1(%)	1.1	0.2	0.1	1.07	7	11.56	35.1	3.29	0.24	32.69	3.56	0.24	3.85	100
集落跡2(%)	0.89		1.78	2.97	4.45	5.93	19.58	2.37	0.89	50.74	5.04	0.3	5.04	100
集落跡3(%)	2.42		2.42	4.24	2.42	8.48	19.39	5.45	0.61	46.67	3.03	0.61	4.24	100
集落跡4(%)		1.43		1.43	1.43		14.29	7.14		45.71	8.57		2.86	100

るが、集落跡3で比較的安定した比率を示し、本石器の出現を中期初頭まで上げる好資料と考えられる。また、1819の部分的な赤彩や1839の全面に施される研磨痕など実用以外の性格をもつものが存在するが、他は使用痕の存在や様子から何かの加工に用いた道具（新潟県教育委員会1990b）と考えられる。また、各集落跡とも分類・石材等の偏りはみられない。

板状石器 全体で510点出土しており、比率からいっても三脚石器同様、主要な石器である。また、出現においても中期初頭の集落跡3で量的安定をもって出土することから、中期初頭まで上がる結果を得た。また、集落跡1において平面形が円形ないし楕円形のC類は、グリッド7ライン以西に多出する傾向がある。素材は粘板岩を中心とした節理の著しい石材で、周辺に施される二次加工は急角度の階段状の剥離である。そして、平面形態は3辺を大きく抉った三脚状や三角形を中心に円形・楕円形・不定形がある。同じく板状石器を多出する遺跡として中期前葉の五丁歩遺跡があるが、泥板岩の厚手の素材の周辺に比較的鋭角な二次加工を施し円形または楕円形を中心とした形態のもので、両者の資料には石材の選択および素材・平面形態そして刃部角度において違いを見い出すことができる。五丁歩遺跡のものはむしろ後続期の城之腰遺跡（前掲1991）・岩野原遺跡（駒形ほか1981）・藤橋遺跡（長岡市1992）出土のものに「石材」・「形態」・「刃部角度」等において共通点が多く、本遺跡のものを同じ板状石器の中でくくった場合、著しく異質な感を呈する。また、使用痕の分析からも五丁歩遺跡のそれは裏面の平坦面を主に使用する結果が得られ（沢田1994）、本遺跡の場合、肉眼ではあるが石器縁辺（二次加工の位置）に磨耗があるものが一般的である。これら両者の違いは、「用途・機能の違いから別器種として分離新設」または「同様の用途・機能をもつものの、加工する対象物の違いから生じる変化」・「使用石材による規制」等が考えられるが、使用痕の様子または次に述べる組成比率の上から「加工対象物の違い」による要因と考えておきたい。

本遺跡で三脚石器とした中にはA1類を除き石材または形態上、板状石器と区別がつきにくいものが多く、唯一区別の基準となった裏面への二次加工も「使用時の剥離（刃こぼれ）」や「加工対象物の違いによる形態上の適用」と解せば、三脚石器A2・B類の多くが板状石器に含められる可能性が生じてくる。使用痕の部位・様子からも同様な用途であったと推測され、組成を再整理した場合、三脚石器の比率がかなり下がり三脚・板状の両石器を出土する他遺跡の比率に近いものとなるであろう。

打製石斧 全体で、1,613点出土しており、各集落跡で中心的な出土量をもつ器種である。多くは板状節

理の石材を使用し、節理上で分割し素材を得る。二次加工は周辺に対して粗く施され、素材の形状を最大限利用した雑な作りのものも多く含まれる。五丁歩遺跡や森上遺跡で多出する片刃打製石斧はみられず、直刃式片刃打製石斧（C類）が少数出土する。また、分銅形を呈する資料は集落跡1・2で極わずか出土し、魚沼地域北部においても中期前葉から中葉にかけてわずかに伴出する結果を得た。

各集落跡間で分類上の偏りはほとんどみられないが、集落跡1の中でC類はグリッド7ライン以西に、D類は9ライン以西に分布が偏る傾向があり「時期差」・「系統差」の両面から今後検討する必要があるだろう。

磨製石斧　全体で170点出土し、集落跡4から1にかけて時期が新しくなるにしたがい比率が低下する。石材は複数存在するが、各集落跡で蛇紋岩を利用する割合が高い。蛇紋岩の剥片・原石等、製作にかかわる資料が出土しないため、成品・半成品の状態で本遺跡に持ち込まれた可能性が高い。他の石材についても同様で同種の剥片は少数存在するが、製作初期の段階を示す未成品は出土していない。また、刃部・基部を欠損したものの多くは、その部位に対し使用を可能にさせる再加工が丹念に施されており、かなり大事に使用していたと推測される。蛇紋岩製の磨製石斧は原石産出地に近接する長者ヶ原遺跡（前掲1964）・境A遺跡（山本ほか1991）等の生産遺跡の存在と、半成品の広域的流通（山本1991）によるところが大きいが、その他の石材を用いた磨製石斧についても本遺跡（消費地）の状況から、生産に従事した集団の存在と半成品・成品の流通が想起できる。今後、蛇紋岩とそれ以外の石材の磨製石斧の生産地と消費地の状況を時期別に整理し、そこに介在する流通状況を解明していく必要がある。

次に形態上の特徴については、集落跡4の資料が集落跡1等でみられる側面が平坦な定角式とは若干異なり、側面に丸みをもち横断面に膨らみをもつもので、先行時期の形態（大角地遺跡）をよく表わしている。また、石材別の偏りとしては集落跡1で閃緑岩製のものがすべて環状集落東の住居群周辺から出土しており、上記した流通もからめ「時期差」・「系統差」等を考える必要がある。

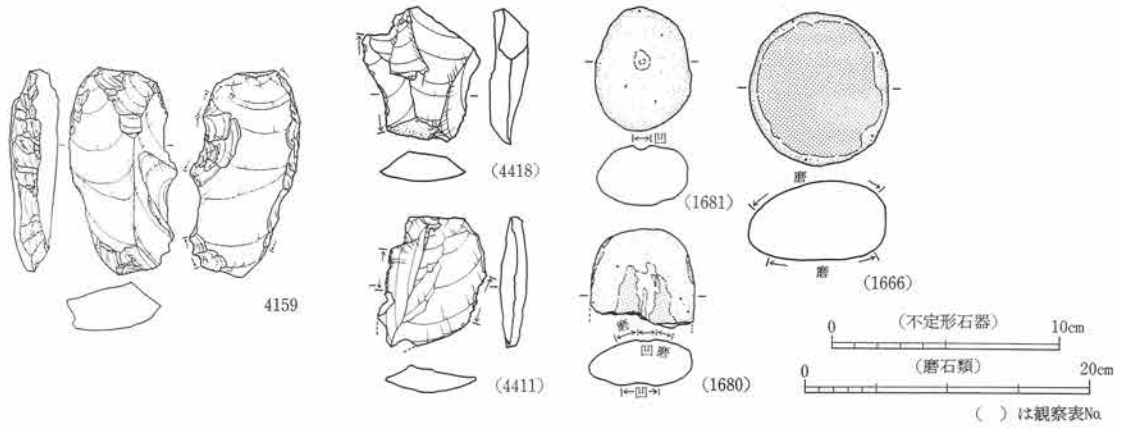
礫器類　全体で208点が出土し、集落跡1では西と東の住居群からの出土が多い。また、石材は安山岩が主体である。その他、分類上の偏りはない。

磨石類　全体で1,725点出土しており、器種の中では不定形石器に次ぐ最大の比率をもつ。各集落跡ともA・B・E類が多数を占め偏りはみられない。集落跡4から集落跡2にかけて徐々に比率が高くなるが、集落跡1に至り三脚石器・板状石器・打製石斧の採取・加工具の増加により、その比率は著しく低下する。

石皿　全体で186点出土しており、彫刻が施されたものが11点と被熱したものが多数含まれる。また、集落跡1で指摘したようにA・B類に石材の選択がみられ、前者が安山岩、後者が花崗岩を主体とし、B類は砥石の石材と同じである。B類は分類基準または石材から砥石としたほうがよい資料が多数含まれる。

砥石　前回の抽出数は14点と極めて少ないが、今回、全体で188点が出土した。この出土の差は三脚石器で触れた要因と同じと考えられる。作業面の状況は溝状を呈するものと比較的狭い範囲で平坦または緩いくぼみ状のもので、形状は不定形、石材はほとんどがきめの粗い花崗岩である。用途としては石製品や磨製石斧の研磨作業、そして、石皿的な使用が考えられるが、前二者は、対象物が搬入品と考えられることと砥石の数量に比べ対象物の数が著しく少ないことなどから可能性は低く、後者については本遺跡出土の石皿は石材選択（特にA類）があること、および作業面にはある程度の形があること、そして他遺跡の石皿の比率は本遺跡のそれと違和感が無いことなどから、同じく可能性としては低く、現段階ではこれといった対象物が見当たらないのが現状である。

両極石器　全体で226点出土している。器種の分類で述べたように両極の石核等を区別していないため限界があるが、集落跡1では東と西の住居群からの多出がみられ、また、作業面が4個2対のものは西の住居



第166図 E③地区 埋没谷3層出土石器

群からの出土が多い。

台石 全体で12点と前回同様、数は少ない。資料数が少ないため分布の偏り、形態の変遷等は不明である。

石錘 全体で33点出土し、すべて自然礫の長軸両端を打ちかく礫石錘である。比率では集落跡4が圧倒的に多く、集落跡2・3でも集落跡1と比較し高率の出土である。各集落跡で出土した資料の重量はおおむね240g前後で変わりないが、集落跡2の捨て場Dでは、わずか2点の資料であるが平均613gと大きい。捨て場Dでは数は少ないが前期の土器が少数出土しており、帰属時期が問われる。

不定形石器 全体で4,841点出土し、石器全体の比率では集落跡3が最も高率で17%以上、集落跡1が最も少なく12%弱である。この比率の変化は前回の報告で指摘されているが。今回、新たに前期前葉の集落跡4の高率出土の状況も付け加えることができた。分類上の比率は各集落跡ともC・F・J類が多数を占め、H・I類の出土が少ない傾向にある。その他、細部の検討はおこなっていない。今後、A・C・D・E類の刃部形状や使用部位が比較的明瞭なものを中心に資料の蓄積が望まれるところである。

(4) 各集落跡の石器様相

遺物・遺構の分析から今回調査した範囲には複数時期の集落が存在することが明かとなった。ここではこれらの時期を目安とし各時期の石器様相の変遷を簡単に述べたい。

本遺跡を構成する各集落および地区のなかで、比較的資料数が多く、時期幅をある程度限定できるものに、前期前葉の集落4と捨て場C下層、中期初頭の集落3と捨て場C上層、中期前葉の集落2と捨て場B・D、中期前葉から中葉の集落1と捨て場Aがある。なお、E③地区の早期後半田戸上層式土器を出土する埋没谷3層からの出土器種（第166図）は、磨石類3・不定形石器3・石皿1（観察表189）のみで、資料が少ないことからここでは取り扱わない。

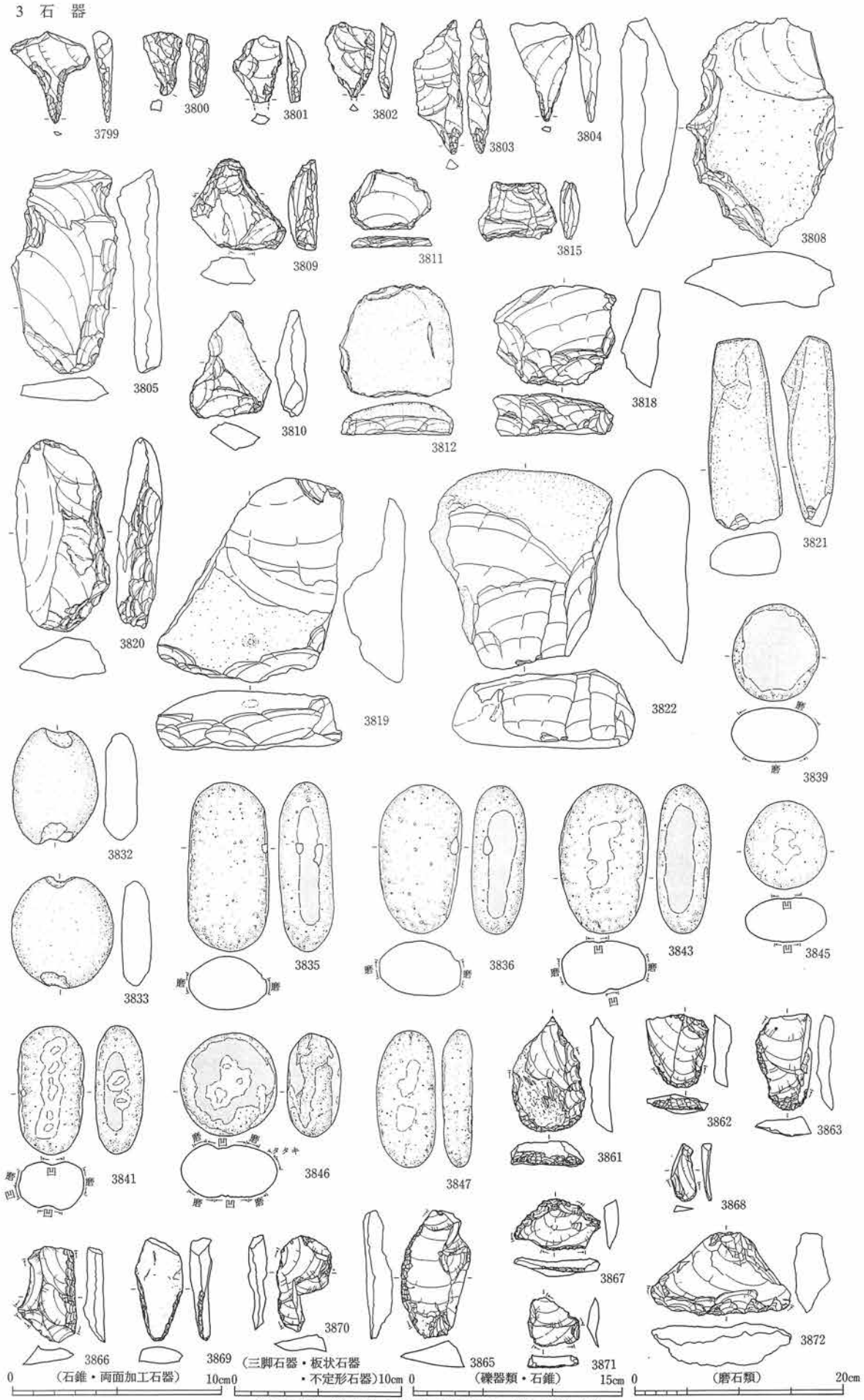
前述した用途別石器組成にみられる地域から言えば本遺跡はブロック3（中央部山間地域および丘陵部）に属す。当該地域の変遷は早・前期で磨石類・打製石斧を中心に調理具、採取・加工具が多出し、中期前葉に至って打製石斧のさらなる増加により、調理具をおさえ採取・加工具が突出し、この傾向が中葉段階まで維持される。この大きな組成の流れに従えば本遺跡の各集落（前期前半から中期中葉）の石器群は当該地域の各時期の様相とほぼ合致するものである（集落跡2は様相を異にし、それについては後述する）。しかし、個々の石器器種の数量および器種間でみられる形態差を比較した場合、個々の遺跡で細かな違いを見いだすことができる。

集落跡4（第167図）は調理具＞採取・加工具＞狩猟具型でブロック3の該期遺跡と同様の用途別組成を示

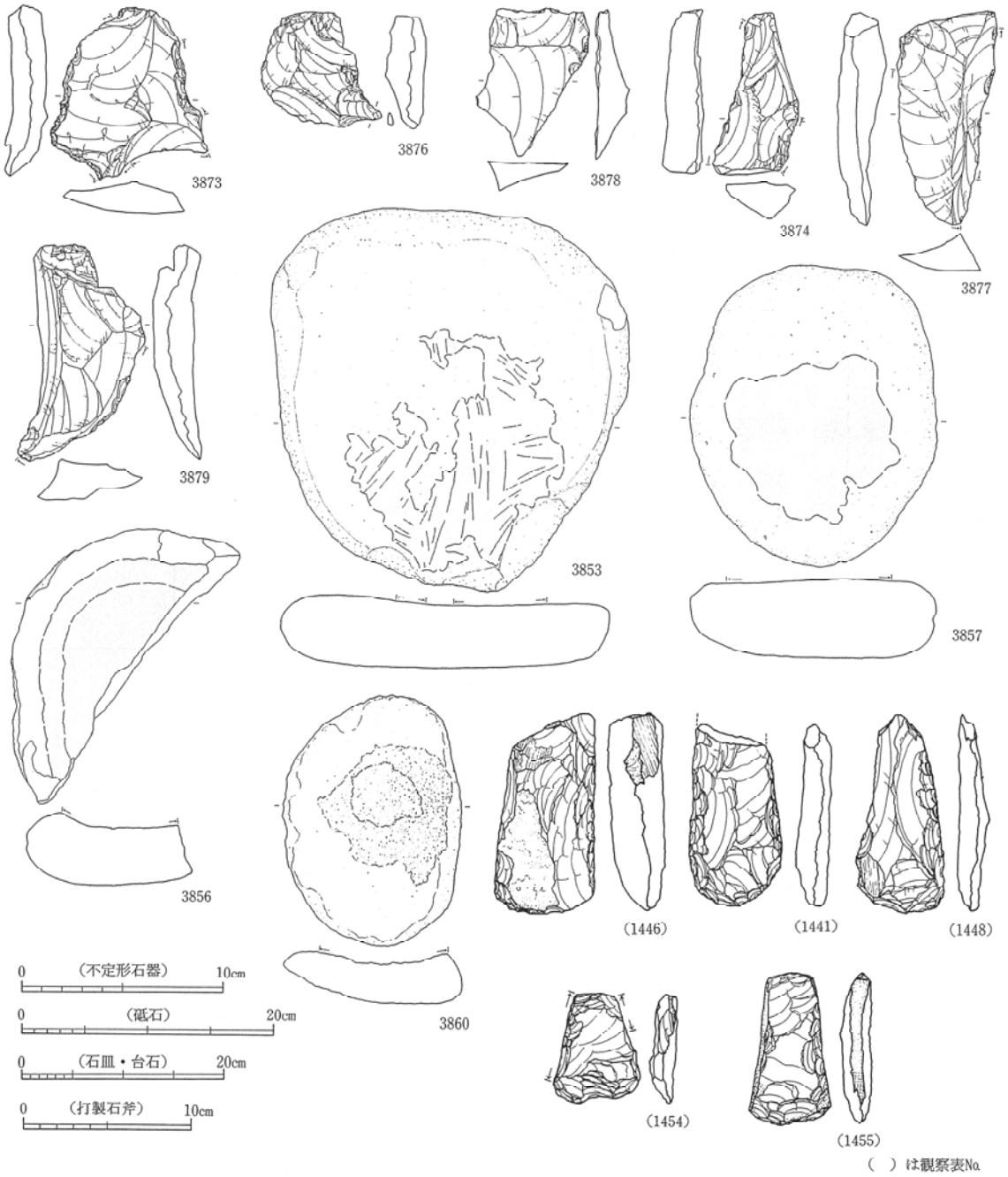
第167図　捨て場C下層（前期）出土石器

（　）は観察表No.

3 石 器



第168図　捨て場C上層（中期初頭）出土石器（1）



第169図　捨て場C上層（中期初頭）出土石器（2）

す。石器総数431点で、内60%以上を剥片が占め、定型的な器種の数は極めて少ない。器種の中には石鏃・石匙・台石の欠落および1・2点の出土で、はたして実態をあらわしているか疑問になる資料すら存在する。また、両面加工石器・磨製石斧・石皿・両極石器の比率が他の後続期集落跡に比べ高くなっているが、前述の欠落器種の影響によるものと解される。このような状況の中で特に注目されるのは不定形石器・磨石類に次ぐ出土量の石錘である。ブロック3では他に良好な資料が無いもののブロック1（布目遺跡）およびブロック4（刈羽貝塚・鍋屋町遺跡）である程度の比率を占め、対象物はともかく漁撈にある程度依存していたことが考えられる。そして、本遺跡で最も大きな集落跡1ではわずか4点と比率が圧倒的に低く、集落2・3も含め、中期前葉まで、少なからず漁撈に依存していたことがわかる。また、磨製石斧の形態上の特徴も前述し

たように後続期の定角式石斧の先行形態として、その特徴をよくあらわしている。そして石皿に関しては作業面が大きくくぼむものが無く、平坦な作業面をもつものが一般的である。

集落跡3（第168・169図）は採取・加工具＞調理具＞狩猟具型で打製石斧を中心とする採取・加工具の増加によりブロック3における中期の用途別組成を完成させている。石器総数2,047点で、内、剥片が70%以上の高率を占める。器種の中には尖頭器が欠落するのみで中期の石器器種のほとんどが出土している。組成の中で新たに三脚石器・板状石器が加わるが、三脚石器A1類は出土せず、前述したA1類のみを三脚石器として分離できる可能性があるとすれば、三脚石器は板状石器に比べ若干、遅く出現する可能性を秘めている。なお、磨製石斧は集落跡4に比べ側面が広く平坦となり中期的な定角式をしており、中期的な形態の完成はそれ以前となろう。

集落跡2の組成は磨石類を多出する調理具＞採取・加工具＞狩猟具型を示し、ブロック3の該期遺跡でみられる打製石斧を中心とする採取・加工具が突出する採取・加工具＞調理具＞狩猟具型とは異なる。この違いは生活様式の違いに大きく関連する可能性がある。集落跡2の遺構を集落跡1と比べた場合、竪穴住居跡がわずか1軒のみの発見で、この1軒も出土土器の分析から中期中葉に属し、主体を占める前葉の遺構と考えられるものは、少数の土坑とピットのみである。炉跡・焼土等も発見されず、大きく様相を異にする。調査精度の不均等、および後世の削平等の状況がみられない本集落跡にあって、これらの遺構の在り方は住居形態・居住期間（季節も含む）・生活様式等の相違による現象とも考えられ、当然そこにみられる石器組成も特異な側面を示すと推測される。現段階ではこれらを構造的に説明できないが、今後重要な課題となるであろう。

石器総数2,080点が出土しており、集落跡3とほぼ同じ数量である。その内、剥片は60%以上と集落跡1・3に比べ比率が低く、集落跡4とほぼ同率である。集落跡3同様、尖頭器が欠落するが、他の器種は一様に出揃っている。石器全体の比率では三脚石器・板状石器・打製石斧が増加傾向にあり、不定形石器は集落跡3に比べ下降傾向にあるが、磨石類・石皿の比率が集落跡1・3に比べ著しく高率なため用途別組成では調理具が多数を占める結果となっている。

集落跡1は中期前葉から中葉の集落1および捨て場A（中期前葉が主体）で構成され、本遺跡で最も大きな集落である。石器総数は32,169点で内、剥片が70%以上と高率である。打製石斧・磨製石斧・板状石器・三脚石器・礫器類・両極石器の採取・加工具を多出し、磨石類・石皿がこれに次ぐ採取・加工具＞調理具＞狩猟具型である。石器組成上、時期・地域性からも他遺跡と違和感のないものとなっている。また、前回調査分の集落1北半分のデーターとの比較では磨石を中心とする調理具の減少、三脚石器・板状石器・礫器類・両極石器の多出による採取・加工具の増加がみられる。そして、個々では打製石斧と磨製石斧の減少および不定形石器の増加もみられる。これら両者の微妙な違いは、前回の調査範囲が主に中期中葉を中心とし、今回調査の時期幅と比較し、前葉資料が少ないことによる違いと考えたい。不定形石器の比率は前回の調査で、前葉から中葉にかけて減少するとの指摘どおり、前葉の集落2、中期初頭の集落3で50%前後の高比率をもつ。また、打製石斧・磨製石斧の減少においても同様で、前葉は中葉に比べ比率が低下する現象（集落2、捨て場A・B・D）を反映しているのであろう。三脚石器・板状石器は今回、かなり多量に出土し、その前身は中期初頭の集落3・捨て場C上層からみられ、中葉に向かって若干の増加傾向である。

第101表　引用した遺跡の石器一覧（時期順　その１）

No.	石器／遺跡名	石鏃	尖頭器	石錘	狩猟具	石錐	三脚	板状	打斧	磨斧	篦状	採取・工具	石匙	磨石	石皿	調理具	ピエス	礫器	砥石	台石	形不定	石核	剥片	石製品	市町村	主な時期
1	上ノ台Ⅱ遺跡	9			9				19	2		21	1	11		12	1		4		28	4	394		六日町	b-
2	上林塚遺跡	3			3				14	1		15		39	4	43		43		42	176	41	960		湯沢町	b-1～b-2
3	岩原Ⅰ遺跡	16	4		20	1		1	118	10	70	200	2	471	3	476	1	54	5	45	594	45	3504	2	湯沢町	b-3
4	萩原Ｂ遺跡		3		3	1			5			6		12	5	17	5	1	3		17			1	湯沢町	b-4
5	上ノ平遺跡Ａ地点（西地区）	1	1		2					4	5	9	1	1		2					8	6	240		三川村	b-4、c-0
6	岩野Ｅ遺跡			17	17				9	28		37	1			1		8	7		10		279	2	糸魚川市	b-4～c-1
7	布目遺跡	5	1	5	11	1			2	4		7	4	27	2	33			10		12		34		巻町	c-1
8	新谷遺跡	5	1	404	410	1			3	64		68	5	581	147	733	3	4	109		26			1	巻町	c-1
9	丸山遺跡	2		1	3					6		6	1	9	1	11			3		4	1		3	大潟町	c-2～c-3
10	刈羽貝塚	6		5	11					13		13				0				1			0	2	刈羽村	c-3
11	古町Ｂ遺跡	47	5		52	14			3	73		90	23	204	41	268	0		208		30			16	吉川町	c-3
12	十二木遺跡（第４地点）	14	2		16	3			123	1		127	5	129		134					0				塩沢町	c-3
13	鍋屋町遺跡	15		8	23					3		3		100	5	105			1		0				柿崎町	c-4
14	柿ノ木町遺跡	10			10	2			3	12		17		43	4	47			7	2					妙高村	c-4～d-0
15	長者ケ平遺跡Ⅲ	250	10		260	19				30		49	8	230	20	258			1		30			3	小木町	c-4～d-0
16	五月沢遺跡	12		20	32	1			15	25		41	3	102	13	118	2		55					8	糸魚川市	d-0
17	南原遺跡	18		5	23	1			223	57		281	5	82	38	125								3	長岡市	d-0～d-3
18	タテ遺跡			1	1				5	8		13		14		14						1	5		出雲崎町	d-1

主な時期の凡例　草創期a-　早期b-　前期c-　中期d-　後期e-　晩期f-　（初頭0　前葉1　中葉2　後葉3　末葉4）

第101表　引用した遺跡の石器一覧〔時期順　その2〕

No.	石器／遺跡名	石鏃	尖頭器	石錐	狩猟具	石錐	三脚	板状	打斧	磨斧	篦状	採取・工具	石匙	磨石	石皿	調理具	ピエス	礫器	砥石	台石	不定形	石核	剥片	石製品	市町村	主な時期
19	下ゾリ遺跡（A地点）	2	2		**4**	3				13	20	**36**	20	66	3	**89**	3				149	1		1	朝日村	d-1
20	吉岡惣社裏遺跡（A地区）	179	2	36	**217**	4			4	8		**16**	3	102	12	**117**			1		0			0	真野町	d-1
21	吉野屋遺跡	64	2	17	**83**	6			7	34		**47**	8	159	2	**169**					1	10			栄町	d-1
22	清水上遺跡（土石流）	4	1		**5**	10	9	14	65	8		**106**	1	44	6	**51**	7	5	2		210	0	0		堀之内町	d-1
23	大沢遺跡	100		13	**113**	2			2	5		**9**	6	51	10	**67**	5		33		12				巻町	d-1
24	南田遺跡	1	1		**2**				10	7		**17**	1	59	3	**63**									中郷村	d-1
25	萩野遺跡	2		2	**4**				1	15		**16**	2	13		**15**				4		2	64		安田町	d-1
26	五丁歩遺跡	20		4	**24**	59	3	1028	834	27		**1951**	16	1053	45	**1114**	63	59	208	16	1772	291	11692	10	塩沢町	d-1～d-2
27	松葉遺跡	4	1		**5**				46	11		**57**		19		**19**					1		500		長岡市	d-1～d-2
28	川原田遺跡			4	**4**				2	15		**17**		20	2	**22**	9	6	2		16	164	338		上越市	d-1～d-2
29	堂の貝塚	61	24		**85**	4			1	5		**10**	1	0		**1**									金井町	d-1～d-2
30	笹山遺跡	72	35	1	**108**	4	6	7	1106	143		**1266**	3	788	97	**888**			8		22	248	7116	14	十日町	d-1～e-1
31	横峯B遺跡	7	1		**8**				4	19	1	**24**		9		**9**					6	0	0		安田町	d-2
32	十二平遺跡	11		15	**26**		2		284	272		**558**	1	639	306	**946**			784	9	103			10	能生町	d-2
33	清水上遺跡	26	10	1	**37**	49	45	67	398	47		**606**	1	491	51	**543**	33	26	10	4	763	0	0	1	堀之内町	d-2
34	前田遺跡	9	3	1	**13**	12		1		30	6	**49**	19	354	119	**492**	23	2	20	2	501	6	422	8	朝日村	d-2
35	徳右エ門山遺跡	2	1	1	**4**				30	4		**34**		13	6	**19**					0	1	0	1	小千谷市	d-2
36	沖ノ原遺跡	25	2		**27**	4			153	55		**212**		177	45	**222**		1	1		3				津南町	d-2～d-3

主な時期の凡例　草創期a-　早期b-　前期c-　中期d-　後期e-　晩期f-　（初頭0　前葉1　中葉2　後葉3　末葉4）

第101表　引用した遺跡の石器一覧（時期順　その3）

No.	石器／遺跡名	石鏃	尖頭器	石錘	狩猟具	石錐	三脚	板状	打斧	磨斧	篦状	採取・工具	石匙	磨石	石皿	調理具	ピエス	礫器	砥石	台石	不定形	石核	剥片	石製品	市町村	主な時期
37	八反田遺跡（中期）	21			**21**	4			131	13	2	**150**	2	33	4	**39**			2	1	168			2	津南町	d-2～d-3
38	万條寺林遺跡	25		16	**41**		2	6	251	16		**275**	7	654	61	**722**			17	0	0				塩沢町	d-2～e-1
39	羽黒遺跡	11	1	2	**14**	3			5	13	1	**22**		57	17	**74**			9		0	3	0	4	見附市	d-2～e-2
40	宮下原遺跡	12		4	**16**	1			92	29		**122**		791	2	**793**			24		179		1139	1	六日町	d-3
41	森上遺跡	23	8		**31**	12	4		308	20	90	**434**		232	22	**254**					560	128	4623	2	中里村	d-3
42	大貝遺跡	4			**4**				27	15		**42**	2	78	24	**104**									新井市	d-3
43	豊原遺跡	16		17	**33**					7		**7**	1	32	22	**55**	4		92		15			1	巻町	d-3
44	水上遺跡（第3ブロック）	21		2	**23**	2		1	30	4		**37**	2	174	15	**191**			2		99		1575		大和町	d-3～d-4、e-0
45	下クボ遺跡	11	1		**12**	4				13		**17**	8	128	34	**170**	9		3		138		153	2	朝日村	d-4
46	水上遺跡	3			**3**					2		**2**		132	3	**135**					0		83	1	大和町	d-4～e-0
47	城之腰遺跡	179	24	688	**891**	101	11	16	373	316		**817**	8	2928	80	**3016**	328	99	23	786	383	147	4052	55	小千谷市	d-4～e-1
48	元屋敷遺跡（下段）	202	15	6	**223**	22		1	10	638	8	**679**	26	208	22	**256**	6		3				2458	12	朝日村	e-3～f-3

主な時期の凡例　草創期a-　早期b-　前期c-　中期d-　後期e-　晩期f-　（初頭0　前葉1　中葉2　後葉3　末葉4）
各石器の数量を0と記したものは、報告書で出土は確認されるが数量の記載がないものである。なお、剥片に関しては、全ての遺跡で出土していると考えられるが、報告書で未記載のものは空欄としている。

引用・参考文献

あ 赤羽正春・富樫秀之　1991 『下クボ遺跡　奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』朝日村文化財報告書第6集　朝日村教育委員会

網谷克彦・岡本勇　1979 「第4章遺物Ⅰ　第1節土器」『鳥浜貝塚』福井県教育委員会

家田順一郎ほか　1988 『十二木遺跡』塩沢町文化財調査報告第8輯　塩沢町教育委員会

い 池田亨ほか　1981 『宮下原遺跡』六日町文化財調査報告書第3輯　六日町教育委員会

池田亨　1988 『万條寺林遺跡』塩沢町文化財調査報告書第7輯　塩沢町教育委員会

池田亨・荒木勇治　1988 『水上遺跡』大和町文化財発掘調査報告第3号　大和町教育委員会

石川日出志ほか　1981 『横峯B遺跡』安田町文化財調査報告 (5)　安田町教育委員会

今村啓爾　1985 「五領ヶ台式土器の編年」『考古学研究室研究紀要』第4号　東京大学文学部

今村啓爾　1995 『第8回縄文セミナー　中期初頭の諸様相　記録集』 縄文セミナーの会

う 宇野隆夫　1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民族博物館研究報告』第40集　国立歴史民族博物館

え 江坂輝彌・渡辺誠　1977 『沖ノ原遺跡』津南町文化財調査報告書No12　津南町教育委員会

お 岡村道雄　1979「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例」『東北歴史資料館紀要』6　東北歴史資料館

岡本郁栄・金子拓男ほか　1987「高塩C遺跡」『柏崎市史資料集』考古篇1　柏崎市史編さん委員会

岡本勇・加藤晋平ほか　1967「大貝遺跡の調査」『新潟県新井市における考古学的調査』立教大学・社会教育講座博物館

小熊博史ほか　1994 『松葉遺跡』 長岡市教育委員会

小熊博史　1994「布目遺跡」『巻町史』資料編1・考古　巻町

小野昭・山川史子　1988 『丸山遺跡発掘調査報告書』大潟町教育委員会

小野昭　1994 「豊原遺跡」『巻町史』資料編1・考古　巻町

小野昭・前山精明ほか　1988 「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ　巻町

か 柏崎市教育委員会　1994 『横山東遺跡群現地説明会資料』

加藤邦男　1982 「縄文尖底土器」『縄文文化の研究』3　雄山閣

加藤三千男　1995「北陸における中期前葉の土器群について」『第8回縄文セミナー　中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

加藤三千男・小林達雄　1988「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観』第3巻　小学館

金子拓男　1967「新潟県柏崎市剣野E地点遺跡出土遺物について」『信濃』第19巻2号　信濃史学会

金子拓男　1987「大湊遺跡」『柏崎市史資料集』考古篇1　柏崎市史編さん委員会

川村三千男・田海義正　1993 『前田遺跡』朝日村文化財報告書第8集　朝日村教育委員会

川村三千男ほか　1995 『元屋敷遺跡Ⅰ』朝日村文化財報告書第10集　朝日村教育委員会

木島勉　1992 「五月沢遺跡」『平成3年度　遺跡発掘調査概報　五月沢遺跡　岩野B遺跡』糸魚川市教育委員会

け 計良勝範　1977 『堂の貝塚』金井町文化財調査報告書第Ⅱ集　金井町教育委員会

こ 小島俊彰・小林達雄　1988 「上山田・天神山式土器様式」『縄文土器大観』第3巻　小学館

小林達雄ほか　1983 『長者ヶ平遺跡Ⅱ』新潟県小木町教育委員会

小林達雄　1987 「火炎土器様式」『縄文土器大観』第3巻　小学館

小林達雄　1993 「縄文集団における二者の対立と合一性」『論苑考古学』 天山舎

小林義廣・秦繁治　1992「土器」『古町B遺跡発掘調査報告』吉川町教育委員会

駒形敏朗ほか　1994 『南原遺跡』長岡市教育委員会

駒形敏朗・寺崎裕助　1981 『岩野原遺跡』長岡市教育委員会

さ 齊藤基生・金子拓男ほか　1974 『森上遺跡概報』中里村教育委員会

齊藤基生・金子拓男ほか　1982 『羽黒遺跡』見附市教育委員会

坂井秀弥ほか　1989 『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集　新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所

佐藤雅一　1987 『萩原B遺跡』湯沢町埋蔵文化財報告第8輯　湯沢町教育委員会

佐藤雅一　1989 『上ノ台Ⅱ遺跡』六日町埋蔵文化財報告第6輯　六日町教育委員会

佐藤雅一　1994 「f.第6群土器：羽状縄文系土器群」『干溝遺跡』中里村文化財調査報告書第6輯　中里村教育委員会
佐藤雅一・金子拓男　1991 「第4章遺構と遺物　A縄文時代」『山崎A遺跡』見附市埋蔵文化財調査報告第8　見附市教育委員会
す　鈴木次郎　1977 「直刃式片刃打製石斧について」『神奈川考古』第2号　神奈川考古同人会
鈴木俊成　1992 「縄文時代の石鏃について」『新潟考古』第3号　新潟県考古学会
鈴木道之助　1991 『図録　石器入門事典』柏書房
た　高橋保　1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』第4号　新潟考古学談話会
高橋保　1992 「4遺物　A土器・土製品　6まとめ　B土器について」『五丁歩遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集　新潟県教育委員会
高橋保雄　1992 「6まとめ　5）石器組成―魚沼地方の中期前葉から後期前葉を中心に―」『五丁歩遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集　新潟県教育委員会
田中耕作　1995 「新発田市上車野E遺跡のフラスコ状土坑について」『第100回新潟考古学談話会発表レジメ』新潟考古学談話会
谷藤保彦　1988 「北関東における「有尾式土器」の変遷」『考古学叢考』下巻　吉川弘文館
丹羽茂・小林達雄　1989 「中期大木式土器様式」『縄文土器大観』第3巻　小学館
ち　親跡喬　1988 『図録　南田遺跡』中郷村教育委員会
親跡喬　1992 『図録　柿ノ木町遺跡』妙高村教育委員会
つ　土屋積・大沢和夫・樋口昇一　1982 「第3章遺構と遺物　第2節阿久Ⅱ期　2方形柱列」長野県埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書原村その5　日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会
て　寺内隆夫　1995 「浅間山山麓の縄文中期中葉の土器」『平成7年度長野県考古学会秋季大会発表資料』長野県考古学会
寺内隆夫　1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』（財）長野県埋蔵文化財センター
寺崎裕助　1991 「火炎土器様式について」『新潟考古学談話会会報』第8号　新潟考古学談話会
寺崎裕助　1991 「縄文時代前期後半の格子目文土器について」『新潟考古学談話会会報』第8号　新潟考古学談話会
寺崎裕助　1995 「新潟における中期初頭の土器」『第8回縄文セミナー　中期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
寺崎裕助・金子拓男　1990 「第5節　前期の土器　大湊式土器」『柏崎市史』上巻　柏崎市史編さん室
寺村光晴・阿部朝衛ほか　1987 『史跡寺地遺跡』 青海町
と　十日町市博物館友の会　1992 『火焔型土器のクニ―笹山遺跡出土品一括―』 十日町市博物館
富樫秀之ほか　1990 『下ゾリ遺跡』 朝日村文化財報告書第5集　朝日村教育委員会
な　長岡市　1992 「藤橋遺跡」『長岡市史』資料編1・考古
中川成夫　1963 『佐渡三宮貝塚の研究』佐渡博物館研究報告第4集　財団法人佐渡博物館
中島栄一ほか　1974 『吉野屋遺跡』調査報告第5冊　新潟県立三条商業高等学校　社会科クラブ考古班
中村孝三郎　1964 『室谷洞窟』長岡科学博物館考古研究室調査報告書第6冊　長岡市立科学博物館
中村孝三郎・竹田祐司・小林達雄　1973 『千石原』長岡科学博物館考古研究室調査報告書第11冊　長岡市立科学博物館
名久井文明　1971 「青森県芦野遺跡の土器群について」『考古学雑誌』第57巻第2号　日本考古学会
に　新潟県教育委員会　1958 『刈羽貝塚』新潟県文化財調査報告書第5（考古編）
新潟県教育委員会　1985 『タテ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第39集
新潟県教育委員会　1986 「岩野E遺跡」『中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45
新潟県教育委員会　1987 『川原田遺跡　宮ノ平遺跡ほか9遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第47集
新潟県教育委員会　1990a 「上林塚遺跡」『岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集
新潟県教育委員会　1990b 『清水上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集
新潟県教育委員会　1991 『城之腰遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集
新潟県教育委員会　1992 『五丁歩遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集
新潟県教育委員会　1994a 『上ノ平遺跡A地点』新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県教育委員会　1994b 「萩野遺跡」『萩野遺跡・官林遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
は 秦繁治ほか　1987 「徳右ェ門山遺跡」『徳右ェ門山遺跡・中道遺跡・中道東遺跡』小千谷市文化財報告第3集　小千谷市教育委員会
秦繁治・小林義廣　1992 『古町B遺跡発掘調査報告書』 吉川町教育委員会
秦繁治・寺崎裕助ほか　1990 『十二平遺跡発掘調査報告書』 能生町教育委員会
ふ 藤田亮策ほか　1964 『長者ヶ原』糸魚川市教育委員会
ほ 芳賀英一　1994 『塩喰岩陰遺跡』東北横断自動車道遺跡調査報告25　福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団
細田勝　1991 「縄文時代前期中葉の一様相」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
堀之内町　1995 「第1節　堀之内町を取りまく自然」『堀之内町史』資料編
本間信昭　1991 「大平遺跡」『寺泊町史』資料編1原始・古代・中世　寺泊町
本間信昭　1995 「縄文時代」『新潟市史』通史編1原始古代・中世・近世 (上)　新潟市
本間嘉晴　1975 『浜田遺跡』真野町教育委員会
本間嘉晴　1981 『垣ノ内遺跡』真野町教育委員会
本間嘉晴　1987 『吉岡惣社裏遺跡』真野町教育委員会
ま 前山精明　1990 『大沢遺跡』巻町教育委員会
前山精明　1994 「新谷遺跡」『巻町史』資料編1　巻町
前山精明ほか　1990 「巻町大沢遺跡における縄文時代中期前葉集落の植物利用－1989年の発掘調査から－」『巻町史研究』Ⅵ　巻町
み 三上徹也　1987 「梨久保式土器　再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1　財団法人長野県埋蔵文化財センター
三上徹也・上田典男　「長野県の様相」『第8回縄文セミナー　中期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
む 武藤康弘　1978 「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究」『考古学雑誌』第74巻第2号　日本考古学会
室岡博　1992 『鍋屋町遺跡』柿崎町教育委員会
や 薮下浩・江坂輝彌・渡辺誠　1977 「第4章遺物　第1節土器」『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町発掘調査報告書No.12　津南町教育委員会
山口逸弘ほか　1989 『房谷戸遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第95集　群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
山内清男　1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
山本正敏ほか　1991 「境A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告朝日町編』富山県教育委員会
山本正敏　1991 「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」『新潟県考古学会第3回大会発表要旨』新潟県考古学会
山本正敏・岸本雅敏　1986 「南太閤山Ⅰ遺跡」『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』(4)　富山県教育委員会
よ 四柳嘉彰・高堀勝喜　1986 「2　第2群土器　朝日C式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
わ 渡辺誠　1982 「採集対象植物の地域性」『季刊考古学第1号』雄山閣
渡辺誠・齋藤基生ほか　1984 『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町文化財調査報告書14　津南町教育委員会

要　　約

1　清水上遺跡は、新潟県のほぼ中央部に位置する北魚沼郡堀之内町大字根小屋字清水上に所在する。遺跡は、更新世末期に形成された段丘上に立地しており、標高100m～130m前後を計る。

2　現地調査は、関越自動車道の堀之内パーキングエリアに隣接してインターチェンジが建設されることにともない、平成2～5年にわたって実施し、調査面積は38,800㎡である。

3　調査の結果、多数の遺構を検出し、それらに伴う大量の遺物も出土したが、その多くは縄文時代の所産である。

4　縄文時代は、中期前・中葉の集落跡（集落跡1）、中期前葉の集落跡（集落跡2）、中期初頭の集落跡（集落跡3）、前期前半の集落跡（集落跡4）が検出された。集落跡1～3は、土器型式からみた場合途切れなく連続していることから、同一集団がごく狭い範囲で地点を変えながら縄文時代中期初頭～中葉の間に集落を営んだ可能性がうかがわれる。

5　縄文時代中期前・中葉の集落跡（集落跡1）は、昭和56・57年度の調査で北半分が発掘され、環状集落跡の存在が確実視されていた。今回の調査はその南半分にあたり、住居跡65軒・フラスコ状土坑27基・土坑160基・埋設土器7基・立石16基・石列・遺物廃棄場（捨て場A）のほか多数のピット群が検出され、前回の調査をあわせると直径100m前後の環状集落跡の全体が発掘された。

出土した土器は、縄文時代中期前・中葉の土器で、系統別に北陸系・越後系・東北系・中部高地系・関東系に大分類し、さらに文様で細分類した。編年的には前葉3期・中葉3期の計6期に細分した。各系統別の占有比率は、北陸系51%・東北系23%・越後系12%・中部高地系12%・関東系2%であった。

出土した石器器種は、石鏃・尖頭器・石錐・石匙・両面加工石器・三脚石器・板状石器・打製石斧・磨製石斧・礫器類・磨石類・石皿・砥石・両極石器・台石・石錘・不定形石器で、その総数は10,637点である。打製石斧・磨製石斧・板状石器・三脚石器・礫器類・両極石器が多出し、採取・加工具＞調理具＞狩猟具型を呈しており、用途別石器組成上からみて周辺の他遺跡と違和感のないものとなっている。

6　縄文時代中期前葉の集落跡（集落跡2）は、集落跡1の西側に隣接し、集落跡1と併存していた。遺構は、竪穴住居跡1軒・フラスコ状土坑4基・土坑10基・集石1基・柱穴と考えられる多数のピット群・遺物廃棄場2か所（捨て場B・D）が検出された。集落跡1と比べてみると、小規模で環状集落を形成しておらず、住居跡の存在も不明確で、1軒のみ確認された竪穴住居跡も時期が中期中葉③期と時期的にみて隔たりがあるなどの相違が認められた。

出土した土器は、縄文時代中期前・中葉と前期前半で、主体を占めるのは中期前葉の土器である。中期前葉の土器の中心的な時期は、中期前葉①・②期で良好な資料が捨て場Bなどから出土している。各系統の占有比率は、北陸系81%・中部高地系12%・関東系3%・越後系2%・東北系2%で、北陸系の占める割合が突出している。

出土した石器は、集落跡1とほぼ同様であるが、集落跡1と比べて比率において打製石斧が減少し、磨石類が増加する。調理具＞採集・加工具＞狩猟具型を示している。また、中期初頭の集落跡3に比べて三脚石器・板状石器・打製石斧が増加傾向にある。

7　縄文時代中期初頭の集落跡（集落跡3）は、集落跡1と同じ段丘面上に所在し、住居跡らしき遺構7軒・土坑15基・ピット16基・遺物廃棄場（捨て場C上層）が検出され、縄文時代中期初頭の遺物も多数出土した。新潟県においてこのような中期初頭の集落跡が全面的に発掘調査された例はほとんどない。

中期初頭の土器は、①～③期に細分されるが、本集落跡の主体は③期であり、集落跡２と同じく北陸系の土器の占める割合が突出している。しかし、①期においては関東・中部高地系の土器が過半数近くを占め、北陸系と拮抗している。

出土した石器は、打製石斧を中心とした採集・加工具の増加により採集・加工具＞調理具＞狩猟具型といった本地域における中期の用途別組成を完成させている。

8　前期前半の集落跡（集落跡４）は、集落跡３と所在地点が一部重なるが、竪穴住居跡１軒・掘立柱建物跡３軒・土坑15基・遺物廃棄場１か所（捨て場Ｃ下層）などが検出された。新潟県において前期前半の集落跡がほぼ全面にわたって発掘調査された初例である。出土した土器は、関東地方の関山Ⅱ式に並行するものと関東・中部高地の有尾式に並行するものに二分される。関山Ⅱ式に並行するものは東北色が強く関東色が薄い、反対に有尾式に並行するものは関東色が強く東北色が薄いというきわだった対称を示している。なお、有尾式に並行するものには本遺跡独特の土器が一定量含まれており、その土器は「根小屋式土器」として型式設定がなされた。

出土した石器は、調理具＞採集･加工具＞狩猟具型で周辺の該期遺跡と同様の用途別組成を示すが、不定形石器・磨石類に次いで石錘が多く出土していることは注目される。

9　Ａ・Ｅ地区からは、埋設土器や集石（Ａ地区）、中期末の住居跡や集石土坑（Ｅ地区）などが検出され、縄文時代早期～晩期の遺物が出土している。

10　自然科学分析は、集落跡１（L2-21，I2-22）・２（H04-25）の古環境と水利用を明らかにするため珪藻と花粉分析、集落跡１で検出された縄文時代中期の土坑（SK601B）・自然の窪地（SX607B，SX608B）および埋設土器（1232A，1251Aなど）の性格を探るためのリン・カルシウム分析、Ｅ地区の土坑（SK238C，SK239C）底面より検出された赤色物質の検討を行うためのＸ線回折をそれぞれ行った。

その結果、珪藻分析では、集落跡１のL2-21においてはかつて水域が存在していたことを示唆する結果を得た。花粉分析結果からは、当時の森林植生はブナ属やコナラ亜属などを主とする冷温帯林で、川岸や渓谷にはハンノキ属・カエデ属・トチノキ属が成育していたものと推定された。リン・カルシウム分析の結果からは、埋設土器1232Aと埋設土器1251Aの二者においては土器内に遺体が存在していたことを想定できる結果を得た。Ｘ線回折においては、SK239Cの赤色顔料の材料はベンガラと判断された。

遺 構 索 引

集落跡１（その１）

遺 構 名	位 置	本 文	観察表	図版（図面-写真）	出 土 土 器	
					観察表	土器図版 （図面-写真）
SI40B	I14,J14	91•92		37-353	24	80•81-394•395
SI51A	M10	83		26-341	21•83	74•166-391•433
SI98	N5	80		22-337	21	73-391
SI151	O6	78•79		19-335	21•32	73•101-391
SI154A	N9,O9	81		22-337	21	74-391
SI349A	M12•13,N13	84		27-342	21•22•84	74•75•170-391•392•434
SI445A	N8,O8	80		23-338	21	73-391
SI457A	O7•8,P7•8	77		18-333•334	34	108-
SI471A	O8,P8	79		20-335	21	73-
SI473	N7•8	81•82		24-339	21•83	74•166-391•433
SI480A	O8	79		21-336		
SI520A	N9	82		25-340	21	74-391
SI618A	M8,N8	82•83		26-340•341		
SI750	O7,P7	77		18-333		
SI751	O5	78		19-334	21	73-391
SI755	N5•6,O5•6	78		20-334•335	21•83	73•166-391•433
SI757	N5	79•80		21-336•337	21	73-391
SI759	N5•6	81		24-338	32	103-405
SI1263A	L5•6	85		28-343	22	75•76-392
SI1309A	L3•4	84		28-342•343	22	75-392
SI1602A	L12•13	86		30-345	22	76•77-392•393
SI1611A	K11	88		33-348	23	77-393
SI1771A	K12•13,L12•13	86•87		31-346•347	22•83	77•166-393•433
SI1847A	K12	88		34-349	23	77-393
SI1892A	J12•13,K12•13	89•90		35-349	23	78•79-393•394
SI1893A	J13•14	90•91		36-351	23	79-394
SI1895A	J13	91		36-352	23	79-
SI1896A	J14	91		37-352	24	79•80-396
SI2691A	K7•8	87		32-347	23	77-393
SI3154A	J4•5	89		34-349•350	23	78-394
SI3155A	J3•4	88•89		33-348		
SI3160A	N8•9	82		25-339		
SI3164A	J4•5,K5	89		35-350	23	78-393
SI3166A	L6	85		29-344•345		
SI3168A	K7•8,L7	86		30-346	22	77-393
SI3169A	K6•7,L6•7	84•85		29-344		
SI3170A	J13	90		36-350•351	23	79-394
SB44	M3•4	94		41-356		
SB54	N4	92		38-354		
SB130A	M9,N9	96		45-359•360	25•84	83•170-396•434
SB752	M4•5	94		41-357	24	82-
SB753	M5•6	94		42-357	24	82-396
SB754	M6•7,N7	94•95		42-355	24	83-395
SB756	M7,N7	93		39-355	24•82•83	82•162•166-396•431•433
SB760	M7	93		40-357		
SB767	M7,N7	92•93		39-354		
SB768	N7,O7	92		38-353•354	24•82•83	82•163•166-395•431•433
SB1262A	L5•6,K6	97		47-361	25	83•84-397
SB1299A	K5•6,L5•6	98•99		50-363	26•83•84	85～87•166•170-397•433•434
SB1848A	K12•13	99•100		53-364	27	88-399

集落跡１（その２）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SB3153A	K4•5	98		49-361•362	25•26•82•83	85•163•167-398
SB3156A	L8,M8	95		43•44-358	24	83-395
SB3157A	M10,N10	96•97		46-360	25	84-397
SB3158A	L9•10,M9•10	95•96		44-359	24•25	83-396
SB3159A	M9,N9	93		40-356	24	82-
SB3161A	K11	99		52-364	26•27	87-398
SB3165A	J5,K4•5	97•98		48-362•363	25	84-397
SB3167A	K12•13,L12•13	99		51-363•364	27	87-398
住居跡384A	M12-21	100		54-365		
住居跡721B	J12-19	101		54-390		
住居跡1198A	K4-1	100		54-365	32	103-
住居跡1290A	L8-6	100		54-365		
住居跡1381A	K5-5	101		-365		
住居跡1940A	J13-1	101		54-365		
住居跡1989A	K12-20	101		54-365	32	103-
SK1	O2-11		3	60-		
SK3B	Q5-9•14		3	61-373		
SK6B	Q5-17•18		5	67-380		
SK14B	R8-23		1	55-366		
SK52A	M10-23		3	60-371	32	101-404
SK61Aa	M10-15•20		2	58-370	29	92•93-401
SK61Ab	M10-15•20他		5	58-370	29	92-401
SK62A	N10-24•25		3	59-371		
SK65A	M10-11•12他		3	60-372		
SK67B	I4-8		3	59-370		
SK75A	N10-24		3	59-371	29	94-401
SK93A	O10-18•19他		6	68-	31	100-403
SK93B	J5-16•17		1	55-366		
SK102	N5-23		5	65-		
SK107A	M9-23		4	62-	30	95-
SK135	M5-21		3	61-374	29	94-
SK157	O6-24		4	63-		
SK180	M6-2		3	59-		
SK206A	M8-3		3		82	163-431
SK212A	M8-7		3	59-	29	94-401
SK243A	M8-24		3	59-371	29	94-400
SK254A	M8-14		1	56-367		
SK261A	M8-25		5	64-		
SK271A	M8-16		3	61-		
SK273A	O8-17		5	65-378		
SK286A	M8-12		1	55-367	27	89-399
SK319A	O12-14		5	65-379		
SK320A	O12-14		5	65-379		
SK321A	O12-8		3	60-372		
SK322A	O12-4•9		1	57-369		
SK324A	O12-3•4		1	56-390		
SK325A	P12-23		1	56-367		
SK326A	P11-11,P12-15他		4	63-375		
SK327	M6-11		5			
SK329A	M12-17		4	63-376	30	96-402
SK333A	M12-19		3	60-373		
SK335A	M12-24		5	66-379		

集落跡１（その３）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SK336A	M12-22		4	63-377	30	97-
SK341A	O13-1,O14-5		5	64-377		
SK356A	Q14-7・8		1	56-368		
SK364	M6-3・4		5			
SK422A	M8-22		6			
SK434A	M8-23		1	57-369	28	92-400
SK454	N7-8		3	59-		
SK455A	M8-1		1	55-367	27	89-398
SK456	N7-4		3	59-370	29	94-
SK460	N7-9		3	59-370	29	94-401
SK467A	M8-4,N8-24		5	65-378		
SK494	N7-21		4	63-376	30	97-402
SK502A	O9-13		4	63-	83	166-
SK514A	N9-15		4	61-374	30	95-401
SK515A	N9-19・24		4	62-374	30	95-
SK571	M7-1,M8-5		6	67-		
SK576	M7-16		5	64-377		
SK584	M7-22		5	64-	30	97-402
SK601	M7-19		6	67-381		
SK659	M6-7		3	59-370		
SK706B	J7-18		6	67-381		
SK707B	J7-17・18		5			
SK838A	N17-9・14		4	62-375		
SK933A	N11-25		3	59-371		
SK1071A	L4-2		3	61-373		
SK1103A	I3-2・7		1	55-366	27	88-398
SK1112A	I3-22		1	57-369	28・82	91・161-400・430
SK1220A	K4-12・13		3	60-373	29	94-401
SK1229A	J4-21		6		32	101-404
SK1292A	L6-19・20		6	47・69-		
SK1294A	L6-19		6	47・69-		
SK1306A	J5-9		6	68-382	31	101-404
SK1321A	J5-12		3	61-	29・82	95・162-431
SK1370A	L6-8・9他		3	61-374	30	95-401
SK1408A	K6-6・7他		5	67-381	31・82	99・162-431
SK1409A	K6-20・25		6	67-381	31	99-403
SK1436A	L7-19・24		2	58-370	29	94-401
SK1454A	L7-2		3	59-		
SK1483A	L6-11,L7-15他		6	69-382	31	101-404
SK1484A	L6-11・16		5	69-382		
SK1494A	K8-2		4			
SK1529A	K11-24・25		4	63-376		
SK1531A	K11-20		4	62-375	30	96-401
SK1540A	K9-12・13		3	59-371		
SK1554A	J11-2,K11-22		4			
SK1558A	K11-21,K12-25		1	56-367	27・28・82	90・162-399・400・431
SK1568A	K9-5・10		5			
SK1581A	K10-9・10		4	63-376		
SK1599A	K11-3・4他		6	69-383		
SK1601A	L12-21・22		3	60-372		
SK1614A	K11-2・3他		6	69-382	31・32	101-404
SK1630A	J11-3,K11-22他		4	63-376		

集落跡１（その４）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SK1650A	L11-18		4			
SK1670A	L10-1•2		4	62-374	30	95-401
SK1681A	L11-14•15		4	62-374	30	95-401
SK1682A	L10-19		3		32	101-404
SK1746A	L13-23		3			
SK1747A	M14-9•10		3	61-373		
SK1770A	K11-17		4	62-375		
SK1801A	L9-7		4	62-374		
SK1802A	L9-2•3		6			
SK1821A	L11-7		3			
SK1828A	L9-7•12		1	-368		
SK1833A	L9-3,M9-24他		6	68-	31	101-
SK1838A	L13-3•4他		5	66-380	30•31•83	98•99•166-402•403•433
SK1839A	L13-14		4			
SK1858A	K12-13		5	64-377	30	97-
SK1861A	K12-7		2	34•69-349	32•82	101•162-404•431
SK1880A	J12-11•12他		3	60-372	29	94-401
SK1885A	J12-15		5	-377		
SK1888A	J12-12•17		6			
SK1897A	J12-2•3		4	62-375	30	96-401•402
SK1910A	J12-11•16		3	60-372	29	94-401
SK1913A	J12-3•8		5	66-379•380		
SK1917A	K12-23		3			
SK1925A	J12-1•2他		1	56-368	28	90-400
SK1938A	J13-2•3他		5	65-378		
SK1945A	J12-14		5	64-377	30	97-402
SK1946A	J12-13•18		1	56-368	27	89-399
SK1957A	J12-8•9		5			
SK1958A	J12-1•2他		6	56-383	28	90-400
SK1968A	J14-14•19		5	66-380	31	99-403
SK1973A	J12-4,K12-24他		2	58-370	29	93-401
SK1980A	K12-2•3		5	65-378	30	97-
SK1981A	K13-3,L13-23		4			
SK1983A	J13-9•14		5	66-379	30	98-
SK1985A	J12-3		5			
SK2056A	I16-16•17他		1	57-368		
SK2074A	H16-13•18		5	66-380	31•42	99•125-403•413
SK2538A	L6-3•4		1	57-369	28•84	91•171-400•434
SK2539A	L7-24•25		5	64-378	30	98-402
SK2548A	J6-5		1	55-366•367	27	88-399
SK2574A	K6-10		1	55-366		
SK2605A	J6-1		6	68•71-		
SK2619A	J5-6•11		6	68-382	31•82	100•161-403•404•430
SK2628A	K5-1,L5-21		1	57-369	28	91-400
SK2654A	K6-5,L6-25		1	57-369	26	86•87-397
SK2655A	L6-24		2	58-369	28•29	92-400
SK2675A	K5-2,L5-22		4	63-376	30•32	96•102-402•405
SK2745A	K4-1,K5-5		3	61-373	32	102-404
SK3037A	K12-19		4			
SK3038A	K12-23		6			
SK3058A	K13-5,L13-25		6	68-381	31	100-403
SK3064A	K11-3,L11-23他		4			

集落跡１（その５）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SK3121A	K12-14		4			
SK3126A	K12-9		4			
埋設土器	N6-25	103・104		-384	34	108-407
埋設土器939A	M10-9・10	103		70-384	35	110-408
埋設土器1232A	L4-6	102		70-385	35	110-408
埋設土器1251A	L5-7	102		70-385	35	110-408
埋設土器1253A	K5-17	102・103		70-385	35	110-408
埋設土器1254A	K5-21	103		70-386	35	110-408
埋設土器1407A	J6-13	103		70-385	35	111-408
一括土器1252A	K5-24	98		70-363	35	110・111-408
一括土器1276A	J6-19	104		70-385	35	111-409
立石1281A	L8-18	105		71-386		
立石1495A	K7-10	105		71-386		
立石1538A	K9-18	106		-386		
立石1587A	K10-3・8	106		71-387		
立石1595A	K11-10	107		-387		
立石1964A	K9-25	105・106		71-387		
立石2602A	J6-1	106		71-387		
立石2624A	L8-16	104・105		71-386		
立石2651A	L8-23	105		71-386		
立石2661A	L6-22	104		71-386		
立石2670A	K8-9	105		71-386		
立石3011A	K12-11・16	106		71-387		
立石3143A	J11-11	106		71-387		
立石3152A	L9-4,M9-24他	104		71-386		
石列3136A	J11・12	107		71-387		
捨て場A	H～L2・3	107		72-387・388	35～42・48・53・55・82～84	111～125・143・155・160・161・163・164・166・167・171-408・421・429～431・433・434
捨て場A（SX601B）	J2		19	-388		
捨て場A（SX607B）	H2		19		35	111-
捨て場A（SX608B）	H2		19		35	111-
P17A	O8-8		9			
P66A	M10-11		11			
P71	O5-16		9			
P84A	N10-20		10			
P89	N5-12		9			
P91B	J5-17		15			
P92A	O10-23		9			
P97B	J6-18		15			
P99B	J6-19		15			
P101A	M9-6		10		32	102-405
P104A	M9-13・18		11			
P111A	M9-22		11			
P112A	M9-22		11			
P118A	M9-18		11		33	104-405
P122A	N9-23		10			
P126	M5-15		10			
P129A	M9-18		11			
P132A	M9-7		11			
P133A	M9-23		11		33	104-406

集落跡１（その６）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
P139A	N9-2		9			
P152	O6-18		9		32	103-405
P155	O6-20		9			
P159	O6-20		9	-383	32	103-405
P161	O6-19		9			
P176	N6-20		9			
P178	M6-8		10		82	162-431
P179	M6-8		10			
P192	P6-13		9			
P204A	M8-10		10			
P205A	M8-10		10		32・33	104-405
P217A	M8-8		10			
P226A	M8-24		10			
P229A	N8-15		9			
P237A	M8-18		10			
P239A	N8-5		9		84	171-434
P249A	N8-16		9			
P250A	M8-7		10			
P253	O6-18		9			
P265	N6-8		9			
P270A	M8-16		10		32	103-405
P290A	M8-18		10			
P298	N6-16		9			
P298A	N8-18		9			
P301A	M11-23・24		11			
P307	M6-1		10			
P334	M7-20		10			
P343	M6-16		10			
P397	N7-1		9			
P408A	N8-17・18		9			
P433A	M8-8		10			
P443A	M8-19		10		32	102-
P444A	M8-11		10			
P448A	N8-6		9			
P457	N7-4		9			
P469	N7-7		9			
P480	N7-12		9			
P484A	N8-24		9			
P486	N7-12・13		9			
P489	N7-16		9			
P494A	M8-18		10			
P496A	N8-19		9			
P507	N7-23		9			
P516A	N9-24		10	-383	32	102-404
P517	N7-17		9		32	103-405
P519A	M9-9・10		11			
P526A	M9-9・10		11			
P531A	O9-24		9			
P544A	M9-5		10	-383	33	104-405
P553A	N9-24		10		32	103-
P559	M7-1		10			
P563A	M8-22		10			

集落跡１（その７）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
P579A	N8-23		9			
P584A	M8-12・13		10			
P613	M7-8		10			
P614	M7-8		10			
P622	M7-3・8		10	-383	32	103-405
P636A	M9-21		11			
P641	N6-23		9		84	170-434
P644	N6-11		9		42	125-413
P648	M6-16		10			
P649A	M9-19		11			
P650A	N9-10		9			
P655A	N9-10		9			
P657A	M9-13		11			
P668	M6-19・20		10			
P670	M6-14		10			
P683	M6-10		10			
P684A	M9-5		10		32	102-404
P686A	P9-20		9			
P687	M7-8		10			
P687A	O9-19		9		32・83	102・166-404・433
P698	O7-17		9			
P703B	J6-17		15	-384	34	108-407
P716B	J12-19		16			
P719	M7-12		10			
P722B	J12-18		16			
P726B	J12-17		15			
P727B	J12-17		16	-384	34	106-406
P728B	J12-17		16		83	167-
P753B	H15-6		16			
P770B	J12-20		16			
P901A	N9-24		10			
P915A	N10-15		10		82	161-430
P917A	M10-11		11			
P1005A	M10-15・20		11			
P1099A	K3-6		12			
P1150A	J4-8		14			
P1160A	J4-11		14			
P1166A	J4-2		14	-384	34	107-407
P1178A	J4-1		14			
P1191A	J5-7・8他		14			
P1194A	J5-12		14		34	106-406
P1195A	J5-19		15			
P1197A	J4-15		14			
P1200A	J5-13		15			
P1236A	L5-8		11			
P1266A	L6-1		11			
P1268A	L6-6		11	-383	32	102-405
P1272A	L6-17		11		33	104-406
P1273A	J5-1		14		33	106-406
P1284A	K5-9		13			
P1286A	L8-3・4		12		33	104-406
P1289A	J5-14		15			

集落跡１（その８）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
P1293A	L6-19		11			
P1300A	L8-1		12			
P1301A	J5-9		14			
P1305A	J5-11		14		33•34	106-406
P1326A	K5-23		13		33	105-406
P1336A	L5-24		11		33	104-405
P1341A	J5-10		14			
P1345A	J6-5		15			
P1346A	J6-4		15			
P1347A	J6-9		15		34	106-406
P1348A	J6-9		15			
P1349A	K4-6		12			
P1353A	K5-7		13		33	105-406
P1354A	K5-7		13			
P1368A	L6-11		11		34	107-407
P1369A	L6-12•13		11			
P1371A	L6-2		11			
P1375A	K5-7		13			
P1383A	J5-19		15		82	163-
P1385A	J5-4		14		84	170-434
P1388A	J5-3		14			
P1393A	J5-3		14			
P1395A	J6-14		15			
P1397A	J5-7		14			
P1402A	K5-5		13		34	107-407
P1404A	K5-13		13			
P1410A	K6-15		13			
P1412A	K6-19		13			
P1413A	K6-19		13			
P1435A	L6-6•7		11			
P1441A	L6-6		11			
P1447A	L7-8		11			
P1455A	L7-15		11			
P1456A	L7-19•20		11			
P1459A	L7-1		11			
P1460A	L7-1		11			
P1462A	L7-6		11			
P1472A	K7-12		13		34	107-407
P1473A	J7-3		15			
P1482A	L8-9		12			
P1486A	L8-3		12			
P1488A	L7-15		11		83	166•167-433
P1492A	L8-1		12			
P1497A	L8-17		12			
P1498A	K7-24		13			
P1499A	L7-6		11			
P1509A	J10-11,J11-15		15			
P1510A	J11-9		15			
P1547A	K10-16		14			
P1559A	K12-20		14			
P1561A	K11-16		14		33	106-406
P1566A	J11-13		15			

集落跡１（その９）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
P1588A	K10-9•13他		13			
P1613A	K11-8		14			
P1619A	K11-17		14			
P1622A	K11-6		14			
P1625A	K11-1		14			
P1627A	K12-5		14			
P1629A	K11-22		14			
P1637A	J11-15		15			
P1640A	J10-11		15			
P1643A	K11-21		14			
P1651A	L11-13		12			
P1656A	L11-14•19		12	-384	34	107-407
P1690A	L10-2		12			
P1701A	L9-7		12			
P1703A	L9-13		12			
P1714A	L10-17•18		12	-383	32	102-405
P1719A	L9-18		12			
P1726A	L12-13		12			
P1728A	L12-13		12		83	167-433
P1767A	L10-15		12			
P1769A	K11-18•23		14			
P1774A	L12-6		12			
P1808A	L10-4		12			
P1812A	L9-5		12		33	105-406
P1824A	L12-8		12			
P1840A	L13-20		12	-384	34	107-407
P1860A	K12-13•14他		14	-384	33	106-406
P1882A	J12-15		15			
P1891A	L13-24		12		33	105-406
P1901A	J12-14•19		15		34	107-
P1902A	J12-14		15			
P1907A	J12-12		15			
P1920A	J13-6		16			
P1921A	J13-1		16			
P1922A	J13-1,J14-5		16			
P1927A	J14-10		16			
P1930A	L13-8		12		33	105-
P1932A	J12-8		15			
P1933A	J12-8		15		34	106-407
P1935A	J12-12•13		15		34	107-
P1948A	J12-3		15			
P1949A	J13-18		16		34	108-407
P1965A	J12-13		15	-384	34•82	107•163-431
P1966A	J12-14•19		15		34	107-
P1972A	J12-6•11		15			
P1974A	L11-23		12			
P1978A	L8-11		12			
P1992A	L12-23		12	-384	34	107-407
P2520A	K8-1		13			
P2522A	J6-3		15			
P2525A	K7-20		13			
P2526A	L8-9		12		33	104-405

集落跡１（その10）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
P2531A	L7-9		11			
P2532A	L5-22		11			
P2541A	L6-10		11			
P2546A	L5-6		11			
P2553A	K5-10		13		33	105-406
P2563A	K5-8		13			
P2564A	K5-2		12		33	105-406
P2568A	K5-23		13			
P2569A	J5-12		14			
P2570A	J5-18		15			
P2571A	J5-19		15		33	104-406
P2575A	J5-2		14			
P2578A	L8-2		12		33	104-405
P2585A	L5-21		11		33	104-405
P2590A	J5-7		14			
P2594A	K6-19		13			
P2598A	J6-3		15			
P2599A	L8-3		12	-383	32	102-
P2603A	K6-22		13			
P2606A	K7-5•10		13			
P2614A	L5-22		11			
P2615A	K5-3		13		33•34•82	106•108•163-406•407•431
P2634A	K6-14		13			
P2635A	K6-18		13			
P2638A	L6-19		11		33	104-406
P2660A	L8-23		12		33	104-406
P2678A	K6-1		13			
P2679A	K7-9		13			
P2686A	K7-9		13			
P2688A	K6-2		13			
P2693A	J4-7		14			
P2702A	K5-3		13		33	105-406
P2706A	L7-23		12			
P2711A	K7-7		13			
P2728A	L8-25		12			
P2729A	L8-20		12			
P2733A	K5-2•3		13			
P2744A	K4-6,K5-10		12			
P2747A	K5-1,K6-5		12			
P2748A	J6-1,K6-21		15			
P2749A	J5-2		14			
P2751A	J4-2		14			
P2759A	K7-12•17		13		82	163-
P2762A	K5-3		13			
P2765A	J5-13		15			
P2772A	L8-18		12			
P2779A	L8-12		12			
P2783A	K6-14•19		13			
P2784A	K7-13		13			
P2787A	K7-14•19		13			
P3045A	J13-8		16			
P3049A	K12-21		14			

集落跡１（その11）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
P3059A	L13-24		12			
P3068A	K13-24		14			
P3074A	J13-9		16			
P3079A	J13-4		16			
P3090A	K12-6		14			
P3130A	K13-23		14		33	106-406
P3131A	K12-7		14		33	106-
P3132A	K13-22		14			
P3210A	O8-17・22		9			
P3212A	J5-1,K5-21		14			
SX13B	Q7・8		19		34	107-407
SX44A	N8		19		82	163-
SX87A	N10		19	-388	34	109-
SX101	N5		19		42	125-413
SX312A	N11		19		34	109-
SX340	M6		19		34	108-
SX406A	M8		19			
SX587A	N8		19		82	163-
SX644A	M9		19			
SX658A	N9		19		34	108-407
SX715B	J12		19			
SX1172A	J4		19	-389	35	109-407
SX1327A	K5		19		34	108-407
SX1379A	L6		19	-388	34	109-407
SX1439A	J6		19	-389	35	109-
SX1511A	J11		19			
SX1634A	J10・11		19		35	110-407
SX1645A	L11・12		19		35	109-
SX1700A	L9・10		19		35	109-
SX1791A	L12		19		35	109-407
SX2556A	K5		19		34	108-407

集落跡２（その１）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SI160B	G01	182		216-472	55	220-477
SK154B	F02-7・2他		6	217-474		
SK161B	I03-23・24他		6	217-474	55	220-
SK162B	I04-7・6		2	217-472・473	55	220・221-477
SK165B	H02-5・10		2	217-473		
SK186B	I03-16,I02-20他		2	217-473	55	220-477
SK187B	I03-16・21		2	217-473	55	220-477
SK395B	J03-2		6	217-474		
SK565B	M1-7		6	217-473		
集石428B	J03-10	183		217-474・475		
一括土器254B	J06-17	183		-475	61	234-484
一括土器429B	J03-5	183		-475	56	222-478
一括土器555B	N03-6,N02-10	183			56	222-478
捨て場B	G04,H05・04,I06・05	184		218-475	56～58・61・85	222～229・234・237-478～481・484・485
捨て場B（SX333B）	H04		20			
捨て場D	M03・02,N04～02	184		219-476	58・59・61・85	229・230・234・235・237-482・484・485

集落跡２（その２）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
P184B	I02-14•19		16			
P194B	I03-6•7他		16		56	221-
P205B	I03-3		16		56	221-478
P208B	I03-13		16			
P209B	I03-18•19		16			
P216B	I04-16		16		56	221-478
P234B	I04-9•10		16			
P250B	J05-22		16		56	222-478
P293B	J06-12•17		16			
P294B	J06-12•17		16			
P349B	I04-3		16		56	221-
P365B	K05-8		16			
P369B	J02-14		16			
P389Ba	J04-18		16	-474	55	220-477
P389Bb	J04-18		16	-474		
P407B	J04-7		16			
P418B	J04-18		16			
P451B	J04-19		16			
P462B	L03-10		16		56	221-477
P469B	L03-7		16			
P569B	N03-11•12		16		56	221-478
SX134B	H1		20	-476	56	221-478
SX136B	I1		20		56•85	222•237-485
SX178B	I02		20	-476	56	221-
SX214B	I03		20		56	221-478
SX227B	I04		20		56	222-478
SX353B	K04		19		56	221-478
SX427B	J04		19		56	222-478
SX508B	M03		19	-476	56	222-
SX545B	N02		19		56	222-
SX547B	M02,N02		19		85	237-
SX559B	O04		19		56	222-478

集落跡３（その１）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SI2007A	J17,K17	201		254-500	63・85	260•269-506•510
SI2088A	J18,K18	200		252-501		
SI3171A	J15•16,K15•16	200•201		253-499	62	260-506
SI3172A	H17,I17•18	202		256-501	62	260-506
SI3173A	K17•18,L18	200		252-499	63	260-506
SI3174A	J17•18	201•202		255-500	63	260-506
住居跡2031A	J15-22	202		257-502		
SK395A	Q16-11,Q17-15他		7	257-503	63	260-506
SK399A	Q17-3•8		7	258-503	63	260-506
SK811A	O17-17•18		7	257-502	63	260-506
SK860A	M17-22•23		7	258-		
SK863A	N17-2,O17-22		7	258-503		
SK866A	M16-19•20		7	257-		
SK872A	N18-25		7	258-		
SK2048A	L17-3•8		7	257-502		
SK2049A	L16-6•7		7	257-502	63	260-506
SK2052A	L19-20•15		7	258-504		
SK2064A	I16-6•7他		7	257-503		

集落跡３（その２）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SK2082A	I18-10•15		7	258-504		
SK2200A	L18-19•20		7	258-504		
SK2224A	L18-12•17他		7	257-503		
SK2230A	K19-3•4		7	258-504	63	260-506
捨て場C上層	M•N20, O～S19•20	203		259-505	64～67• 85	261～267•269-507～510
P2004A	J17-17		17		63	261-506
P2015A	K17-24		17		63	261-506
P2024A	K16-23•24		17		63	261-506
P2044A	K17-11		17	-504		
P2062A	I16-4•5他		17		63	261-506
P2073A	H17-10		17	-505		
P2083A	I17-19•20		17		64	261-507
P2100A	J17-12		17			
P2111A	I16-2•3		17		63	261-506
P2129A	L16-25		17			
P2133A	J15-24		17		63	261-
P2177A	K16-4,L16-24		17		63	261-506
P2196A	J18-10		17	-504		
P2208A	J18-5		17	-505		
P2243A	I16-4		17		63	261-506
P2249A	I17-2,J17-22		17		63	261-506
SX845A	M19		20		63	261-507
SX855A	M17		20	-505		
SX2038A	J15•16		20			
SX2039A	J15,K15		20		63	261-507
SX2043A	K17		20		64	261-507
SX2085A	J18,K18		20	-505	64	261-507
SX2090A	K18,L18		20		64	261-507
SX2122A	K16,L16		20		64	261-507

集落跡４（その１）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SI368A	P16,Q16	217		274-514	68	279-520
SB351A	Q16	218		275-515		
SB354A	Q15•16	218		275-515	69	279-520
SB375A	R15	217		274-514	68•69	279-520
SK394A	Q17-4,R17-24他		7	276-515		
SK400A	R17-13•14他		7	276-		
SK801A	Q18-14•15		7	276-516		
SK802A	Q18-20		7	276-516	68	278-520
SK805A	P18-4,Q18-24他		7	276-516	69	279-521
SK815A	N19-15		7	277-517	68	278-520
SK825A	N18-24•25		7	277-516•517	68	278-520
SK826A	N18-20		7			
SK827A	N17-21,N18-25他		7	277-516		
SK828A	N17-21•22		7	276-516		
SK830A	N17-18		7	276-515•516	69	279-521
SK835A	N17-18		7	276-	69	279-521
SK849A	M18-14		7	277-		
SK870A	M18-5		7	276-		
SK874A	M18-5		7	277-517	68	278-520

集落跡４（その２）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
捨て場C下層	M•N20,O～R19•20,S19	218•219		259-517～519	69～75•77•85	280～291•294-521～528
土器集中地点	L18•19	219		-519	68•75～77	278•279•291～294-520•527•528
土器集中地点（一括土器2186A）	L18	219		-519	68	278•279-520
土器集中地点（一括土器2187A）	L18	219		-519	68	278-520
P388A	R18-15•20		17			
P816A	N19-20•25		17		69	279-521
P841A	N17-7•12		17			
P846A	M18-11		17			
P857A	M17-8		17		68	278-520
P2099A	J17-6•7		17		69	279-521
SX342A	O13		20		69	279-521
SX393A	N16,O16		20		69	279-521
SX814A	N19		20		69	279-521

A地区

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SK22B	M22-14•15		8	301-535		
SK781B	R20-10		8	301-535		
集石782B	Q20-13	223		301-535		
埋設土器783B	O20-12•13	223		301-535	78	305-541

E①地区

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SK100C	0E03-11,0E02-15		8	301-536		
SK101C	0E04-2		8	301-535•536		
P114C	0E03-9•14		17			

E②地区

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SK11C	0F6-15		8	301-537	78	305-541
SK20C	0E4-8•9他		8	301-536		
P260C	0E7-25		17		78	305-
P262C	0F7-10		17		78	305-
SX16C	0F7		20		78	305-

E③地区（その１）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SI31C	0J19,0I19	225		302-537	78	305-541
SK69C	0L19-20		8	303-539	78	306-541
SK88C	0K20-19		2	303-538		
SK188C	0L19-16,0L20-20		2	303-538		
SK209C	0K18-3•8他		8	304-539		
SK237C	0J18-19•20		8	303-538		
SK238C	0J17-11		8	303-538		
SK239C	0J17-16,0J18-20		8	303-538		
SK240C	0K17-3,0J17-23他		8	304-539		
SK241C	0K19-8•9		8	304-539		
SK242C	0K19-8		8	304-540		

E③地区（その２）

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SK245C	0K17-15•20		8	303-539	78	306-541
SK248C	0L18-2•3		8	303-538	78	306-541
SK251C	0L19-5,0K19-25他		2	303-	78	306-
埋設土器214C	0M15-12	226		-540	78	306-541
一括土器30C	0K19-12•13	226		304-540	78	306-541
埋没谷	0M～0K16•17	226		304-540	78•79	306～308-542
P206C	0K17-7		18		78	306-541
P208C	0K18-10		18			
P212C	0J18-7		17			
P213C	0J18-6		17			
P216C	0J18-7		17			
P217C	0J18-2		17			
P218C	0J18-1		17			
P222C	0J18-15		17		78	306-541
P230C	0K18-15		18		78	306-
P231C	0K18-14•15		18		78	306-541
SX32C	0L18		20			
SX67C	0L19		20		80	308-542

E④地区

遺構名	位置	本文	観察表	図版（図面-写真）	出土土器 観察表	出土土器 土器図版（図面-写真）
SK234C	0G24-4•5		2	304-540	80	308-542
P235C	0G24-5•10		18			
P236C	0G23-1		18			
P249C	0G24-5•10		18	-540	80	308-542
P250C	0F24-24		18	-540	80	308-542
P263C	0F23-16•21		18			
P264C	0F23-11,0F24-15		18			

報告書抄録

書　名	清水上遺跡Ⅱ
副書名	関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第72集
編著者名	鈴木俊成・寺崎裕助・加藤正樹・高橋一功・大杉真実
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒951　新潟県新潟市一番堀通町5923－46　TEL 025－223－5642
発行年月日	西暦1996年3月29日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
清水上遺跡	新潟県北魚沼郡 堀之内町大字根 小屋字清水上 5233ほか	15－442	19	37度 15分	138度 82分	一次調査 19900508～19900524 二次調査 19900903～19901129 19910422～19911130 19920413～19921204 19930412～19930910	38,800㎡	道路（関越自動車道堀之内インターチェンジ建設に伴う事前調査）

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
清水上遺跡	集落跡	縄文時代中期前・中葉（集落跡1）	住居跡（65軒）・フラスコ状土坑（27基）・土坑（106基）・埋設土器（7基）・立石（16基）・遺物破棄場（1か所）	縄文土器・土製品・石器・石製品	環状集落 土器は北陸系が多い 石器は打製石斧・板状石器・三脚石器多出
		縄文時代中期前葉（集落跡2）	住居跡（1軒）・フラスコ状土坑（4基）・土坑（10基）・集石（1基）・遺物破棄場（2か所）	縄文土器・土製品・石器・石製品	土器は北陸系が8割
		縄文時代中期初頭（集落跡3）	住居跡（7軒）・土坑（15基）・ピット（16基）・遺物破棄場（1か所）	縄文土器・土製品・石器・石製品	
		縄文時代前期前半（集落跡4）	住居跡（4軒）・土坑（15基）・遺物破棄場（1か所）	縄文土器・土製品・石器・石製品	根小屋式土器設定 石錘多数出土
	散布地	縄文時代早期～晩期（A地区）	土坑（2基）・埋設土器（1基）・集石（1基）	縄文土器・土製品・石器	
		縄文時代早期～晩期（E地区）	住居跡（1軒）・フラスコ4土坑（14基）・埋甕（1基）	縄文土器・土製品・石器・石製品	丸ノミ形石斧出土

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第72集

関越自動車道

堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書

清水上遺跡Ⅱ（本文編）

平成8年3月28日印刷

平成8年3月29日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-70　新潟市新光町4－1
電　話　025（285）5511

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒951　新潟市一番堀通町5923－46
電　話　025（223）5642
ＦＡＸ　025（228）1762

印　刷　㈱第一印刷所
新潟市和合町2丁目4番18号
電　話　025（285）7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第72集 『清水上遺跡Ⅱ』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	３７度１５分	３７度１５分０９秒
抄録	東経	１３８度８２分	１３８度５５分４４秒